山形県山形市埋蔵文化財調査報告書第30集

山形城三の丸跡
（城北遺跡）
発掘調査報告書

2009

山形市教育委員会

山形県山形市埋蔵文化財調査報告書第30集

山形城三の丸跡（城北遺跡）発掘調査報告書

山形市教育委員会

山形城三の丸跡（城北遺跡）

発掘調査報告書

平成21年 3 月

山形市教育委員会

序

本書は平成20年度に実施した城北遺跡の発掘調査結果をまとめたものです。城北遺跡は、山形市立第七小学校の敷地内に所在します。第七小学校は昭和８年に建築された建物で、老朽化のために校舎の改築とグランド整備が予定されていました。

小学校敷地は「山形城三の丸跡」の範囲内に位置しており、敷地北側は三の丸の堀に隣接していると推定されていたことから、教育委員会では改築工事に先立ち試掘調査を実施しました。この遺跡は、その結果新たに発見された平安時代の遺跡です。

教育委員会では、開発事業と埋蔵文化財保護について関係機関と協議を行ない、記録保存を目的とした緊急発掘調査を実施することになりました。調査では、山形城三の丸堀跡や、屋敷地を区画したと推定される溝跡などの江戸時代の遺構や遺物のほか、平安時代の遺構や遺物も確認され、中でも県内では初となる石製「私印」が出土しました。「私印」はおおよそ９世紀中頃の所産と推定され、その他の遺構・遺物も含めて当時の社会情勢を研究する上で貴重な成果を得ることが出来ました。

本書が、埋蔵文化財の保護と啓蒙のために、そして皆様の郷土史探求の一助としてご活用いただければ誠に幸いです。

最後になりましたが、調査にあたって埋蔵文化財の保護に特段のご理解をいただき発掘調査に多大なご協力をいただきました山形市立第七小学校をはじめ、事業者や工事関係者の皆様並びに関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成21年３月

山形市教育委員会

教育長　後藤　恒裕

例　言

1　本書は平成20年度に実施した「山形城三の丸跡（城北遺跡）」の緊急発掘調査の報告である。

2　調査は山形市教育委員会が実施した。

3　調査要項は以下の通りである。

遺　跡　名　山形城三の丸跡（やまがたじょうさんのまるあと）・城北遺跡（じょうほくいせき）
所　在　地　山形市城北町二丁目
遺跡番号　山形県中世城館遺跡番号201－002・平成17年度新規
現地調査　平成20年５月７日～９月30日
整理作業　平成20年10月21日～平成21年３月31日
調査主体　山形市教育委員会
調査実施機関　山形市教育委員会社会教育課
調査担当者　課　長　齋藤　悟　課長補佐　冨木慶太郎
文化財保護係長　小野　徹　主　任　須藤　英之（調査主任）　國井　修
臨時職員　長岡由梨子　齋藤　隆介
調査指導　山形県教育庁文化遺産課

4　本書の作成は須藤英之・國井修・長岡由梨子があたり、執筆は須藤・國井が行った。執筆分担は以下の通りである。なお、出土した「私印」について、東北芸術工科大学准教授北野博司・山形大学准教授三上喜孝氏の両氏よりご教示をいただいた。また、出土石製品の石材については山形県立博物館の石山泰規・伊藤修の両氏よりご教示をいただいた。

Ⅰ・Ⅲ：國井　Ⅱ・Ⅳ～Ⅴ：須藤

5　発掘調査及び出土遺物の整理にあたっては以下の方々から御協力いただいた。記して感謝申し上げる。（敬称略・順不同）

伊藤桂子　栗原清子　栗原武夫　笹利幸　三部秋夫　富沢啓広　荒井治良　芦名久子　佐々木郁子　深瀬美貴子　小此木真理　河村美佳　高柳俊輔　海藤元　村上詩乃　阿部幸雄　清水理太郎　高橋静　村松英里菜　西田忠光

揚妻昭一郎（最上義光歴史館）　丸吉繁一（山形県教育庁文化遺産課）　小嶋康広（山形県教育庁文化遺産課）　押切智紀（山形県立博物館）　長橋至（財団法人山形県埋蔵文化財センター）　伊藤邦弘（財団法人山形県埋蔵文化財センター）　庄司隆志（財団法人山形県埋蔵文化財センター）　吉田満（財団法人山形県埋蔵文化財センター）　髙桑登（財団法人山形県埋蔵文化財センター）　菅原哲文（財団法人山形県埋蔵文化財センター）　髙橋拓（山形大学大学院生）　北野博司（東北芸術工科大学）　手代木美穂（東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター）　三上喜孝（山形大学）　原明芳（長野県立歴史館）　三春誠

6　委託業務は下記の通りである。

基準点測量：株式会社パスコ
補助業務：株式会社千歳建設

7　出土遺物、調査記録類については、山形市教育委員会で一括保管している。

凡　例

1　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は以下の通りである。
　ＳＩ：竪穴住居跡　ＳＤ：溝跡・堀跡　ＳＰ：不明柱穴　ＳＸ：性格不明遺構
　ＳＭ：集石遺構　Ｓ：礫　Ｐ：土器　Ｗ：木
2　遺構番号は現地調査段階での番号を報告書においても踏襲した。
3　本書で使用した地形図等は以下の通りである。
　第２・３図　国土地理院発行1/50,000地形図『山形』　ＮＪ－54－21－11を1/75,000に縮小
　第５図　山形市発行1/2500山形広域都市計画図を1/12,500に縮小
4　遺跡概要図・遺構実測図中の方位は真北を示している。
5　グリッドの南北軸はＮ－10°　9′　26″　－Ｅを測る。
6　遺構実測図は、１/20、１/40、１/200その他の縮図で採録し、各々スケールを付した。
7　遺構実測図中において、炭確認範囲は（□）、焼土・白色粘土確認範囲は（■）で示している。
8　遺構実測図中の水糸レベルは標高を表す。
9　土層観察において、遺跡を覆う基本層序については、ローマ数字で表している。
10　基本層序及び遺構覆土の色調記載については、『新版土色帳』(小山･竹原：1997）に拠った。
11　遺物実測図は１/３その他の縮図で採録し、各々スケールを付した。
12　遺物実測図中の土器において、断面白抜きは土師器、断面黒ベタが須恵器、断面（□）が赤焼土器、断面（■）がかわらけを表す。また、内外面の黒色化処理やスス痕跡を網掛けで表している。その他、必要に応じて凡例を付している。
13　遺物観察表中の計測値において（）内は図上復元による推定地を、〔〕は残存値を、－は計測不能を示す。単位は㎜を使用している。また層位欄のＹは床面を表す。
14　遺物番号は本文・表・挿図・写真図版とも一致している。
15　遺物注記は、H20ジョウホク(グリッド)(遺構番号)(層位)(登録番号)の順で記載している。
16　出土陶磁器の年代観及び時期区分の表現については、下記の文献に依った。
　・大橋康二2000「Ⅰ　九州陶磁概論」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
　・財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター2001『瀬戸大窯とその時代』
　・上田秀夫1982「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』第２号
　なお、全体の文責は筆者である須藤にある。

目　次

Ⅰ　遺跡の立地と環境 …… 1
1　地理的環境 …… 1
2　歴史的環境 …… 1

Ⅱ　調査の経緯 ……12
1　調査の経過 ……12
2　調査の方法と経過 ……13

Ⅲ　遺跡の層序 ……18

Ⅳ　遺構と遺物 ……20
1　遺構の分布 ……20
2　遺物の分類 ……20
3　近世の遺構と遺物 ……22
4　奈良～平安時代の遺構と遺物 ……29
5　古墳時代の遺構と遺物 ……34
6　遺構外出土の遺物 ……35

Ⅳ　総括 ……77
1　調査の概要 ……77
2　近世の遺構及び遺物について ……77
3　奈良～平安時代の遺構及び遺物について…78
4　古墳時代以前の遺構及び遺物について……79
参考文献 ……79
報告書抄録 ……81

表

表１　遺跡地名表……５
表２　山形藩主一覧……11
表３　発掘調査工程表……14
表４　整理作業工程表……14
表５　かわらけ・瓦質土器観察表……70
表６　陶磁器観察表……70
表７　瓦観察表……72
表８　石製品観察表……73
表９　金属製品観察表……73
表10　土製品観察表……73
表11　土師器・須恵器
　・赤焼土器観察表……74
表12　古式土師器・弥生土器観察表……76

挿　図

第１図　周辺城館分布図……３
第２図　古代集落分布図……４
第３図　発掘調査区域図……15
第４図　城北遺跡調査区設定図……16
第５図　調査区グリッド設定図……17
第６図　基本層序図……19
第７図　かわらけ・土師器・須恵器
　・赤焼土器器形分類図……36
第８図　遺構配置図(近世以降)……37・38
第９図　遺構配置図(近世以降)……39・40
第10図　SD28堀跡AJ・AK－１・２
　グリッド石組……41
第11図　SD28堀跡断面図(１)……42
第12図　SD28堀跡断面図(２)……43
第13図　SD28堀跡断面図(３)……44
第14図　SD28堀跡出土遺物……45
第15図　SD１溝跡AL・AM－１・２
　グリッド石組……46
第16図　SD５溝跡石組……47
第17図　SD１溝跡断面図(１)……48
第18図　SD１溝跡断面図(２)
　・SD５溝跡断面図……49
第19図　SD１溝跡出土遺物(１)……50
第20図　SD１溝跡出土遺物(２)……51
第21図　SD１溝跡出土遺物(３)……52
第22図　SD５溝跡出土遺物……53
第23図　SP６不明ピット……54
第24図　SP６不明ピット出土遺物……55
第25図　SP７～10不明ピット……56
第26図　SP11・12不明ピット……57
第27図　SI17竪穴住居跡……58
第28図　SI17竪穴住居跡出土遺物(１)……59
第29図　SI17竪穴住居跡出土遺物(２)
　・SX18性格不明遺構出土遺物…60
第30図　SI22竪穴住居跡……61
第31図　SI30竪穴住居跡……62
第32図　SI22・SI30竪穴住居跡
　出土遺物……63
第33図　SI31竪穴住居跡……64
第34図　SI40竪穴住居跡……65
第35図　SI31竪穴住居跡出土遺物(１)……66
第36図　SI31竪穴住居跡出土遺物(２)
　・SI40竪穴住居跡出土遺物…67
第37図　SP41不明ピット
　・同出土遺物……68
第38図　遺構外出土遺物……69

図　版

図版１　調査区遠景/調査区南側完掘状況
図版２　SD28（AF－１～３）西壁断面
　　/SD28（AJ～AK－１）北壁断面
図版３　調査区基本層序（１）
図版４　調査区基本層序（２）
図版５　SD28調査状況（１）
図版６　SD28調査状況（２）
図版７　SD28調査状況（３）
図版８　SD28調査状況（４）
図版９　SD１調査状況（１）
図版10　SD１調査状況（２）
図版11　SD１調査状況（３）
図版12　SD１調査状況（４）
図版13　SD１調査状況（５）
図版14　SD５調査状況
図版15　SP６調査状況
図版16　SP７～12・16調査状況（１）
図版17　SP７～12・16調査状況（２）
図版18　SP７～12・16調査状況（３）
図版19　SI17調査状況（１）
図版20　SI17調査状況（２）
　　/SX18調査状況
図版21　SI22調査状況
図版22　SI30調査状況/SX38調査状況（１）
図版23　SX38調査状況（２）/SI31調査状況
図版24　SI31調査状況（２）
図版25　SI40調査状況
図版26　SP41調査状況/遺構完掘状況
図版27　SD28出土遺物（１）
図版28　SD28出土遺物（２）
　　/SD１出土遺物（１）
図版29　SD１出土遺物（２）
図版30　SD１出土遺物（３）
図版31　SD１出土遺物（４）
図版32　SD１出土遺物（５）
　　/SD５出土遺物（１）
図版33　SD５出土遺物（２）
　　/SP６出土遺物（１）
図版34　SP６出土遺物（２）
　　/SI17出土遺物（１）
図版35　SI17出土遺物（２）
　　/SX18出土遺物/SI22出土遺物
図版36　SI30出土遺物
　　/SI31出土遺物（１）
図版37　SI31出土遺物（２）
　　/SI40出土遺物
図版38　SP41出土遺物/遺構外出土遺物
図版39　「水野氏時代山形城内絵図」
　　（個人蔵）
図版40　「最上氏時代在城諸家中町割圖」
　　（山形県立図書館蔵）

Ⅰ　遺跡の位置

1　地理的環境

山形市は山形県の中部東側、県域を貫流する最上川の流域に並ぶ盆地列の一つである山形盆地南半に位置する。東側は奥羽脊梁山地に属する蔵王及び面白山山地の西面を、西側は白鷹山地の一部を含んでいる。総面積は約382平方㎞で、市域の約７割が山地及び丘陵地地帯となっている。市域の最高点は蔵王熊野岳（標高1840.5m）で最低点は市域北西端の大字中野目（標高約92m）である。

市域は、大きく奥羽山地域・山形盆地域・白鷹山（西部丘陵）地域の３つの地域に区分されている。本遺跡の所在する山形盆地域は、東側を市南東部より北流する馬見ヶ崎川及び市北東部の二口峠付近より西流する立谷川の形成した扇状地で占められている。西部及び北西部では、南蔵王に源を発し市南西部から北流する須川と白川（馬見ヶ崎川下流）の沿岸に氾濫原が広がり低地帯を形成している。この低地帯には上記河川の旧流路に起因する自然堤防が点在している。本遺跡付近は馬見ヶ崎川の形成した扇状地の扇端部から扇央部にあたり、標高は125mを測る。現在の馬見ヶ崎川は近世初期に山形藩主鳥居忠政により改修された流路とされており、近世初頭頃は本遺跡北方の下条町の南側を西流していたと推定されている。よって本遺跡はちょうどこの旧馬見ヶ崎川の左岸の自然堤防上に位置していたと推定される。遺跡周辺は南東から北西へ緩やかに傾斜しており、区画整理前には水田地帯であったことが明治期の地形図から読み取ることができる。

また、今回の調査区は山形城三の丸の堀及び土塁付近に相当するが、周辺住民の聞き取りによれば堀跡は近代まで落ち込みとして存在しており、夏場は付近の子どもたちが水浴びをして遊んだという事から、かなりの地下水の湧出があったと想像される。加えて下条町付近には昭和初期まで多数の井戸が掘られ、生活用水及び農業用水として用いられたという。現在では工業用水の汲み上げにより地下水位が下がってしまい、検出された堀底から水が湧くことはなかったが、江戸期においては馬見ヶ崎川の流路が変更された後にも自然湧水により堀には水が湛えられていたと推定される。

2　歴史的環境

山形城は、延文元年（1356年）に奥州大崎（現在の宮城県大崎市付近）より山形に入部した最上家の始祖である斯波兼頼がその原型を作ったといわれている。その後、最上家11代当主義光の時代（戦国時代末期）に整備改築したと云われ、当時は本丸（東西約144m、南北約133m）、二の丸（東西約433m、南北約474m）、三の丸（東西1553m、南北1617m）の三重の堀を有する大規模な平城であったといわれる。元和８年（1622年）、最上氏が改易されると、鳥居忠政が入部し山形城の大規模な改修を行っている。その範囲は二の丸までで、三の丸に関してはほとんど行われなかったと云われている。寛永13年（1636年）の鳥居家断絶以後、その後入部した保科正之以降は山形藩の石高は次第に減少していき、最後の藩主である水野氏時代は約５万石であったといわれる。このような過程の中で城の維持が困難となると、三の丸内は次第に畑地と

して利用されるようになり、幕末にはほとんどが畑となったようである。このような状況は発掘調査の結果からも確認され、山形駅西口再開発事業に伴う城南町及び双葉町遺跡の発掘調査では16～17世紀代の遺物が主体を占め、それ以降の遺物はほとんど出土しない状況を呈している。また明和４年（1767年）に入部した秋元氏は18世紀後半に山形城の改修を行い、二の丸大手門外の東方に「新御殿」を建設し、三の丸東側に侍長屋を建設している。

明治維新以後は廃城となり、明治３年（1870）に山形県が設置されると、三の丸堀が次第に埋め立てられていく。明治期には東半はほとんど埋め立てられ、昭和初期には完全に図上から姿を消している。西側の堀は明治末頃までは残っていたようであるが、次第に埋め立てられ昭和31年発行三千分の一都市計画図では、現在の双葉公園付近を除き、堀外周の小道によりその存在を示すのみとなった。現在、三の丸堀及び土塁の痕跡として最も顕著に残るのは、国指定史跡となっている歌懸稲荷神社（十日町）付近の土塁及び堀跡である。堀底から土塁上までの比高差約５ｍ、長さ約30ｍの土塁が現存しており、その外側には幅約10ｍ、深さ約３ｍの堀がまわっている。発掘調査では、平成14年度に山形市教育委員会が実施した山形市立第一小学校改築に伴う調査により三の丸東側、横町口北側の堀跡を、平成20年度に山形県埋蔵文化財センターが実施した県道東原村木沢線（春日町）に伴う調査により、三の丸西側、飯塚口付近の堀の一部を確認している。

今回調査を実施した地点は下条口から肴町口の間の部分で、ちょうど堀跡が北側へと屈曲する部分である。絵図には重臣の武家屋敷の記載はないが、付近に“元厩”の小字名が残る。

山形市立第七小学校は昭和８年に完成し、その敷地は三の丸土塁及び堀跡部分まで広がる。また付近は昭和９年から18年まで城北土地区画整理事業が実施され、当初は三の丸堀を緑地として残すこととしていた。しかしながら、大東亜戦争の勃発により施行期間が延長となり、財政難により土地を給料の代わりとして分けてしまい、一部山形市立第七小学校北側のみつばち公園の用地としてその痕跡を残すのみとなった。このような区画整理が行われたものの、付近には近世以降ほとんど変わらない街道筋が各所に残っており、往時の風景を偲ばせている。

今回の調査では近世の遺構の他、平安期の遺構・遺物が確認されている。本遺跡を含む山形市街地ではこれまで古代の遺跡は確認されなかったが、近年は市街地での発掘調査事例が増加し、奈良～平安時代に帰属する遺物の出土例が増加してきている。これまで山形市域の、特に馬見ヶ崎川扇状地については、扇端部から沖積平野にかけての湧水帯に遺跡が立地し、高位の、即ち扇端部から扇央部にかけては遺跡が立地しないと考えられてきた。しかしながら、近年では概ね標高120～130ｍ付近の現在の地形区分でいうところの馬見ヶ崎川扇状地の扇端部から扇央部にまで平安期の遺跡が確認されるようになった。山形県埋蔵文化財センターが平成20年度に発掘調査を実施した山形城三の丸跡（旅篭町付近）では、市南部松原地区に所在する９世紀の瓦窯である小松原窯跡産の瓦が出土し、官衙的集落の存在が示唆され、また同調査区では市内では出土例の少ない７世紀代の遺物が出土しており、これまでと様相の異なる古代集落の分布が徐々に明らかになりつつある。

79
76
80
82
83
50
33
24
47
62
20
88
89
19
13
64
12
177
99
11
100
96
6
1
2
101
3
103
106
4
105
5
127
107
119
126
111
110
123
125
142
115
132
166
133
131
156
134
176
0
500
1,000m
1:25,000

第１図　周辺城館分布図

第２図　古代集落分布図

表１　遺跡地名表（１）

番号	遺跡名	県遺跡番号(中世城館遺跡番号)	所　在　地	備　考
1	城北	H17登録	山形市城北町	
2	山形城三の丸	Ｈ７新規（201－002）	旧山形市街地	一部国指定史跡
3	山形城	1（201－001）	山形市霞城町字古城	国指定史跡。別称：霞ヶ城
4	城南町	Ｈ９新規	山形市城南町	別称:城南町一丁目､城南一丁目
5	双葉町	Ｈ９新規	山形市双葉町	
6	西根小但馬屋敷	Ｈ７新規（201－031）	山形市宮町１丁目	
7	薬師町五中	2	山形市薬師町一丁目８番地	別称：五中土師
8	宮町円応寺	2350	山形市宮町４丁目	
9	内城	18（201－040）	山形市鈴川町二丁目	
10	大野目	27	山形市大野目町字堅田	
11	山家楯	28（201－018）	山形市山家町字野伏山	
12	浜田館	Ｈ７新規（201－046）	山形市大野目字浜崎	別称：浜田元屋敷
13	風間楯	178（201－019）	山形市大字風間字砥切山	
14	中里	183	山形市大字中里38	
15	寺西	174	山形市大字風間字寺西	
16	北向	H13新規	山形市大字風間字北向、 大字青柳字一本木	
17	一本木Ａ	149	山形市大字青柳字一本木	
18	一本木Ｂ	150	山形市大字青柳字一本木	
19	青柳楯	151	山形市大字青柳	
20	伊達城	171（201－021）	山形市大字漆山字伊達の城	
21	南志田	H14新規	山形市大字漆山字南志田・大壇	
22	梅ノ木	Ｈ９新規	山形市大字漆山字梅ノ木	
23	一ノ坪	Ｈ９新規	山形市大字漆山字一ノ坪	別称：漆山一ノ坪
24	伊達城	235（210－017）	天童市大字清池字伊達城	
25	三千段	Ｈ７新規	天童市大字清池	
26	中里Ｂ	247	天童市大字長岡字中里	
27	永源寺	238	天童市大字清池字笠仏	
28	村東Ｂ	243	天童市大字清池字村東	
29	清池	Ｈ７新規	天童市大字高擶	
30	火矢塚	241	天童市大字清池字火矢塚	
31	清池西	248	天童市大字高擶字礼井戸	
32	入水	Ｈ７新規	天童市大字高擶	

表１　遺跡地名表（２）

番号	遺跡名	県遺跡番号(中世城館遺跡番号)	所　在　地	備　考
33	漆山館	Ｈ７新規（201－020）	山形市大字漆山	
34	北道上Ｂ	168	山形市大字漆山字北道上	
35	千手堂大門	140	山形市大字千手堂字大門	別称：千手堂
36	大明神	143	山形市大字青柳字大明神	
37	漆山長表	Ｈ８新規	山形市大字漆山字長表	
38	下柳Ｃ	154	山形市大字下柳	
39	境田Ａ	133	山形市大字長町字境田	
40	境田Ｄ	Ｓ56新規	山形市大字長町字境田	
41	境田Ｂ	134	山形市大字長町字境田	
42	境田Ｃ´	Ｓ56新規	山形市大字長町字境田	
43	境田Ｃ	135	山形市大字長町字境田	
44	見崎	159	山形市大字見崎53	別称：見崎土師
45	天神	137	山形市大字天神	
46	新井田	158	山形市大字中野字新井田	
47	同心屋敷	Ｈ７新規（201－033）	山形市天神町	
48	向河原	Ｈ２新規	山形市大字渋江字向河原	
49	渋江	160	山形市大字渋江字田中97	
50	渋江館	Ｈ７新規（201－029）	山形市大字渋江	
51	八幡田	172	山形市大字成安字八幡田319	
52	川前２	Ｈ13新規	山形市大字中野目字赤坂、 中山町大字長崎字川前	
53	上敷免	Ｈ16新規	山形市大字中野字上敷免	
54	川前	398	中山町大字長崎字川前	
55	川前飛び地	Ｈ13新規	中山町大字長崎字川前	
56	達磨寺	399　400	中山町大字達磨寺字達磨	
57	春日堂	157	山形市大字中野字上敷免152	
58	馬洗場Ｂ	Ｈ２新規	山形市大字中野字馬洗場	別称：中野
59	馬洗場Ａ	Ｈ２新規	山形市大字中野字馬洗場	
60	藤治屋敷	Ｈ２新規	山形市大字中野字藤治屋敷	
61	服部	156	山形市大字中野字服部	
62	中野城	139（201－026）	山形市大字中野字楯	
63	長表	Ｈ３新規	山形市大字今塚字長表	
64	今塚楯	Ｈ７新規（201－032）	山形市大字今塚	

表１　遺跡地名表（３）

番号	遺跡名	県遺跡番号(中世城館遺跡番号)	所　在　地	備　考
65	今塚	136	山形市大字今塚字壇の前	
66	八ツ口	Ｈ３新規	山形市大字中野字八ツ口	
67	河原田	Ｈ４新規	山形市大字河原田	
68	行才１	Ｈ３新規	山形市大字江俣字行才	
69	梅野木前１	Ｈ３新規	山形市大字梅野木前	
70	梅野木前２	Ｈ３新規	山形市大字梅野木前	
71	馬上台	Ｈ５新規	山形市大字馬上台	
72	熊ノ木	H10新規	山形市大字陣場新田字熊ノ木	
73	志戸田縄	H10新規	山形市大字陣場字志戸田縄	
74	塚田	126	山形市大字志戸田字茨田	
75	月山	H20登録	山形市船町字月山	
76	松下屋敷	302－004	中山町大字達磨寺字西屋敷	
77	墓戸	409	中山町大字金沢字墓戸77－２	
78	柳沢条里	405	中山町大字柳沢	
79	竹ノ花	302－007	中山町大字金沢字三条目	
80	銅屋敷	302－002	中山町大字金沢字銅屋敷	
81	前田	404	中山町大字金沢字前田404、405	
82	新館	355（301－012）	山辺町大字大寺字新館	
83	西光山館	352（301－011）	山辺町大字大寺字熊沢 （大字大寺字西光山）	
84	山辺北条里	356	山辺町大字大寺字上江、新田	
85	塚田	353	山辺町大字大寺字竹の花(塚田)	
86	蓮台寺	347	山辺町大字大寺字蓮台寺 （弁慶塚）	
87	諏訪原	348	山辺町大字大寺字諏訪原	
88	高楯城	346（301－013）	山辺町大字山辺字北町	
89	山野辺城	345（301－014）	山辺町大字山辺字楯　他	
90	柳清水	H11新規	山辺町大字山辺字庚段	
91	庚段	H11新規	山辺町大字山辺字庚段	
92	嶋之前	H11新規	山辺町大字山辺字嶋之前	
93	山辺南条里	394	山辺町大字三河、清水	
94	下反田	123	山形市大字下反田字小楯	
95	大曽根条里	121	山形市大字下反田字内城	
96	古楯	Ｈ７新規（201－025）	山形市大字古館	

表１　遺跡地名表（４）

番号	遺跡名	県遺跡番号(中世城館遺跡番号)	所　在　地	備　考
97	高橋	122	山形市大字古館字高橋274－１	
98	梅在家	H11新規	山形市大字下反田字梅在家	
99	椹沢楯ノ内	128	山形市大字志戸田字楯ノ内	
100	椹沢楯	Ｈ７新規（201－005）	山形市大字椹沢字下椹沢	
101	飯塚館	Ｈ７新規（201－004）	山形市大字飯塚字上飯塚	
102	愛宕山	119	山形市大字村木沢字愛宕山	
103	台の上楯	Ｈ７新規（201－007）	山形市大字村木沢字佐野	別称：佐野楯
104	金沢	H12新規	山形市大字村木沢字金沢	
105	村木沢楯	Ｈ７新規（201－006）	山形市大字村木沢字長岡	別称：長岡楯
106	局屋敷	Ｈ７新規（201－034）	山形市大字村木沢字悪戸	
107	門伝楯	Ｈ７新規（201－010）	山形市大字門伝字北沢	
108	樋渡	Ｈ２新規	山形市大字富神台字樋渡	
109	塩辛田	17	山形市大字柏倉字塩辛田	別称：塩辛田Ａ、Ｂ
110	館	20	山形市大字柏倉字館	
111	柏倉館	Ｈ７新規（201－045）	山形市大字柏倉字中丁	
112	坊屋敷	24	山形市大字柏倉字坊屋敷	別称：柏倉土師、柏倉
113	金池	146	山形市大字柏倉字金池	別称：大清水Ｋ
114	大清水	Ｓ52新規	山形市大字柏倉字大清水	
115	菅沢山本陣	Ｈ７新規（201－012）	山形市大字菅沢	
116	百目鬼	113	山形市大字百目鬼	
117	五日町	15	山形市五日町字長苗代	別称：石関
118	長苗代条里	13	山形市五日町字長苗代	
119	南館	Ｈ７新規（201－003）	山形市大字南館字おいせの前	
120	鉄砲町一丁目	H17登録	山形市鉄砲町一丁目	
121	山形西高敷地内	29	山形市鉄砲町１丁目15－64	
122	鉄砲町三丁目	H16新規	山形市鉄砲町三丁目154	
123	荒楯	46（201－023）	山形市荒楯町	
124	青田	48	山形市青田	
125	平清水館	Ｈ７新規（201－042）	山形市大字平清水	
126	三浦屋敷	12（201－022）	山形市松波二丁目十二柳 （大字小白川字向山）	
127	金谷館	Ｈ７新規（201－035）	山形市小白川４丁目	
128	小白川向山	11	山形市大字小白川字向山	別称：盃山

表１　遺跡地名表（５）

番号	遺跡名	県遺跡番号(中世城館遺跡番号)	所　在　地	備　考
129	釈迦堂裏	40	山形市大字釈迦堂字南在家	
130	千葉屋敷	37	山形市大字妙見寺	別称：妙見寺
131	楯山楯	Ｈ７新規（201－043）	山形市大字八森	
132	岩波館	Ｈ７新規（201－039）	山形市大字岩波	
133	飯田館	Ｈ７新規（201－017）	山形市大字飯田	
134	成沢城	63（201－014）	山形市蔵王成沢	別称：氏家館
135	泉出城	Ｈ７新規（201－015）	山形市大字成沢字久保田	
136	成沢西	Ｈ９新規	山形市桜田南	
137	吉原Ⅶ	H11新規	山形市吉原	
138	吉原Ⅳ	Ｈ９新規	山形市三つ江	
139	吉原Ⅱ	Ｈ８新規	山形市三つ江	
140	吉原Ⅲ	Ｈ９新規	山形市若宮	
141	吉原Ⅰ	Ｈ８新規	山形市吉原字若宮	
142	若宮の楯	108（201－024）	山形市大字吉原字館ノ内	別称：吉原館の内
143	吉原Ⅵ	H11新規	山形市柳原	
144	鏡ヶ渕	109	山形市前明石	
145	落合	110	山形市前明石	
146	二位田	105	山形市大字二位田	別称：堂の前
147	寺裏	107	山形市大字二位田	
148	萩原	101	山形市大字長谷堂字萩原	
149	山形元屋敷	H12新規	山形市大字片谷地字元屋敷	
150	沢田	83	山形市大字谷柏字沢田	別称：谷柏Ｙ、石田、谷柏
151	谷柏	85	山形市大字谷柏	谷柏式土器(古墳中期)標式遺跡。沢田遺跡包括。 別称:谷柏土師、皆川土師、谷柏集落、皆川下
152	谷柏Ｊ	84	山形市大字谷柏	別称：中谷柏、谷柏
153	上谷柏	H13新規	山形市大字谷柏字元上谷柏	
154	石田	82	山形市大字谷柏元上谷柏字石田	別称：石田土師、石田裏
155	高崎山	94	山形市大字谷柏	別称：上ノ山
156	谷柏館	Ｈ７新規（201－013）	山形市大字谷柏	
157	高崎	93	山形市大字谷柏	別称：高崎土師
158	片谷地	79	山形市大字片谷地	
159	横手区	75	山形市大字松原字横手	別称：松原
160	松原	66	山形市大字松原	

表１　遺跡地名表（６）

番号	遺跡名	県遺跡番号(中世城館遺跡番号)	所　在　地	備　考
161	オサヤズ窯	67	山形市大字松原1179－２他	
162	石原坂Ａ	70	山形市大字松原字石原坂1753－4	平成10年度登録抹消。
163	小松原窯	71	山形市大字松原字石原坂1753－12他	別称：石原坂Ｂ
164	長者屋敷	77	山形市大字松原字石原坂1733－17	
165	熊野堂窯	96	山形市大字谷柏字熊野堂	別称：ガラミキ
166	長谷堂城	104（201－011）	山形市大字長谷堂字城山	
167	百々山	99	山形市大字長谷堂字百々山	出土遺物市指定文化財。
168	漆坊	103	山形市大字長谷堂字漆坊	
169	風穴	97	山形市隔馬場字馬小馬	別称：隔馬場
170	久保手窯		上山市久保手	
171	西の宮	Ｈ５新規	山形市蔵王半郷字西の宮	
172	神尾Ｂ	53	山形市大字神尾	
173	三本木窯	57	山形市大字神尾字三本木	別称：神尾窯
174	神尾Ｃ	54	山形市大字神尾	
175	神尾Ｄ	55	山形市大字神尾	
176	上野館	Ｈ７新規（201－016）	山形市蔵王上野	別称：上野チャシ
177	落合楯	131（201－008）	山形市千歳二丁目沖の原 （落合沖ノ原の内楯の堀）	

表２　山形藩主一覧

城主名	官　　職	石高	前封地（万石）	入封・移封年月日	移封地（万石）
斯波兼頼	修理大夫（出羽探題）	不明	奥州大崎より入部	延文元年八月（1356）入部 延文二年（1357）築城	
最上直家	右京大夫	不明			
最上満直	修理大夫	不明			
最上満家	修理大夫	不明			
最上義春	右京大夫・修理大夫	不明			
最上義秋	右京大夫	不明			
最上満氏	治部大夫	不明			
最上義淳	左右衛門佐	不明			
最上義定	修理大夫	不明			
最上義守	出羽守・修理大夫	24			
最上義光	出羽守・少将	57			
最上家親	駿河守	57			
最上家信（義俊）		57		～元和八年八月（1622）	改易　近江・三河へ（１）
鳥居忠政	左京亮	24	岩木平（12）	元和八年九月（1622）～ 寛永十三年七月（1636）	
鳥居忠恒	左京亮	24			断絶　弟忠治・高遠へ
保科正之	肥後守	20	信州高遠（３）	寛永十三年七月（1636）～ 寛永二十年七月（1643）	会津若松（23）
（幕領）				寛永二十年七月（1643）～ 正保元年正月（1644）	
松平直基	大和守	15	越前大野（５）	正保元年正月（1644）～ 慶安元年六月（1648）	播州姫路（15）
松平忠弘	下総守	15	播州姫路（15）	慶安元年六月（1648）～ 寛文八年八月（1668）	下野宇都宮（18）
奥平正能	大膳守	9	下野宇都宮（11）	寛文八年八月（1668）～ 貞享二年六月（1685）	
奥平昌章	美作守	9			下野宇都宮（９）
堀田正仲	下総守	10	下総古河（10）	貞享二年六月（1685）～ 貞享三年七月（1686）	奥州白河（15）
松平直矩	大和守	10	豊後日田（７）	貞享三年七月（1686）～ 元禄五年七月（1692）	
松平忠弘	下総守	10	奥州白河（15）	元禄五年八月（1692）～ 元禄十三年正月（1700）	
松平忠雅	下総守	10			備後福山（10）
堀田正虎	相模守	10	奥州福島（10）	元禄十三年正月（1700）～ 延享三年正月（1746）	
堀田正春	内記	10			
堀田正亮	相模守	10			下総佐倉（10）
松平乗佑	和泉守	10	下総佐倉（７）	延享三年正月（1746）～ 明和元年六月（1764）	三河西尾（６）
（幕領）				明和元年六月（1764）～ 明和四年閏九月（1767）	
秋元涼朝	但馬守	6	武州川越（６）	明和四年閏九月（1767）～ 弘化二年十一月（1845）	
秋元永朝	但馬守	6			
秋元久朝	但馬守	6			
秋元志朝	但馬守	6			上州館林（６）
水野忠精	和泉守	5	遠州浜松（６）	弘化二年十一月（1845）～ 明治二年六月（1869）	
水野忠弘		5			廃藩

Ⅱ　調査の経緯

1　調査の経過

平成17年度に、山形市立第七小学校（山形市城北町二丁目９番37号）の改築工事が計画された。事業範囲内が周知の埋蔵文化財包蔵地「山形城三の丸跡」(山形県中世城館遺跡番号　201－002）内に含まれることから、関係機関で取り扱いについて協議がなされた。それを受け、事業範囲内における埋蔵文化財の状況について確認を行うため、山形市教育委員会は平成17年８月９日に第七小学校敷地内で試掘調査を実施した（第４図)。結果、平成17年度ＴＴ２～４トレンチからは遺構・遺物ともに確認されず、旧グラウンド造成時に削平されたものと判断された。学校敷地北東部に設定した平成17年度ＴＴ１トレンチからは奈良～平安時代の遺構・遺物が確認されたため､「城北遺跡」(山形県遺跡番号　平成17年度新規発見）として遺跡発見の通知を行った（山形市教育委員会2005)。この段階では、新校舎建設が予定されたグラウンド敷地範囲内では埋蔵文化財が確認されなかったために今後の調整は不要だが、旧校舎解体後に新規グラウンド造成を行う部分については上記の城北遺跡範囲に含まれるため、別途埋蔵文化財の取扱いについて協議が必要な旨を連絡し、事業実施段階前の要協議事項とした。

平成19年度、山形市により市立第七小学校新校舎建設工事が実施され、引き続き旧校舎の解体及び新規グラウンド造成工事の平成20年度実施が具体化したことから、山形市教育委員会は平成19年10月29日に城北遺跡範囲の南及び西側への広がりを確認することを目的として、旧校舎中庭部分で再度の試掘調査を実施した（第４図)。東西方向に平成19年度ＴＴ１及びＴＴ２トレンチを設定し掘削を行ったところ、遺跡範囲の広がりは確認されず、範囲は学校敷地の北東角部分より北側に広がるものと推測された。

上記の結果を受け、山形市教育委員会はグラウンド造成事業の城北遺跡に係る部分について工事実施前に緊急発掘調査を行うことを目的として、教育委員会管理課施設整備室など関係各課と協議を行い、平成20年度に発掘調査を実施する事で合意が成された。補足ながら、調査区から西側で、学校敷地北側縁辺に存在が想定された三の丸堀跡の範囲確認のためにトレンチを設定し、本調査と併せて範囲確認調査を実施することとした。

これらの経過を経て、発掘調査の実施機関である山形市教育委員会社会教育課では、平成20年４月１日付で教育委員会管理課施設整備室の依頼を受け、発掘調査を実施することとした。

引き続き平成20年４月21日付教（社）第55号にて埋蔵文化財発掘の通知について県教育委員会へ進達を行い、平成20年４月23日付文遺第67号にて県教育委員会より「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の通知を受け取った。同日付教（社）第61号にて「埋蔵文化財発掘調査の実施について」の通知を県教育委員会宛て行った。その後の４月30日に市立第七小学校をはじめとする関係各機関と打ち合わせを行い、調査期間や方法などの実施計画と現状での問題点等について協議した。

現場における発掘調査は平成20年５月７日から９月30日の期間で実施し（表３)、報告書作成のための整理作業は平成20年10月20日～平成21年３月31日の日程で実施した（表４)。

現場調査後の平成21年３月に、本調査区の西側にあたるＺ～ＡＣ－１～２グリッドの範囲に

おいて新規グラウンド造成工事に係る暗渠掘削が実施され、それに併せて平成21年３月10日・３月16日に立会調査を行った。結果、掘削はグラウンド整備工事に関る造成土の範囲に収まるものであり、埋蔵文化財まで掘削が達しない事を確認した。

2　調査の方法と経過

発掘調査は、平成20年５月７日～９月30日までの期間で実施した。調査面積は、近世以降の遺構面と推定される上層部分が約750㎡、奈良～平安時代以前の遺構が検出された下層部分が約400㎡であり、上層部分と下層部分の合計の発掘調査面積は約1150㎡であった。

調査区を覆う座標は、調査区東辺の南北軸線に合わせて設定した（第５図）。南北をＹ軸の基準とし、それと直交する線をＸ軸とした。これらを基準として５ｍ四方の方眼（グリッド）を設定した。Ｙ軸は北から南に０～25まで、Ｘ軸は西から東にＡ～ＡＯまでの記号を設定し、グリッド名称を「Ａ－１」のように標記する事とした。方眼のＹ軸線は、真北方向に対してＮ－10° 9′ 26″ －Ｅを測る。遺物・遺構の帰属については北西グリッドを基準とした。

調査工程について、旧校舎解体工事との調整や残土置場の都合上、調査区をＸ軸－４のラインをおおむねの境界として南北に２分割して表土除去を行い、調査を行うこととした。

また、発掘調査と併行して、山形城三の丸堀跡の範囲確認調査を目的として、範囲確認調査東トレンチをＬ－３～５グリッドに、範囲確認調査西トレンチをＰ－３～５グリッドに設定し、調査を実施した（第４図）。

以下、城北遺跡の調査工程の概略を記す。

５月７日に南側調査区の設定及び重機掘削による表土除去作業に入った。５月９日に休憩所・仮設トイレの設置、発掘器材搬入・環境整備を行った。５月19日から人力による遺構面精査を開始した。その後、遺構検出に並行して検出状況の写真撮影・遺構登録・精査を行った。遺構精査については、任意で土層観察のためのベルトを設定し、各遺構の平面図や断面図の作成、遺物の検出および登録、写真撮影、土層注記などの記録作業、遺物取り上げなどを実施した。

６月30日より北側調査区の設定及び重機による表土除去作業に入った。引き続き遺構検出並びに検出状況の写真撮影・遺構登録・精査を行った。

９月10日に三の丸堀跡範囲確認調査東及び西トレンチを設定、重機による掘削を開始した。引き続き断面観察記録作成に着手し、９月18日に埋め戻しを行った。

９月19日に現地における遺構精査並びに記録作業を終了、同日より器材を撤収し始める。９月30日にて器材撤収を完了、現地における調査を全て終了した。

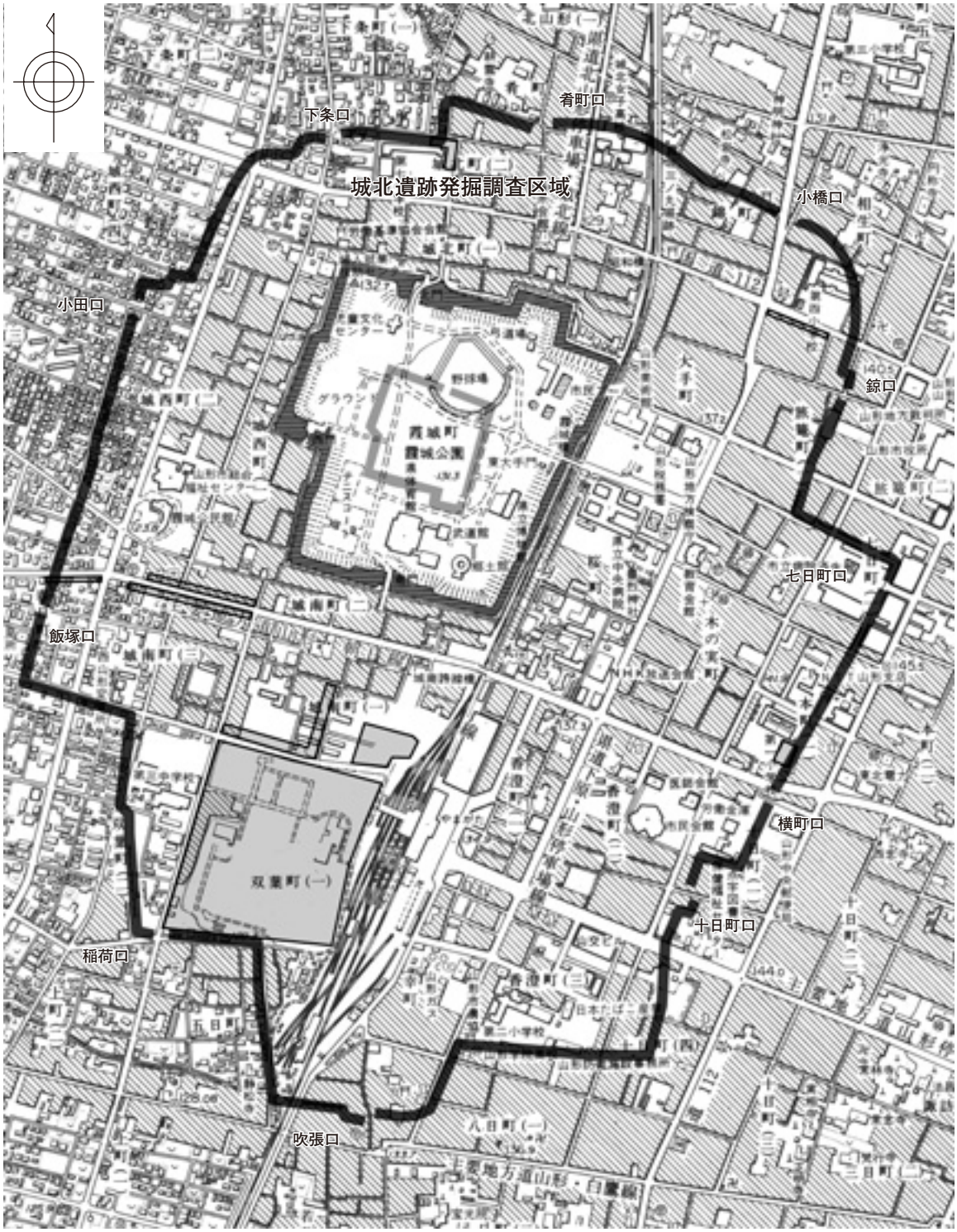
引き続き10月21日から報告書作成のための整理作業を開始し、平成21年３月31日にて整理作業を終了した。

表３　発掘調査工程表

月 / 作業内容	平成20年５月			６月			７月			８月			９月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
表土除去	■	■				■							■		
グリッド設定			■				■								
面整理･遺構検出		■	■			■	■								
遺構精査			■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
記録(作図･写真)			■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■

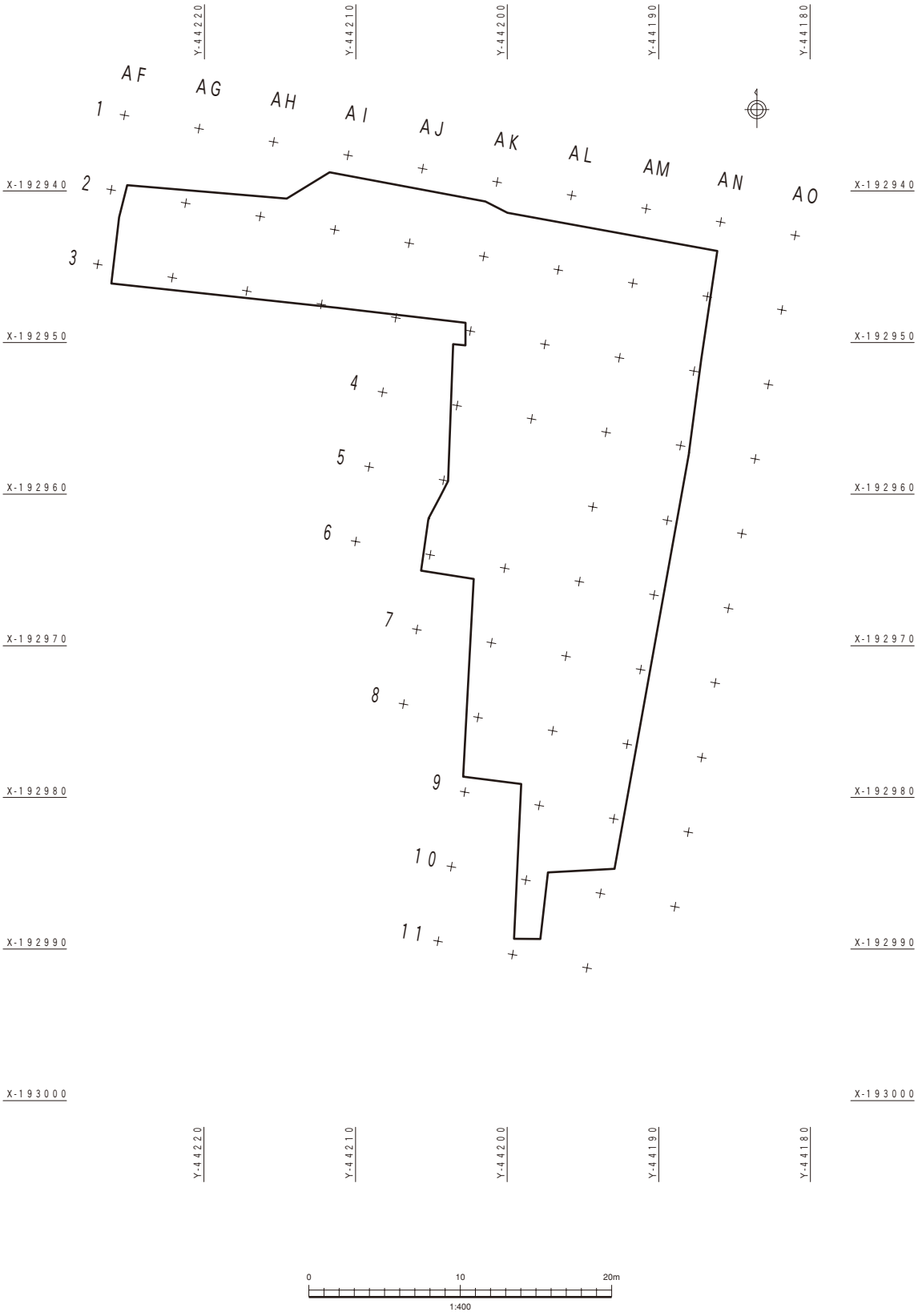
表４　整理作業工程表

月 / 作業内容	平成20年10月			11月			12月			平成21年１月			２月			３月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
写真･図面等整理	■	■	■	■														
遺物洗浄	■	■	■	■	■													
遺物接合・復元			■	■	■	■	■	■	■									
遺物実測・拓本						■	■	■	■	■	■	■	■					
トレース		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■				
図版作成				■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■				
遺物写真撮影						■	■	■		■								
原稿執筆					■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■			
入稿・校正																■	■	■
記録・遺物収納																	■	■


下条口
肴町口
城北遺跡発掘調査区域
小橋口
小田口
鍛口
七日町口
飯塚口
横町口
十日町口
稲荷口
吹張口
0
1000m
1:12,500
本丸堀
二の丸堀
三の丸堀
山形城三の丸内の主な発掘調査区域

第 3 図　発掘調査区域図

第 4 図　城北遺跡調査区設定図



第５図　調査区グリッド設定図

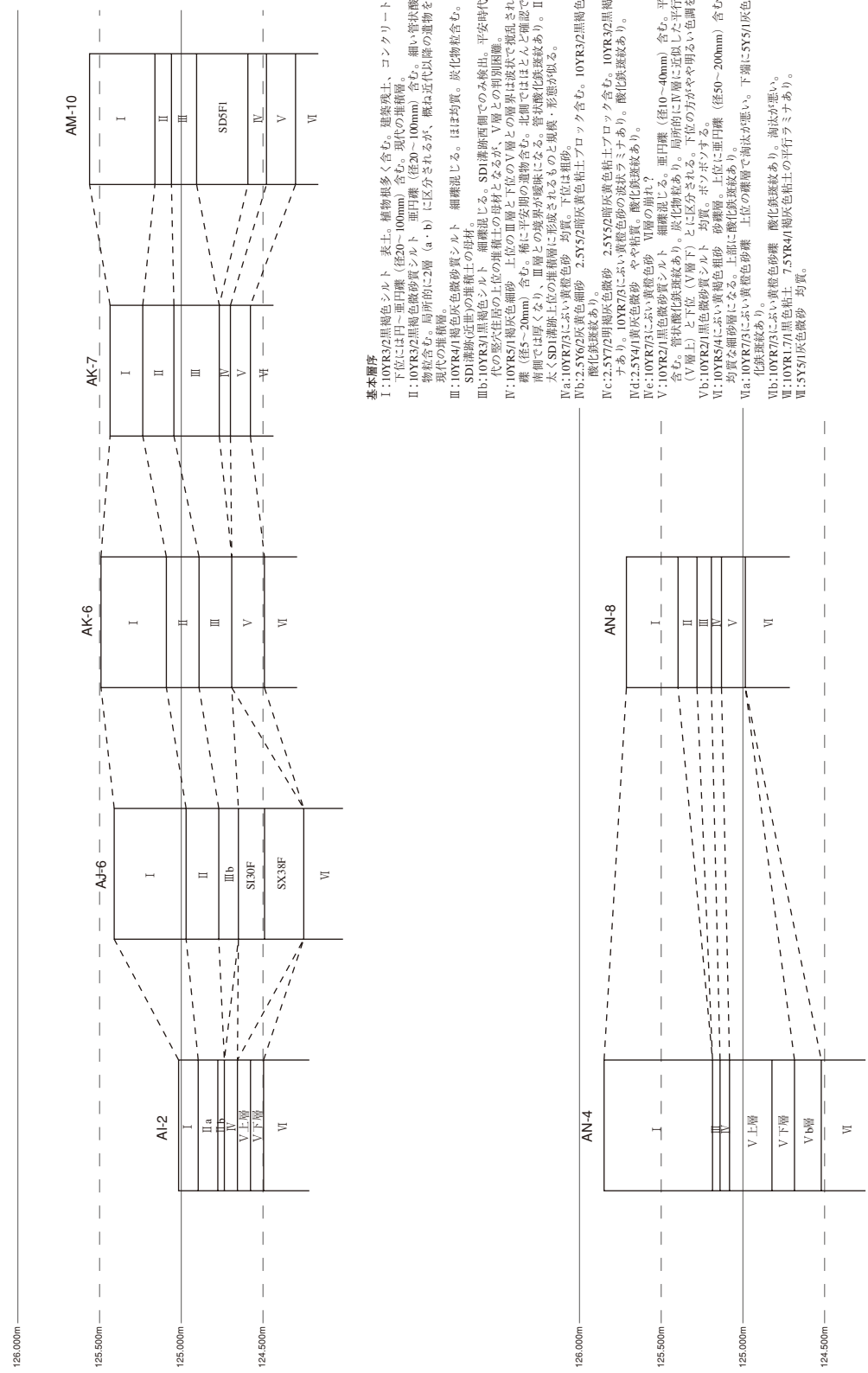
Ⅲ　遺跡の層序

調査対象地は学校敷地であったこともあり表土付近はかなりの範囲で撹乱されていた。よって遺構の検出面は一律ではなく、調査区南側においては付近の基盤層となる砂礫層（Ⅵ層）上面で、北側においては近世以降の堆積層（Ⅲ層）や近世以前の洪水砂（Ⅳ層）あるいは古代の堆積層（Ⅴ層）上面で検出するなど複雑な様相を呈している。地点によってはさらに細分しているが、概ね以下の８層に区分した。

Ⅰ層：概ね現代の人為堆積土を一括した。学校建設及び改修に係わる造成土からなる。
Ⅱ層：近代以降と推定される人為堆積土を一括した。Ⅰ層により撹乱される。旧校舎付近では、その建築の際の造成土と推定される。また付近住民の聴き取りによれば、戦中・戦後の耕作土やバラックといった仮設物設置の際の造成土も含まれると推定される。
Ⅲ層：近世以降と推定される自然堆積土。近世に帰属すると判断される溝跡上層の堆積土と同じ。調査区南側ではⅠ或いはⅡ層により削平される。上部では管状の酸化鉄斑紋が発達する。
Ⅳ層：近世以前の洪水砂。上面はⅢ層に削平され平坦であるが、下位のⅤ層との層界は波状となる。上面は調査区北側における近世以降の遺構検出面となる。南側ではⅠ或いはⅡ層により削平される。上部では管状の酸化鉄斑紋が発達する。西側の堀跡確認トレンチ（Ｌ－３～５グリッドおよびＰ－３～６グリッド）ではⅤ層に起因すると推定されるラミナが発達する。
Ⅴ層：古代の自然堆積土。平安期の遺物を多量に包含する。平安期の地表面は概ねⅤ層上部と推定される。平安期の遺構堆積土の母材。場所によっては砂の波状のラミナが発達し、上下に区分される。南側ではⅠ或いはⅡ層により削平される。北側では良好に観察され、調査区外北側及び東側へ広がっていくと推定される。また場所によってはややボソボソした。
Ⅵ層：砂礫層。付近の基盤層。上位では巨礫を稀に含むが、下位にいくにつれ礫が無くなり、均質な砂となる。場所によっては白色の粘土を挟む。南側ではⅠ或いはⅡ層により削平される。
Ⅶ層：黒色帯。ある時期の地表面か？灰褐色粘土の平行ラミナが発達する。
Ⅷ層：均質な微砂。

自然堆積土の層厚は地形の傾斜にしたがって、西側或いは北側へいくにつれ厚くなり、Ⅳ層やⅤ層中に稀に観察されるラミナは調査対象地の西或いは北側でよく観察される。

Ⅵ層より上位の層は調査区のほぼ全域で観察されるが、Ⅶ層以下については西側の堀跡確認トレンチでのみ観察している。



基本層序

Ⅰ：10YR3/2黒褐色シルト　表土。植物根多く含む。建築残土、コンクリート等の混入物多数含む。下位には円～亜円礫（径20～100mm）含む。現代の堆積層。

Ⅱ：10YR3/2黒褐色微砂質シルト　亜円礫（径20～100mm）含む。細い管状酸化鉄斑紋あり。炭化物粒含む。局所的に2層（a・b）に区分されるが、概ね近代以降の遺物を包含する。近代から現代の堆積層。

Ⅲ：10YR4/1褐色灰色微砂質シルト　細礫混じる。ほぼ均質。炭化物粒含む。南側では砂質を含む。SD1溝跡の近世ゆの堆積土の母材。

Ⅲb：10YR3/1黒褐色シルト　細礫混じる。SD1溝跡西側でのみ検出。平安時代の遺物含む。平安時代の竪穴住居の上位の堆積土の母材となるが、Ⅴ層との判別困難。

Ⅳ：10YR5/1褐灰色細砂　上位のⅢ層と下位のⅤ層との層界は波状で撹乱されることが多い、亜円礫（径5～20mm）含む。稀に平安期の遺物含む。北側ではほとんど確認できないか非常に薄い。南側では厚くなり、Ⅲ層との境界が曖昧になる。管状酸化鉄斑紋あり。Ⅱ層とは異なり、管が太くSD1溝跡上位の堆積層に形成されるものと規模・形態が似る。

Ⅳa：10YR7/3にぶい黄橙色砂　均質。下位は細砂。

Ⅳb：2.5Y6/2灰黄色細砂　2.5Y5/2暗灰黄色粘土ブロック含む。10YR3/2黒褐色シルトのラミナあり。酸化鉄斑紋あり。

Ⅳc：2.5Y7/2明褐灰色微砂　2.5Y5/2暗灰黄色粘土ブロック含む。10YR3/2黒褐色シルトの波状ラミナあり。10YR7/3にぶい黄橙色砂の波状ラミナあり。酸化鉄斑紋あり。

Ⅳd：2.5Y4/1黄灰色微砂　やや粘質。酸化鉄斑紋あり。

Ⅳe：10YR7/3にぶい黄橙色砂　Ⅵ層の崩れ？

Ⅴ：10YR2/1黒色微砂質シルト　細礫混じる。亜円礫（径10～40mm）含む。平安期の遺物を多量に含む。管状酸化鉄斑紋あり。炭化物粒あり。局所的にⅣ層に近似した平行ラミナを含み、上位（Ⅴ層上）と下位（Ⅴ層下）とに区分される。下位の方がやや明るい色調を帯びる。

Ⅴb：10YR2/1黒色微砂質シルト　均質。ボソボソする。

Ⅵ：10YR5/4にぶい黄褐色礫混　砂礫層。上位に亜円礫（径50～200mm）含む。下位にいくにつれ均質な細砂層になる。上部に酸化鉄斑紋あり。

Ⅵa：10YR7/3にぶい黄橙色砂礫　上位の礫層で淘汰が悪い、下端に5Y5/1灰色微砂の薄層あり。酸化鉄斑紋あり。

Ⅵb：10YR7/3にぶい黄橙色砂礫　酸化鉄斑紋あり。淘汰が悪い。

Ⅶ：10YR1.7/1黒色粘土　7.5YR4/1褐灰色粘土の平行ラミナあり。

Ⅷ：5Y5/1灰色微砂　均質。

第6図　基本層序図

Ⅳ　遺構と遺物

1　遺構の分布（第８～９図）

「山形城三の丸跡」及び「城北遺跡」の調査からは、近世及び古墳～平安時代に至る時期の遺構が検出された。

「山形城三の丸跡」に該当する、上層で検出された近世以降と判断される遺構は、三の丸の堀跡と判断されるＳＤ28をはじめ、溝跡や不明ピット等である。Ⅲ層上面あるいはⅣ層上面で確認され、調査区の全域にわたって検出された（第８図）。

「城北遺跡」に該当する、下層で検出された奈良～平安時代と判断される遺構は、竪穴住居跡や性格不明遺構である。ＡＫ－２～ＡＮ－６グリッドの範囲を中心として検出された（第９図）。

下層で検出された古墳時代と判断される遺構は、ＡＬ－２グリッドでＳＰ41不明ピットが確認された。（第９図）

その他にも、Ⅵ層上面で不明ピットなどの遺構を多数確認したが、上層あるいは下層のどちらに帰属するか判断し得なかったものについては、時期不明の遺構として掲載した。

2　遺物の分類（第７図）

今回の調査で出土した遺物の内、掲載遺物は近世の遺構、あるいは奈良～平安時代の遺構出土からの土器・陶磁器類が大半を占める。その他に石製品や金属製品等が出土した。

上記出土遺物の内、かわらけ・土師器・須恵器・赤焼土器の４種類の土器について、焼成・器形及び調整により下記の様に分類した。

Ⅰ　かわらけ

酸化焔で焼成された、素焼きでロクロ成形により製作されたもののうち、近世以降に帰属すると判断される土器をかわらけとして区分した。

１類　底部から体部へ直線的に立ち上がり、口縁部に至る器形となるもの。

２類　底部から体部へ直線的に立ち上がり、体部が内弯して口縁部に至る器形となるもの。

３類　底部から外反して立ち上がり、体部が直線的に口縁部に至り、口径が10㎝未満のもの。

４類　底部から外反して立ち上がり、体部が内弯して口縁部に至る器形のもの。

４類は、口径の数値により以下の２種類に区分される。

Ａ　口径が10㎝未満のもの

Ｂ　口径が10㎝以上のもの

底部切り離し痕跡により以下の２種類に区分される。

ａ　底部切り離しが回転糸切りの後、無調整のもの

ｂ　底部切り離しが回転糸切りの後、板状工具でナデ消されるもの

Ⅱ　土師器

酸化焔で焼成された土器を土師器として区分した。奈良～平安時代に帰属する。

Ｃ　有台坏　ロクロ成形で内面黒色処理が施されるもの。

D　鉢　非ロクロ成形で、底部から体部が内弯しながら立ち上がり、体部下半にケズリが施される。頸部径と胴部最大径がほぼ等しく、口径より器高が大きくなると推定される器形を鉢として区別した。底部には葉脈痕が確認される。内面の調整により以下の２種類に区分される。

１類　内面に黒色処理が施されないもの。

２類　内面に黒色処理が施されるもの。

F　甕　非ロクロ成形で、口縁部にヨコナデ、体部外面にハケメ、体部内面にハケメまたはナデが施される。口径の数値により以下の３種類に区分される。

１類　口径が15㎝未満となる小型のもの。

２類　口径が15～20㎝の中型のもの。

３類　口径が20㎝を超える大型のもの。

甕の口縁部端部は、丸くなるもののア、端部が平坦に仕上げられるもののイ、端部に窪みが確認されるもののウ、の３種類に区分される。

底部はいずれも平底であり、底部痕跡により以下の２種類に区分される。

c　葉脈痕

d　網代痕

Ⅲ　須恵器

還元焔で焼成された土器を須恵器として区分した。奈良～平安時代に帰属する。

A　蓋　器形及びロクロからの切り離しにより、以下の３種類に区分される。

１類　天井部を切り離した後、天井部から体部に折れる部分にナデ調整を行うもの。

２類　天井部を切り離した後、天井部から体部に折れる部分にケズリ調整を行い、切り離し痕跡にケズリやナデ調整を施すもの。

３類　天井部を切り離した後、天井部から体部に折れる部分にケズリ調整を行い、切り離し痕跡の調整を行わないもの。

３類は、天井部の切り離し痕跡により以下の２種類に区分される。

a　回転糸切り

e　静止糸切り

B　坏　底径の数値により以下の２種類に区分される。

１類　底径が60㎜未満となるもの。

２類　底径が60㎜以上となるもの。

底部切り離し痕跡により以下の２種類に区分される。

a　回転糸切り

f　回転ヘラ切り

C　有台坏　底径及び器高の数値により以下の４種類に区分される。

１類　底径が70㎜未満のもので、高台端部が尖る形状のもの。

２類　底径が70㎜以上のもの。高台端部の形状により以下の２種類に分けられる。

ⅰ　高台端部が尖る形状のもの

ⅱ　高台端部が丸みを帯びる形状のもの

３類　底径が60㎜以上、器高が100㎜以上で、体部が直線的に立ち上がるもの。

４類　３類を小型にした器形で、底径が60㎜未満、器高が100㎜未満のもの。

底部の痕跡により、以下の２類に区分される。

ａ　回転糸切り

ｇ　ナデ調整

Ｄ　鉢　頸部径と胴部最大径がほぼ等しく、口径より器高が大きいと推定される器形を鉢として区別した。

Ｅ　壺　胴部上半が最大径になる器形で、壺と判断されるものを一括した。

Ｆ　甕　器形全体が明瞭な個体は出土せず、調整や器厚で甕と判断されるものを一括した。

Ⅳ　赤焼土器

酸化焔で焼成されたロクロ成形の土器で、内面黒色処理が施されないものを赤焼土器として区分した。Ⅱ類の土師器に比べ色調が赤く、底部切り離し痕跡は回転糸切りである。奈良～平安時代に帰属する。

Ｂ　坏　底径の数値により以下の２種類に区分される。

１類　底径が60㎜未満のもの。

２類　底径が60㎜以上のもの。

3　近世の遺構と遺物

1　溝状遺構

ＳＤ28（第８・10～14図　図版５～８・27～28）

位　　置：Ｌ～ＡＮ－１～３

特　　徴：遺構の北半は調査区外に延び、全体の規模は不明である。調査区内での検出幅は約８ｍを測る。検出面からの深さは、最深部のＡＪ－１グリッド底面で約200㎝を測る。堀底は平坦である。北半の形状は不明だが、断面が逆台形になる箱堀と推定される。底面に起伏が認められる。確認された遺構の規模及び位置から、山形城三の丸堀跡と判断される。ＡＫ－１～２グリッドで、南西から北東にかけて緩やかに屈曲する様相が確認された。屈曲部分のＡＩ～ＡＫ－１グリッドで、堀底の南側に直径10～20㎝大礫の集積状況が検出された（第10図）。地山の崩落防止を目的として敷設されたと考えられる。

屈曲部分の東側のＡＫ～ＡＮ－１～２グリッドで、堀底底面から約80㎝の比高差でテラス状に平担面を成している状況が確認され、その底面には浅い不整円形の掘り込みが連続し、酸化鉄を多く含む砂層の20層が堆積する状況が確認された。

ＡＭ－２グリッドでは、ＳＤ28の覆土がＳＤ１に切られる状態を確認し、近世のいずれかの段階では、両者の遺構が同時に存在したと判断した。しかし、その時期がどの段階か、あるいは両者の遺構がどのように関連したかは不明である。

ＳＤ28の遺構上端より南には、関連する付属施設等の痕跡は確認できなかった。調査区境界壁面の断面観察でも、土塁の基底部と想定されるような土層堆積状況は確認されなかった。当初より土塁が所在しなかったか、もしくは後世の削平で消失したものと推定される。

ＡＫ～ＡＬ－２グリッドのⅥ層上面で、平面形状が円形あるいは長楕円形を呈するピット状の落ち込みが複数検出された。ＳＤ28の立ち上りと直行する位置に所在し、何らかの関連性が推定されたが、検出状況からはこれら不明ピット状の遺構の帰属時期を近世と確定できなかったため、ＳＤ28との関連性を明らかにすることはできなかった。

発掘調査と併行して、本調査区域から西側へ約90ｍの区域で、三の丸堀跡の範囲確認を目的としたトレンチ調査を行った。範囲確認調査東トレンチをＬ－３～５グリッドに幅約３ｍ×長さ約12ｍの規模で、範囲確認調査西トレンチをＰ－３～５グリッドに幅約３ｍ×長さ約８ｍの規模で設定した（第４図）。どちらのトレンチも撹乱が著しい状況であったが、ＳＤ28に連続すると判断される遺構の断面を確認した（第11図）。

層　　位：Ⅲ層上面もしくはⅥ層上面で検出された。遺構の南側立ち上りはⅤ層を掘り込み、底面に至ってⅥ層が地山となる。ＡＩ－１～２グリッドより東側は覆土がシルト質に富み、西側に向かうにつれ礫が多く含まれる。底面寄りの31層はⅥ層由来の砂を多く含み、Ⅵ層が流れて堆積した自然堆積層である。

出土遺物：陶器（１～３）、磁器（４～10）が出土した。１は近代の擂鉢であり、透明な鉄釉が内外面に施釉され、卸目の上端部を水平にナデ消す特徴から、近代以降の時期と判断される。２・３も同じく近代の擂鉢と判断される。いずれも産地は不明である。４は磁器の蓋である。５～７は磁器碗である。５・６は18世紀後半と判断される広東碗である。５は外面に梅花文が描かれ、見込底面に「寿」文が描かれる。６は外面に山水文？が描かれ、内面に「寿」文が描かれる。７は磁器碗で、体部外面に蝶文が描かれる。８は磁器皿で、見込内面に植物文？が描かれる。９は小型の磁器徳利、10は花瓶の口縁～頸部である。

時　　期：出土遺物に５・６の18世紀末頃の磁器や、１～４など近代以降のものが確認されるため、遺構覆土は近世後期以降の堆積と判断される。よって、堀跡の構築年代は明確でないが、埋没年代は近世末期以降と判断される。

ＳＤ１（第８・15・17～21図　図版９～13・28～32）

位　　置：ＡＫ～ＡＭ－３～８

特　　徴：検出された幅は上幅約３～４ｍを測り、深さは検出面より約80㎝を測る。南北の軸線はＮ－10°－Ｅを測る。調査区東側を南北に縦貫する。壁面は緩やかに内弯し立ち上がる。底面は起伏が連続する様相が確認された。ＡＮ－１～２グリッドの調査区東壁で、ＳＤ１覆土に類似する17･18層を確認し（第12図）、ＳＤ１はＡＭ－２グリッドで東に曲がると推定される。規模や検出状況から、南側も東へ曲がって後述のＳＤ５と同一の遺構になる可能性がある。

ＡＭ－２～３グリッドにかけて、１・３層より上位に石組列が確認された（第15図）。

層　　序：Ⅵ層上面で検出された。概ねグリッド毎に土層断面図を作成した。いずれの断面でも、１層や６層の底面に白色砂が堆積する状況が確認された。それぞれの時期で溝の底面を成

した痕跡と推定され、ＳＤ１は機能中において複数回の掘り直しが行われたと考えられ、土層観察からは以下のような変遷が推定される。

層位の序列として、１層は５層の上層にあり、５層は９・10層を切り、９・10層が６・７層を切る状況が確認された。この状況から、遺構が構築された当初はⅥ層を底面とし、その後に複数回の変遷があり、最終的には３層上面を底面として石組列を伴う１層が堆積したと推定された。

特異な覆土としては、ＡＭ－３グリッド周辺の15層で黒色炭化物状の物質が局地的に堆積する状況を確認したが、その性質については不明であった。

出土遺物：かわらけ（11～13）、瓦質土器（14～15）、黒瓦（16～20）、転用土製品（21～24）、陶器（25～39）、磁器（40～49）、石製品（50～53）、金属製品（54）、須恵器（55～58）が出土した。

11～13はいずれも口縁部にススが付着し、灯明皿として利用されたものと判断される。14・15は器形からどちらも火鉢と推定される。14は隆帯が付き、その下に六角形の印刻が連続して施される。15は帯が剥離し、花型の印刻が連続して施される。

16・17は丸瓦、18～20は平瓦である。21～24は黒瓦の転用土製品として分類した。21は丸瓦破片の角を研磨具として転用したもので、側面を研磨面として使用している。22は丸瓦を、23・24は平瓦を転用したもので、いずれも円盤状を呈する。

25～27は陶器碗である。体部器厚が薄く、内外面に黄白色の灰釉が施釉され、陥入が多く入る呉器手茶腕と判断される。28は唐津焼の碗である。29は唐津焼の筒型茶碗である。体部に鉄釉で「Ｎ」字状の文様が描かれる。体部下半～高台は施釉されない。高台に対して体部の水平が歪んで接着されている。30は体部内外面に鉄釉が掛けられる筒型茶碗である。産地は不明である。31～33は瀬戸の天目茶碗である。口縁部から体部中位まで厚く鉄釉が施され、体部下半は無釉である。器形や釉調、胎土は似るが、いずれも部分的にしか残存しておらず、器形からは詳しい時期を判断できない。34は唐津向付で、見込みに鉄絵で菖蒲の文様が描かれる。口縁部区画の縁取りも鉄絵で着色される。器形は、体部を方形に折り曲げ、口縁部が緩やかな弧状に成形され、体部上半は内弯する。35は志野焼の菊皿であり、口縁が波状に成形される。白色の灰釉が施釉される。瀬戸編年（財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター2001）では大窯第４期後半以降の製品と判断でき、17世紀初頭の年代と判断される。36は唐津焼の皿である。外面には灰釉が、見込み内面には銅緑釉が掛けられ、底面には蛇の目釉剥ぎが施される。17世紀末頃の年代と判断される。37は御深井の碗である。内外面に灰釉が掛けられ、全体に陥入が著しい。見込み内面には胎土目痕が確認される。38は火入と推定される。口縁部が内側に折り曲げられ、体部内面は無釉である。39は、胎土から判断して唐津産の擂鉢である。内面の使用が著しく、卸目が摩滅している。

40は青磁碗Ｅ類と判断され、15～16世紀代の年代と判断される。41は磁器碗であり、体部外面に雪輪草花文？が、高台外面に圏線が巡る。形状及び文様より17世紀末～18世紀代と判断される。42は外面に網目文が施される碗である。形状及び文様より17世紀末～18世紀代の年代と

判断される。43は外面に松竹梅文？が施される。44は体部外面に植物文が施され、高台に圏線が巡る。45は小皿である。見込み内面に植物文が施される。46は見込み底面と体部外面に植物文が施される。47は磁器の小杯である。体部外面に植物文が施される。器形や文様から、18世紀代の年代と判断される。48は外面に山水文が描かれる徳利である。内面は無釉で、外面が著しく被熱している。産地は不明で、近世末期以降の時期と推定される。49は合子と推定され、外面にわずかに染付が確認される。体部内面は無釉であり、産地は不明である。

石製品は、50は長方形の硯である。石材はスレートである。51は円盤状石製品であり、山形市双葉町遺跡（山形市教育委員会2004ｂ）や東根市小田島城跡（財団法人山形県埋蔵文化財センター2004）に類例が見られる。材質は細粒砂岩である。52は層塔の頭部に位置する相輪の残欠である。材質は石英安山岩である。53は五輪塔空風輪の残欠である。材質は流紋岩である。山形市双葉町遺跡に類例があり、形状から判断して近世初頭の年代が想定される（山形市教育委員会2004ｂ）。54は永楽通宝である。

55・56は須恵器蓋である。須恵器坏の57・58は墨書が確認される。57は体部外面に「皿」状の墨痕が、58は底面に字形不明の墨痕が確認された。その他獣骨など動物遺存体資料が多量に確認されたが、小破片のため掲載していない。

時　　期：出土遺物の年代は17世紀前半～後半にかけてのものが多く、遺構の構築年代は近世初頭まで遡ると判断される。しかし48の磁器徳利は近世末期以降のものと判断され、石組列周辺のＡＭ－２グリッドから出土した。これら年代が新しいと判断される遺物も確認される事から、ＳＤ１は断続的に近世末期まで機能したと推定される。

ＳＤ５（第８・16・18・22図　図版14・32～33）

位　　置：ＡＬ・ＡＭ－９～10

特　　徴：検出幅は約３ｍを測る。検出面からの深さ約30㎝を測る。東西方向に走り、軸線はＮ－70°－Ｗを測る。遺構の南北両端の立ち上りよりも内側に、１層中位から上位に石積列が確認された。検出位置から、ＳＤ１は東へ折れ曲がりＳＤ５と同一遺構になると推定されたが、接続する部分が調査区外であり、覆土の様相にも差異が認められたため、現場調査段階ではＳＤ１との連続性を確認できず、別遺構として登録した。

層　　序：Ⅵ層上面で検出された。覆土は３層に区分される。ＳＰ７との切り合いは不明である。

出土遺物:かわらけ（60）、黒瓦（61～62）、陶器（63～66）、磁器（67～71）、土製品（72～73）が出土した。

60はかわらけで、体部内面にススが微量に付着する。黒瓦のうち、61は丸瓦である。62は平瓦で、前面端部に菊花状の印刻が施される。

陶器について、63は小型碗である。産地は不明である。64～66は擂鉢で、唐津産と判断される。64は口縁部端部にのみ鉄釉が施釉される。65・66は底部である。

磁器について、67～69は伊万里の碗である。67の外面には二重網目文が、内面には網目文が施される。17世紀代後半と判断される。68は碗で、外面に四方襷文で区画された松竹梅文が施

され、内面は無文である。17世紀末～18世紀代と判断される。69は高台周辺に複数の圏線が施され、内面見込みには桔梗？文が描かれる。17世紀代後半と判断される。70は漳州窯系磁器の皿と判断される。内面に飛雲文が、外面口縁部に圏線が描かれる。71は初期伊万里の皿であり内面に山水文？が施される。

72・73は管状土錘である。小型で軽量なため、漁具の浮きと推定される。

時　　期：出土遺物の年代は、17世紀前半～後半にかけてのものが多く、遺構の構築年代も近世初頭の同時期と判断される。機能年代の下限は、ＳＤ５がＳＤ１と同一遺構となり得る可能性があることや、かつ先述のＳＤ１に伴うＡＭ－２～３グリッドの石組と、ＳＤ５の石組の機能年代の下限が新しい時期で同時期と推定するならば、ＳＤ５も近世末期まで機能したと推定される。

ＳＤ29（第８図）

位　　置：ＡＭ－２

特　　徴：東西方向に走り、東は調査区外へ伸びる。調査区東壁から西へ延びると判断されるが、西側に向かうにつれ浅くなり、規模は不明である。

層　　序：Ⅳ層上面で確認された。Ⅲ層由来と判断される覆土が確認された。

出土遺物：陶磁器片等が出土したが、小破片のため図化していない。

時　　期：Ⅲ層由来の覆土が堆積し近世以降と判断されるが、詳しい年代は不明である。

ＳＤ37（第８図）

位　　置：ＡＫ・ＡＬ－４

特　　徴:検出された幅は約30㎝、長さは約3.5ｍを測る。深さは検出面から約20㎝を測る。東西方向に走り、西は調査区外へ伸びる。

層　　序：Ⅴ層上面で確認された。Ⅲ層由来と判断される覆土が確認された。

出土遺物：遺物は出土していない。

時　　期：Ⅲ層由来の覆土が堆積し近世以降と判断されるが、詳しい年代は不明である。

２　不明ピット

ＳＰ２（第８図）

位　　置：ＡＭ～ＡＮ－７

特　　徴：長軸約60㎝を測り、検出面から深さ約15㎝を測る。平面形状は円形を呈する。

層　　序：Ⅵ層上面で確認された。

出土遺物：土師器片が出土したが、小破片のため図化していない。

時　　期：検出状況より近世以降と判断されるが、詳しい時期は不明である。

ＳＰ３（第８図）

位　　置：ＡＭ－７

特　　徴：長軸約50㎝を測り、検出面から深さ約55㎝を測る。平面形状は円形を呈する。

層　　序：Ⅵ層上面で確認された。

出土遺物：土師器片が出土したが、小破片のため図化していない。
時　　期：検出状況より近世以降と判断されるが、詳しい時期は不明である。

ＳＰ６（第23～24図　図版15・33～34）
位　　置：ＡＭ－10
特　　徴：長軸約80㎝を測り、検出面からの深さ約30㎝を測る。平面形状は円形を呈し、壁面の立ち上りは急である。ＳＤ５の南側に近接するが、両者の関連性は不明である。
層　　序：Ⅵ層上面で検出された。覆土は２層に区分される。２層の黒褐色微砂質シルト層中から遺物がまとまって出土した。
出土遺物：かわらけ（74～87）、礫（88～92）が出土した。87のみ１層中から出土し、74～86は２層からの出土である。中でも、４対（76・77、79・80、82・83、85・86）は合わせ口の状態で埋納された様相が確認された。出土状況から判断して、74と75も組み合わせになる可能性がある。これらが土坑底面に埋納された状態で検出された。

他に同じ２層中から、共伴して亜円礫（88～92）が確認された。88～90は材質が閃緑岩、91は材質が安山岩、92は鉄石英である。かわらけと同時の埋納と判断されるが、明瞭な使用痕跡は確認されず、遺物としての性格は不明である。
時　　期：検出状況、及び出土したかわらけの年代は、近世初頭の17世紀前半の時期と判断される（高桑2004）ため、遺構の年代も17世紀前半の年代に収まると判断される。

ＳＰ７（第25図　図版16）
位　　置：ＡＭ－９
特　　徴:長軸約100㎝を測り、検出面からの深さ約15㎝を測る。掘り込みは浅く、底面は平坦である。平面形状は不整円形を呈する。ＳＤ５との切り合いは不明である。
層　　序：Ⅵ層上面で検出された。覆土は２層に区分される。
出土遺物：遺物は出土していない。
時　　期：検出状況より近世と判断されるが、詳しい時期は不明である。

ＳＰ８（第25図　図版16）
位　　置：ＡＭ－９
特　　徴：検出面からの深さ約15㎝を測る。平面形状は長楕円形と推定される。
層　　序：Ⅵ層上面で検出された。覆土は１層である。ＳＰ16に切られる。
出土遺物：土師器甕体部片、須恵器坏体部片が出土したが、小破片のため図化していない。
時　　期：検出状況より近世と判断されるが、詳しい時期は不明である。

ＳＰ９（第25図　図版16～17）
位　　置：ＡＭ－８
特　　徴：長軸約80㎝を測り、検出面からの深さ約20㎝を測る。平面形状は不整円形を呈する。長軸25㎝の石が、底面中央に礎石状に据えられた状態で検出された。
層　　序：Ⅵ層上面で検出された。覆土は３層に区分される。
出土遺物：土師器甕体部片が出土したが、小破片のため図化していない。

時　　期：検出状況より近世と判断されるが、詳しい時期は不明である。

ＳＰ10（第25図　図版17）

位　　置：ＡＭ－８

特　　徴：長軸約90㎝を測り、検出面からの深さ約20㎝を測る。平面形状は長楕円形を呈する。断面形状は逆三角形を呈し、壁面の立ち上りは緩やかである。

層　　序：Ⅵ層上面で検出された。覆土は１層である。長軸10～20㎝程度の長楕円形の亜円礫が、根石のような状態で底面に確認された。

出土遺物：土師器甕体部片、須恵器坏体部片が出土したが、小破片のため図化していない。

時　　期：検出状況より近世と判断されるが、詳しい時期は不明である。

ＳＰ11（第26図　図版17）

位　　置：ＡＭ－７～８

特　　徴：長軸約80㎝を測り、検出面からの深さ約15㎝を測る。平面形状はやや崩れた正方形を呈し、壁面の立ち上りは急である。

層　　序：Ⅵ層の上面で検出された。覆土は２層に区分される。２層中位に径８～10㎝程度の礫を多く含み、柱の根石として利用されたものと推定される。

出土遺物：土師器甕体部片が出土したが、小破片のため図化していない。

時　　期：検出状況より近世と判断されるが、詳しい時期は不明である。

ＳＰ12（第26図　図版17）

位　　置：ＡＭ－７

特　　徴：長軸約90㎝を測る。柱のアタリ状に１層が局所的に深く堆積し、検出面からの深さ約25㎝を測る。２層堆積部分は検出面から深さ約10㎝を測る。平面形状は長楕円形を呈し、壁面の立ち上りは緩やかである。

層　　序：Ⅵ層上面で検出された。覆土は２層に区分される。

出土遺物：土師器甕体部片が出土したが、小破片のため図化していない。

時　　期：検出状況より近世と判断されるが、詳しい時期は不明である。

ＳＰ15（第８図）

位　　置：ＡＮ－６

特　　徴：長軸約70㎝を測り、検出面から深さ約35㎝を測る。平面形状は円形を呈する。

層　　序：Ⅵ層上面で確認された。

出土遺物：土師器片が出土したが、小破片のため図化していない。

時　　期：検出状況より近世以降と判断されるが、詳しい時期は不明である。

ＳＰ16（第25図　図版16）

位　　置：ＡＭ－９

特　　徴：長軸約85㎝を測る。検出面から深さ約15㎝を測る。平面形状は不整円形を呈し、壁面の立ち上りは緩やかである。ＳＰ８を切る。

層　　序：覆土は１層である。

出土遺物：土師器甕破片が出土したが、小破片のため図化していない。
時　　期：検出状況より近世と判断されるが、詳しい時期は不明である。
ＳＰ19（第８・27図）
位　　置：ＡＮ－６
特　　徴：東及び南側は調査区外である。調査区境界で検出され、確認された部分は全体の１/４程度と推察される。確認された南北長は約40㎝を測り、検出面からの深さは約40㎝を測る。平面形状は円形を呈する。
層　　序：Ⅴ層上面で確認された。
出土遺物：土師器片が出土したが、小破片のため図化していない。
時　　期：検出状況より近世以降と判断されるが、詳しい時期は不明である。
ＳＰ21（第８図）
位　　置：ＡＭ－６
特　　徴：長軸約40㎝を測り、検出面から深さ約20㎝を測る。平面形状は円形を呈する。
層　　序：Ⅵ層上面で確認された。
出土遺物：土師器片が出土したが、小破片のため図化していない。
時　　期：検出状況より近世以降と判断されるが、詳しい時期は不明である。
ＳＰ42（第８・33図）
位　　置：ＡＫ－４
特　　徴：長軸約50㎝を測り、検出面から深さ約10㎝を測る。ＳＩ31を切る。
層　　序：Ⅲ層由来の覆土が確認された。
出土遺物：遺物は出土していない。
時　　期：検出状況より近世以降と判断されるが、詳しい時期は不明である。

３　性格不明遺構

ＳＸ34（第８・34図）
位　　置：ＡＬ－４
特　　徴：長軸約200㎝を測り、検出面からの深さ約35㎝を測る。平面形状は不整円形を呈する。壁面は緩やかに立上がる。ＳＩ40を切る。
層　　序：Ⅲ層上面で確認された。３層に区分される。
出土遺物：土師器・須恵器片が出土しているが、図化していない。
時　　期：検出状況から近世以降と判断されるが、詳細な時期は不明である。

４　奈良～平安時代の遺構と遺物

１　竪穴住居跡

ＳＩ17（第27～29図　図版19～20・34～35）
位　　置：ＡＭ～ＡＮ－４～５

特　　徴：東辺の一部及び南辺のみ残存する。東側はＳＸ18に切られる。遺構の西及び北側を撹乱に切られるために残存状況は不良で、全体の形状及び規模は判然としない。南辺の残存部分は約2.8ｍを測り、検出面から掘方底面までの深さ約20㎝を測る。形状は方形を呈すると判断される。主軸方向はＮ－85°－Ｗを測る。

遺構東南辺から中央に向かい徐々に底面標高が低くなる。貼床は覆土３層が相当すると推定されるが明瞭でない。東壁の南側寄りの床面から黄白色シルトや炭化物が塊状で確認され、カマドのソデの残存部分と推定される。煙道は確認されなかった。住居内に柱穴及び土坑は確認されなかった。カマド推定部分を中心に遺物が出土した。

層　　序：Ⅵ層上面で検出された。覆土は６層に区分される。

出土遺物：土師器（93～98）、須恵器（99～102）、赤焼土器（103）、石製品（104）が出土した。93・94は鉢である。93には内面黒色処理が施されず、94は内面黒色処理が施され、底部に葉脈痕が確認される。95は甕で、体部外面の中位にススが厚く付着する。96は甕で、口縁部から底部まで残存する。器形が大きく歪み、体部断面の形状が楕円になる。97は甕の口縁～体部上半である。98は甕の体部下半～底部で、底面に葉脈痕が確認される。

99･100は蓋で、どちらも全体の１／３程度の残存率のため、全体の形状は不明である。101は底部が欠損するが、器高が高い有台坏の器形と判断される。102は壺である。頚部と底部が欠損し、全体の器形は不明瞭である。103は赤焼土器坏である。

104は石製印である。覆土１層から出土し、床面よりやや浮いた標高で検出された。弧紐有孔の形状を呈し、円形の穿孔が施される。表面が平滑に研磨され、金属製の印を模倣するように整形されたと推測される。印面の幅は縦29㎜×横26㎜であり、幅２㎜の縁で四方を区画している。字形は「大」と「十」を組み合わせた字の変形した字形に観察できるが、断定できない。印面上方と推定される側面に「↓」状の線刻が確認され、他にも線刻が確認される。規格が小型なため、公的なものでなく「私印」と推定される。県内において、発掘調査による古代印の初出土事例である。

石製印は、他には長野県聖原遺跡からの出土事例（国立歴史民俗博物館1996）があり、それは９世紀代の年代とされる。しかし他には確認されず、希少な事例と判断される。なお、印の調査にあたり、東北芸術工科大学准教授　北野博司・山形大学人文学部准教授　三上喜孝の両氏よりご教示をいただいた。

時　　期：出土遺物の土師器甕（96・95）や須恵器蓋（99）・坏（101）の特徴より、９世紀前半の年代が想定される。

ＳＩ22（第30・32図　図版21・35）

位　　置：ＡＭ～ＡＮ－４

特　　徴：東辺と南辺は壁が確認され、北辺は壁が確認されない。西側をＳＤ１に切られる。南辺は残存長約3.2ｍを図り、形状は方形を呈すると判断される。検出面から床面までは深さ約10㎝を測る。２層が貼床かと推定されるが明瞭でない。周溝が東辺から南辺の壁面に沿って検出された。カマドは確認されなかったが、床面の南東角寄りに炭化物や焼土の堆積する落ち

込みがあり、その周囲から遺物が集中して出土する様相が確認された。柱穴や土坑は確認されなかった。

層　　序：Ⅵ層上面で検出された。覆土は３層に区分される。

出土遺物：土師器（106）、須恵器（107～114）、赤焼土器（115～117）が出土した。106は鉢である。内面黒色処理が施され、底部に葉脈痕が確認される。107・108は蓋である。いずれも破片のため、全体の器形は明瞭でない。109～112は坏であり、いずれも底部調整が回転ヘラ切りで、底部から体部への立ち上りにナデ調整が施される。焼成はやや不良である。113・114は有台坏である。113は底部に回転糸切り痕跡が確認されるが体部上半は不明。114は小型の器形である。115～117は赤焼土器坏の底部である。

時　　期:109～112の須恵器坏の器形からは８世紀末～９世紀第１四半の時期と判断され、111は床面からの出土である。しかし115・117の赤焼土器坏も床面からの出土である。よって、より時期の新しい遺物と判断される赤焼土器坏の器形から、ＳＩ22の時期は９世紀代第２～３四半の年代と判断される。

ＳＩ30（第31～32図　図版22・36）

位　　置：ＡＪ・ＡＫ－５～６

特　　徴：遺構の東壁及び北壁のみが確認された。西側と南側は調査区外となるため、全体の規模は不明である。壁の立ち上りは緩やかである。残存部分の南北長は約4．8m、東西長は約３ｍを測る。検出面からの深さは約10㎝を測る。主軸方向はＮ－２°－Ｗを測る。カマドは確認されず､焼土や炭化物などの分布域も確認されなかった。柱穴や土坑は確認されなかった。ＳＸ38を切る。ＳＩ31との切り合いは、Ⅲ層により撹乱され不明瞭であった。

層　　序：Ⅵ層上面で検出された。覆土は３層に区分される。

出土遺物：土師器（118～121）、須恵器（122～124）が出土した。118はロクロ成形の有台坏であり、体部外面の口縁部から１/３程度の範囲までヨコナデが施される。体部内面に炭化物が付着する。外面全体及び内面上半に火ハネが目立つ。遺構内北側の位置から逆位で出土した。119は鉢で、内面黒色処理が施される。120・121は甕の口縁部である。

122･123は坏で、122はほぼ完形だが、123は底部のみの残存である。124は須恵器有台坏で底部のみの残存である。

時　　期：須恵器坏（122～123）の特徴より、９世紀代第２～３四半の年代と判断される。

ＳＩ31（第33・35～36図　図版23～24・36～37）

位　　置：ＡＫ－４～５

特　　徴：東西約3.8m、南北約4.6ｍを測る。平面形状はやや南北に長い方形を呈す。遺構検出面からの深さは約20㎝を測る。壁面の立ち上りは緩やかである。主軸方向はＮ－６°－Ｅを測る。南壁東寄りにカマドと推定される灰黄色シルトと炭化物の広がりが確認された。煙道は確認されなかった。床面精査時にＳＰ35及びＳＰ36のピットが確認され、ＳＩ31に伴う柱穴と判断された。ＳＰ42に切られる。ＳＩ30との切り合いは、Ⅲ層の撹乱により不明瞭であった。

層　　序：Ⅵ層上面で検出された。覆土は３層に区分される。

出土遺物：土師器（125～131）、須恵器（132～140）が出土した。125～131は甕である。125・126は口縁部で、小型の器形である。128は甕の口縁部～体部で、内面黒色処理が施される。器形や調整から、鉢の可能性も推定される。129は甕で、底面に網代痕が確認される。130は口縁部～体部下半まで残存し、体部中位より上にススが付着する。131は底部に葉脈痕が確認される。

132・133は蓋の口縁端部である。134は蓋の天井部である。ツマミが接着後に剥離した痕跡が確認され、回転糸切り後にケズリを施す調整痕が確認される。

135～137は坏で、底部切り離し痕跡は回転ヘラ切りが確認される。138は有台坏の底部である。139は鉢の口縁部～体部である。140は甕の体部下半底部であり、外面の調整はタタキ目の後にハケ目状の調整が施され、底部は平底である。

時　　期：須恵器坏（135～137）の形状から、９世紀代第１四半の年代と判断される。

ＳＰ35（第33・36図　図版24・37）

位　　置：ＡＫ－４

特　　徴：長軸約45㎝を測る。平面形状は円形である。ＳＩ31床面内北西の柱穴と判断される。ＳＩ31床面から深さ約20㎝を測る。

層　　序：ＳＩ31床面精査時に検出された。覆土は黒褐色粗砂の単一層である。

出土遺物：底面から須恵器坏（141）が出土した。底部切離し痕跡は回転ヘラ切りで、ＳＩ31出土の須恵器坏（135～137）とも器形が類似する。

ＳＰ36（第33図　図版24）

位　　置：ＡＫ－５

特　　徴：長軸約45㎝を測る。平面形状は円形である。ＳＩ31床面内南西の柱穴と判断される。ＳＩ31床面からの深さは約20㎝を測る。

層　　序：ＳＩ31床面精査時に検出された。覆土は灰黄褐色粗砂の単一層である。

出土遺物：遺物は出土していない。

ＳＩ40（第34・36図　図版25・37）

位　　置：ＡＬ－３～４

特　　徴：遺構の北壁及び西壁のみ確認された。東半はＳＤ１に切られ、中央部分がＳＸ34に切られる。南半は残存状況が悪く、全体の規模及び形状は明瞭でない。残存範囲は東西長約3.2ｍ、南北長約4.5ｍの規模を測り、平面形状は方形を呈す。主軸方向はＮ－５°－Ｅを測る。検出面からの深さは約25㎝を測る。３層の黒褐色細砂が地山となるⅥ層の直上に堆積し、貼床の可能性を有すが、遺構南半の残存状態が不良のため、全面に施工されたかは不明である。北壁寄りに極円礫や遺物の集中する箇所が確認された。礫及び遺物を精査後、直下にピット状の落ち込みを確認した。２層はこの周囲に確認されるため、カマド痕跡の残存部分と推定された。煙道は確認されなかった。土坑や柱穴は確認されなかった。

層　　序：Ⅵ層上面で検出された。覆土は３層に区分される。

出土遺物：土師器（142～144）が出土した。142は小型の甕で、内面にハケメが明瞭に残る。外面は体部下半に特に被熱を受ける。口縁部までススが確認され、使用痕跡が著しい。143は甕の

口縁部～体部上半である。144は甕の体部下半～底部であり、底面に葉脈痕が確認される。
時　　期：検出状況及び出土遺物の特徴より、９世紀代前半の年代と判断される。

２　不明ピット

ＳＰ23（第９図）
位　　置：ＡＬ－８
特　　徴：長軸約23㎝を測る。平面形状は不整円形を呈する。ＳＸ43との切り合いは不明である。
層　　序：Ⅵ層上面で検出された。
出土遺物：遺物は出土していない。
時　　期：検出状況から９世紀代の年代と判断されるが、詳細な時期は不明である。
ＳＰ24（第９図）
位　　置：ＡＫ－８
特　　徴：長軸約60㎝を測り、検出面からの深さ約25㎝を測る。検出時の平面形状は円形を呈する。ＳＸ43との切り合いは不明である。
層　　序：Ⅵ層上面で検出された。
出土遺物：遺物は出土していない。
時　　期：検出状況から９世紀代の年代と判断されるが、詳細な時期は不明である。

３　性格不明遺構

ＳＸ18（第27・29図　図版20・35）
位　　置：ＡＮ－５
特　　徴：遺構の東側が調査区外となる。検出範囲の南北長は40㎝、検出面からの深さ約15㎝を測る。平面形状は隅丸方形を呈する。ＳＩ17及びＳＸ20を切る。形状や検出状況から竪穴住居跡の可能性も想定されたが、性格不明遺構として分類した。
層　　序：Ⅵ層上面で検出された。
出土遺物：須恵器坏（105）が出土した。他に土師器破片が出土したが、小破片のため図化していない。
時　　期：須恵器坏（105）の器形から、９世紀代第２～３四半の年代と判断される。
ＳＸ20（第27図）
位　　置：ＡＭ－５～６
特　　徴：平面形状は不明。検出面からの深さ約10㎝を測る。
層　　序：Ⅵ層上面で検出された。ＳＸ18・ＳＰ19に切られる。ＳＩ17を切る。
出土遺物：土師器甕破片が出土したが、図化していない。
時　　期：検出状況より９世紀代と判断されるが、詳細な時期は不明である。
ＳＸ38（第31図　図版23）

位　　置：ＡＪ－５
特　　徴：西側は調査区外となる。検出された平面形状は不整円形を呈する。検出された部分の南北長は約1.4ｍを測る。ＳＩ30床面からの深さは約15㎝を測る。ＳＩ30に切られる。検出状況から、ＳＩ30の貼床が土坑状に落ち込んだ部分等の可能性も想定されたが、性格不明遺構として分類した。
層　　序：ＳＩ30の精査中に検出された。覆土は２層に区分される。
出土遺物：土師器甕破片・須恵器坏破片が出土したが、砕片のため図化していない。
時　　期：検出状況より９世紀代第２～３四半の年代と判断される。

ＳＸ43（第９図）
位　　置：ＡＫ～ＡＬ－８
特　　徴：遺構の西半は調査区外で、東側はＳＤ１に切られ、全体の形状は不明である。残存部分は東西で約1.6m、南北で約2.2mを測る。Ⅵ層を掘り込みⅤ層由来覆土が堆積する状況が確認されたこと、またＳＤ１のＡＬ－８グリッド壁面で、土師器甕片の集中箇所を確認したため竪穴住居跡の可能性を想定したが、性格不明遺構として分類した。
層　　序：Ⅵ層上面で検出された。不明ピットＳＰ23・ＳＰ24との切り合いは不明である。
時　　期：検出状況から９世紀代の年代と判断されるが、詳細な時期は不明である。

ＳＸ44（第９図）
位　　置：ＡＫ～ＡＬ－２
特　　徴：遺構の西半は調査区外となる。Ⅵ層を掘り込みⅤ層由来覆土が堆積する状況を確認した。平面形状は不整方形を呈し、残存規模は東西で約3.4m、南北で約２ｍを測る。検出状況から竪穴住居跡の可能性が想定されたが、性格不明遺構として分類した。
層　　序：Ⅵ層上面で検出された。
時　　期：検出状況より９世紀代の年代と判断されるが、詳細な時期は不明である。

ＳＸ45（第９図　図版４）
位　　置：ＡＭ－３～４
特　　徴：遺構の西側をＳＤ１に切られる。残存部分の形状は方形を呈し、残存規模は東西で約1.5m、南北で約2.6ｍを測る。Ⅵ層を掘り込みⅤ層由来覆土が堆積する状況を確認した。検出状況から竪穴住居跡の可能性が想定されるが、性格不明遺構として分類した。
層　　序：Ⅵ層上面で検出された。
時　　期：検出状況より９世紀代の年代と判断されるが、詳細な時期は不明である。

5　古墳時代の遺構と遺物

1　不明ピット

ＳＰ41（第37図　図版15・38）
位　　置：ＡＬ－２
特　　徴：長軸約50㎝を測り、検出面からの深さ約15㎝を測る。遺物の出土を要因として確認

したため断面図は記録できず、出土状況のみ記録した。

層　　序：Ⅵ層上面で検出された。断面図は作成していないが、覆土はⅤ層由来の黒色シルト質砂の単一層であった。

出土遺物：古式土師器（145）が出土した。145は古式土師器の高坏で、坏身内外面と脚部に細いミガキが、脚部内面にはヘラナデが、底面にはナデが施される。坏身体部中位及び脚部外面に黒班が確認される。

時　　期：出土遺物の145は、坏身形状・調整及び脚部の器形から判断して、古墳時代後期の栗囲式期と判断されるため、遺構の年代も古墳時代後期と判断される。

6　遺構外出土の遺物（第38図　図版38）

遺構外出土の掲載遺物について以下に列挙する。

近代以降と判断されるカクランから、金属製品（146）・須恵器（147）が出土した。146は近代の貨幣で、五十銭銅貨である。摩滅が著しい。鋳造年は大正10年と判断される。147は刻書が確認される須恵器蓋である。刻書は「×」状に観察できるが、字形は不明である。

次に包含層中出土の遺物について、上層出土のものから順に列挙する。Ⅲ層からは陶器（148）が出土した。148は、肥前系陶器の碗と判断される。

Ⅲｂ層中からは、須恵器（149～150）が出土した。149は須恵器有台坏、150は須恵器壺である。いずれもＳＩ30・ＳＩ31の南に位置するＡＫ－６グリッドからの出土である。

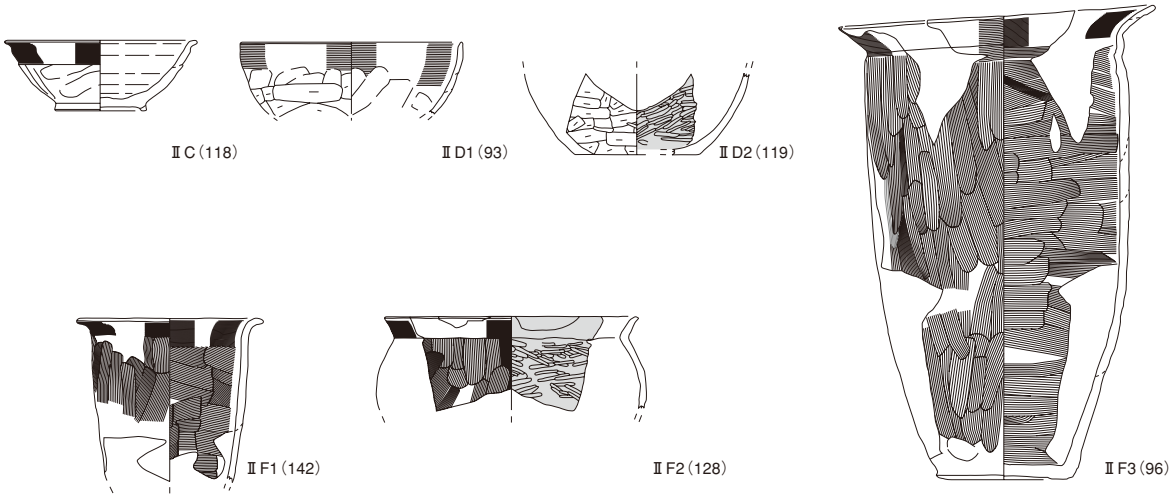
Ⅴ層中からは、かわらけ（151）、須恵器（152）、施釉陶器（153～155）、赤焼土器（156）、弥生土器（157～158）が出土した。151は口縁部にススが付着し灯明皿と考えられる。152は須恵器甕の体部外面に刻書が確認される。字形は不明瞭だが、複数の文字が刻まれると判断される。

153～155は古代の施釉陶器である。153・154は緑釉陶器、155は灰釉陶器である。154は京都産と判断され、体部内外面に浅黄色の釉が薄く塗布される。碗もしくは皿の口縁部と判断される。153は京都産か猿投産か不明である。体部内外面に浅黄色の釉が薄く確認される。碗もしくは皿の口縁部と判断される。155は瓶類の脚部もしくは口縁部と判断される。色調は灰白色を呈す。156は赤焼土器坏で、器壁は薄く、内面に細い線状痕が確認される。

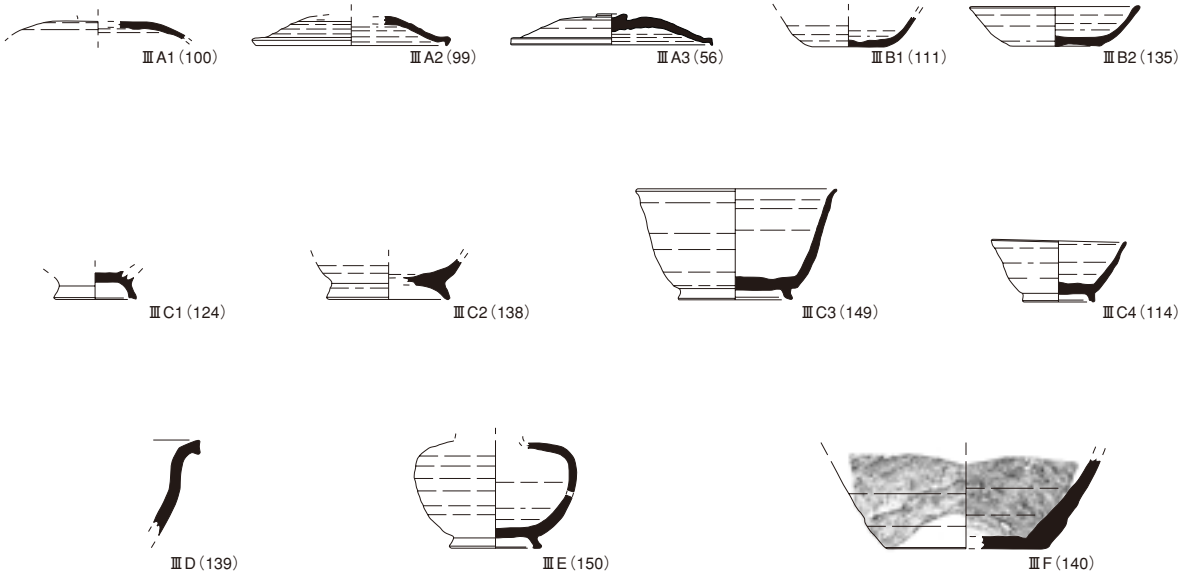
157・158は弥生土器の壺体部と判断される。いずれもⅤ層中からの出土である。外面に平行沈線の渦巻状文が施され、弥生時代中期と判断される。

（かわらけ）

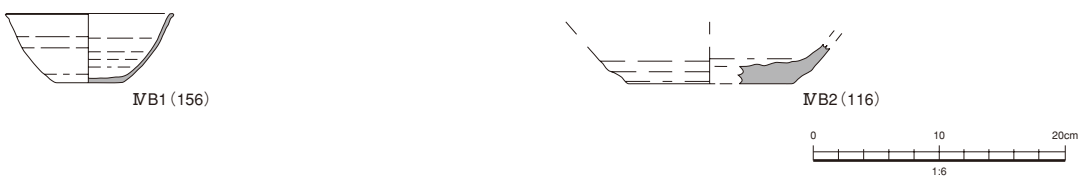
（土師器）



（須恵器）



（赤焼土器）

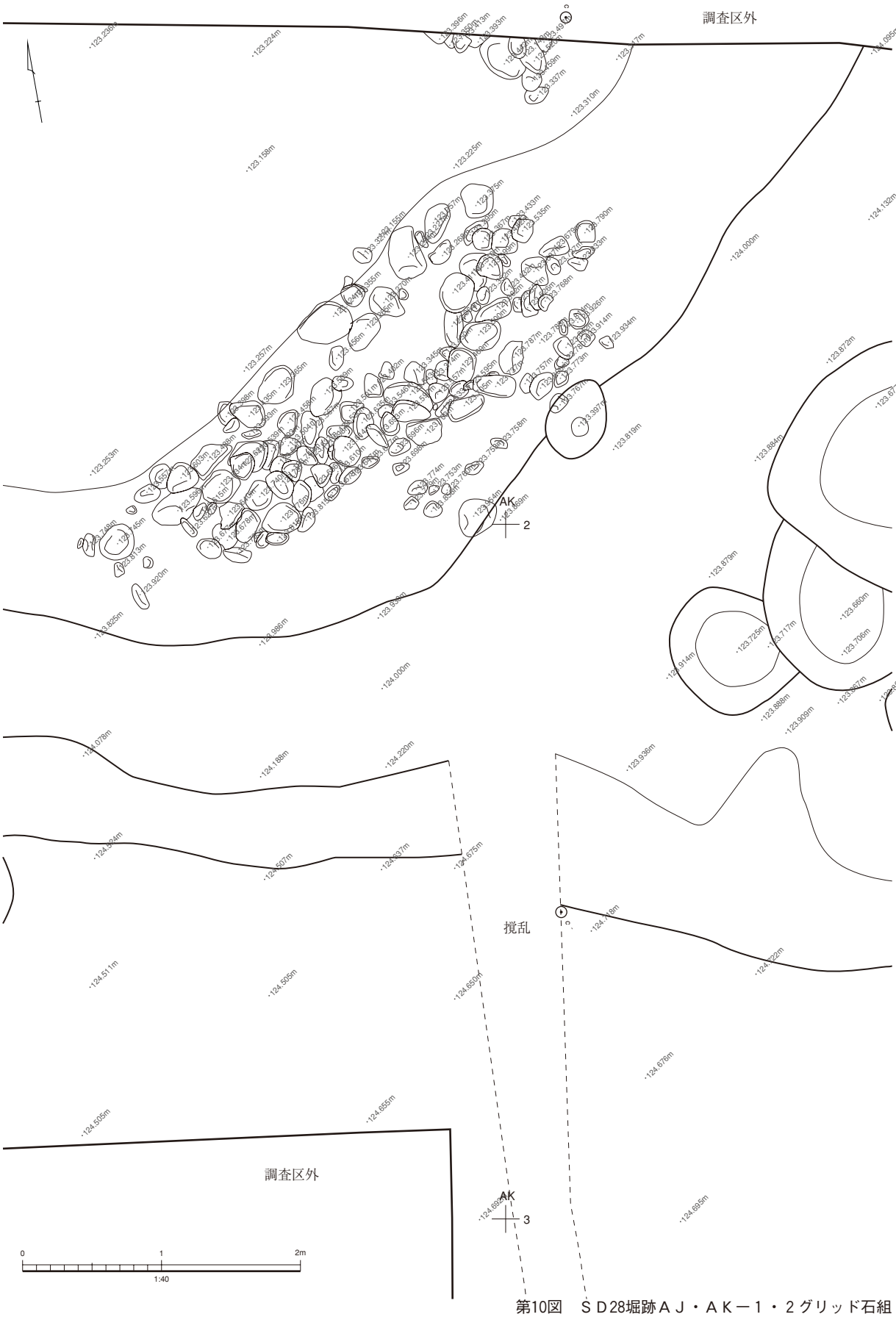


※（　）内は本書掲載遺物番号

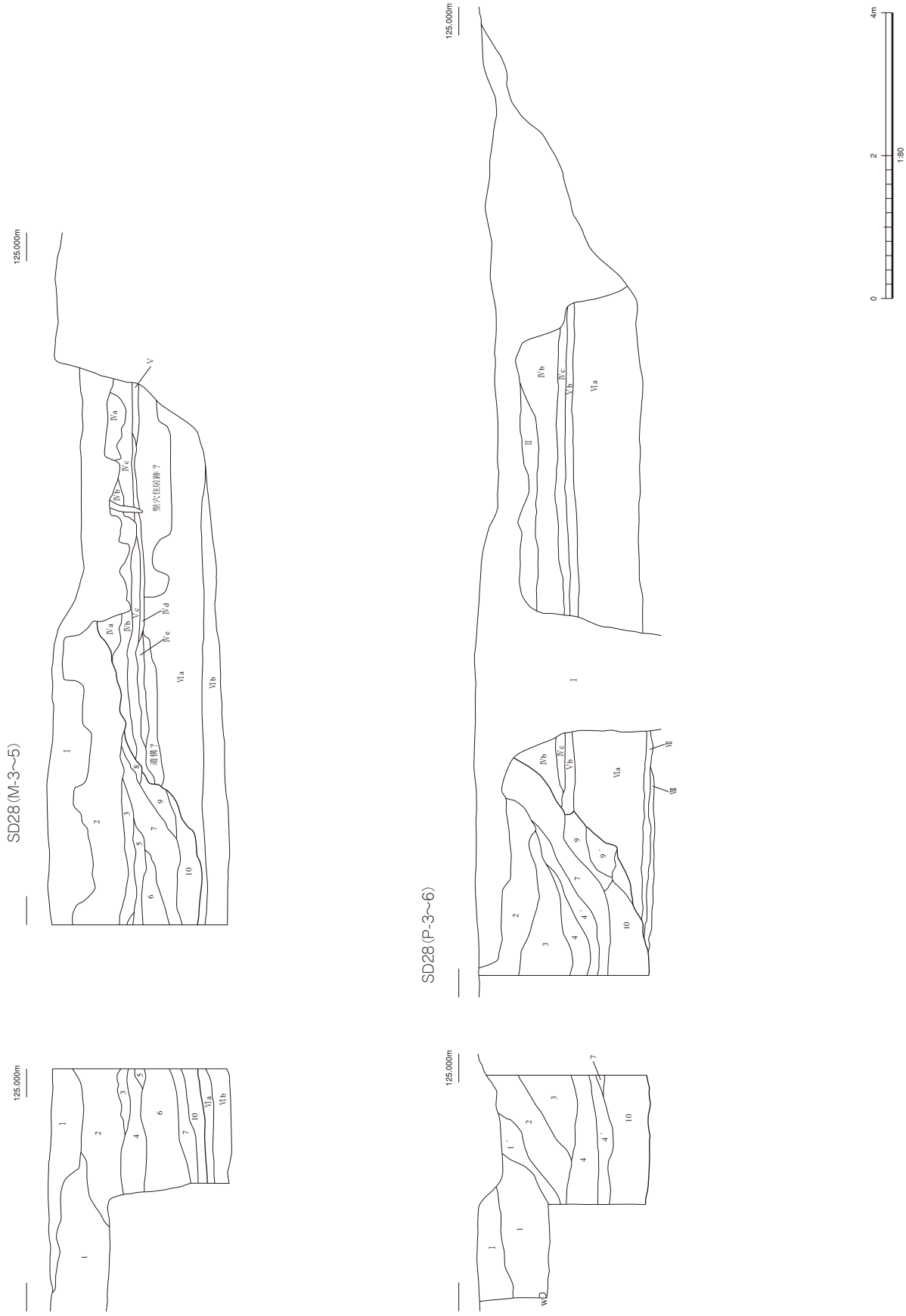
第７図　かわらけ・土師器・須恵器・赤焼土器器形分類図

第８図　遺構配置図（近世以降）

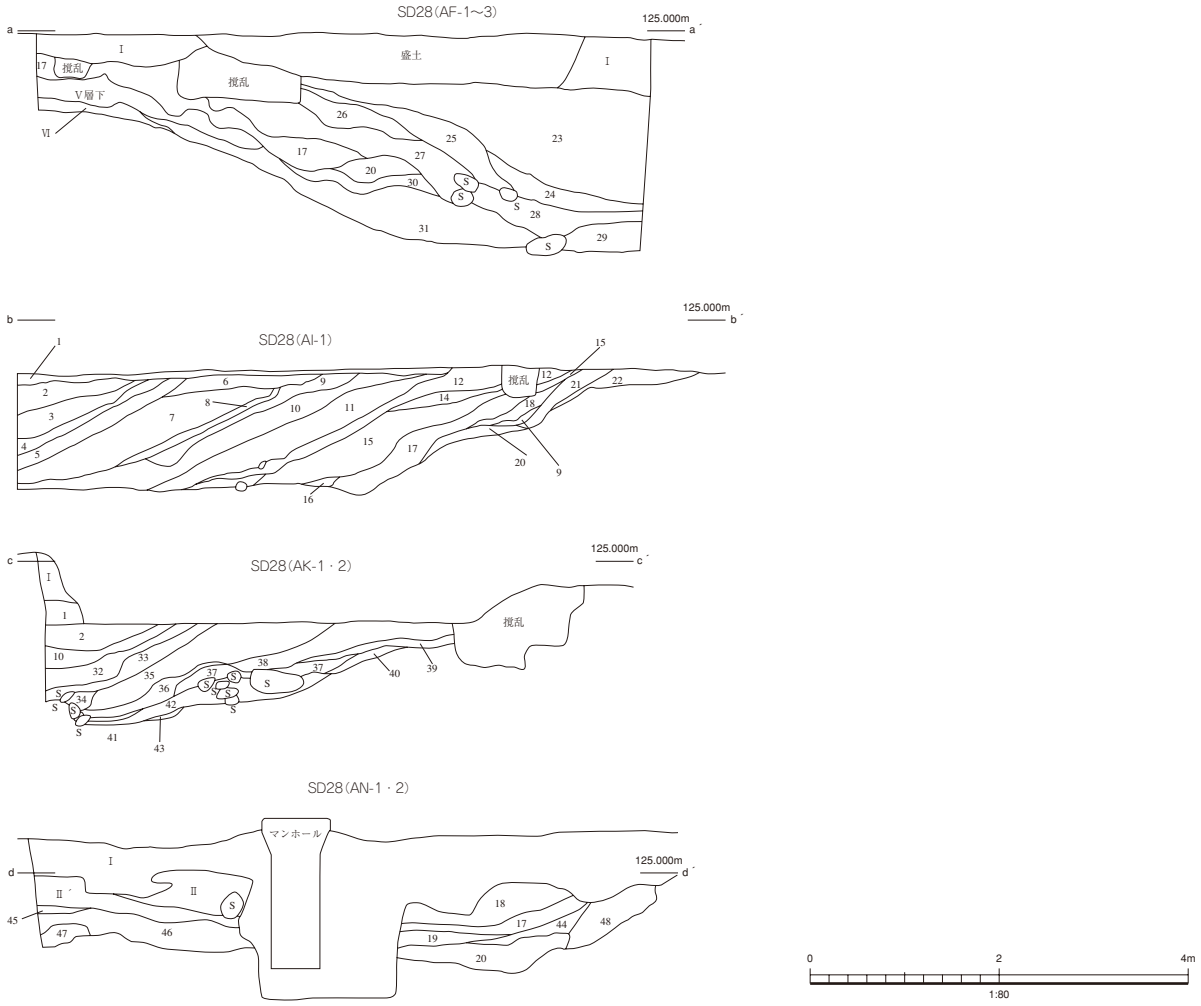
第９図　遺構配置図（近世以前）



第10図　ＳＤ28堀跡ＡＪ・ＡＫ－１・２グリッド石組



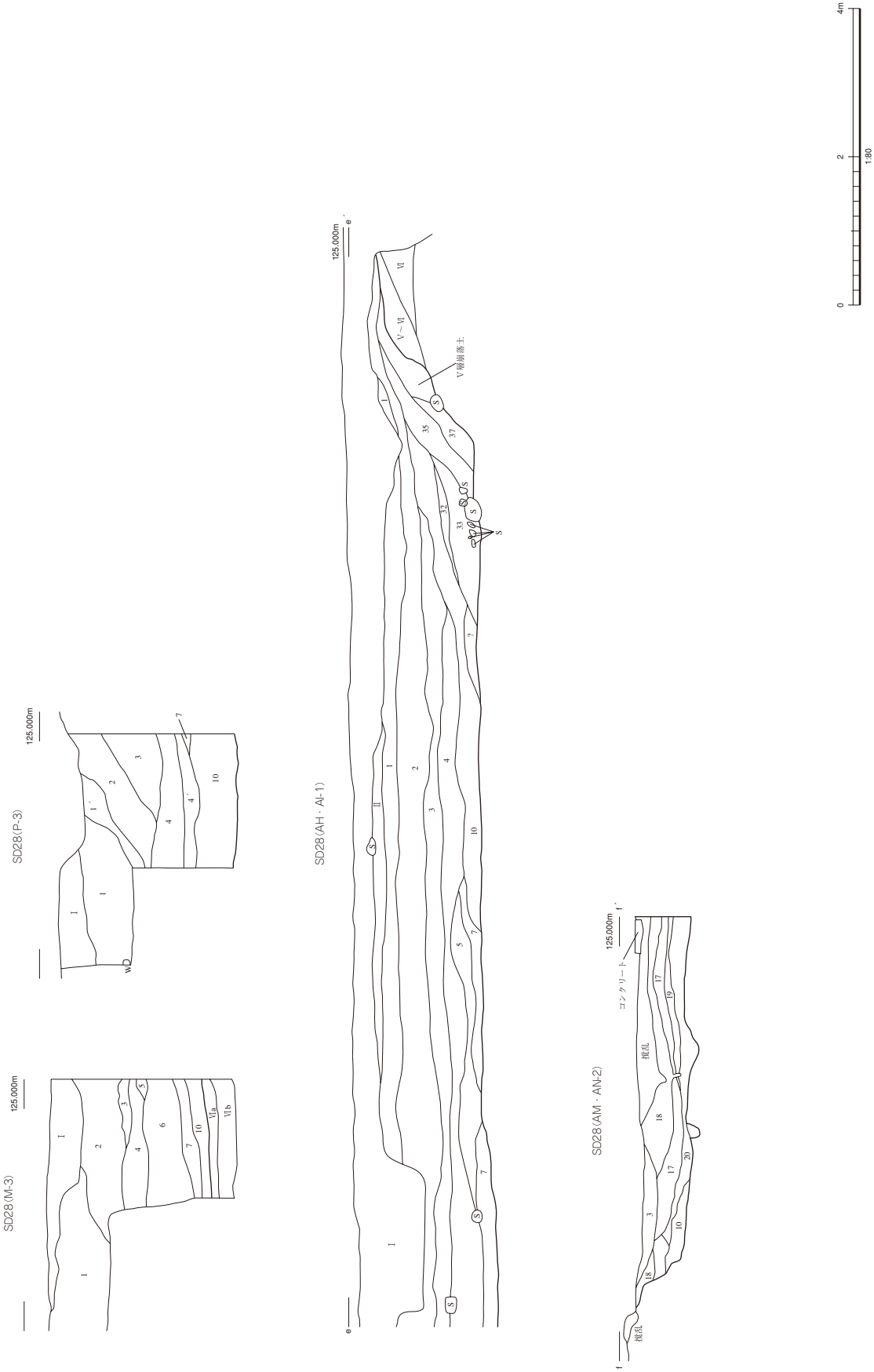
第11図　ＳＤ28堀跡断面図（１）



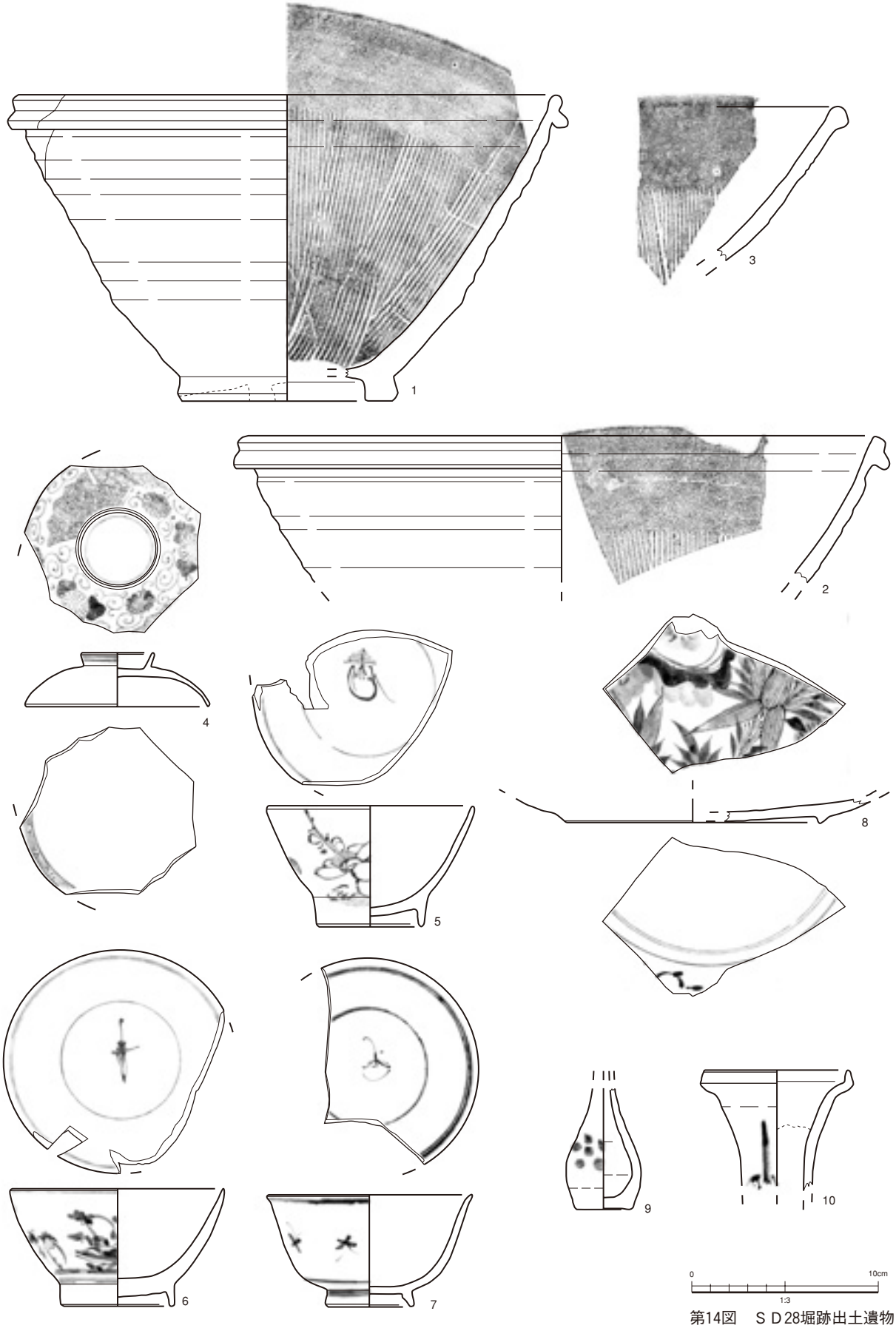
SD28堀跡土層注記

1:10YR4/2灰黄褐色砂質シルト　10YR3/2黒褐色粘土（形状が明確でない）含む（50%）。10YR3/1黒褐色砂質シルト粒状（径5～10mm）に含む（2%）。下部に膜状酸化鉄斑紋あり。炭化物粒あり。細礫含む。
2:10YR3/2黒褐色細砂質シルト　10YR4/1褐灰色シルト粒状(径10～40mm）に含む（30%）。10YR3/1黒褐色砂質シルト粒状（径5～10mm）に含む（2%）。細礫含む。炭化物粒あり。管状酸化鉄斑紋あり。
3:10YR3/3暗褐色粘土質砂　10YR5/2灰黄褐色粘土粒状（径5～20mm）に含む（3%）。10YR3/1黒褐色砂質シルト粒状（径5～20mm）に含む（1%）。細礫含む。炭化物粒あり。酸化鉄斑紋（構造明確でない）あり。
4:10YR3/3暗褐色粘土質砂　10YR5/2灰黄褐色粘土粒状（径5～40mm）に含む（5%）。10YR3/1黒褐色砂質シルト粒状（径10mm）に含む（1%）。10YR5/3にぶい黄褐色細砂粒状（径5mm）に含む（1%）。細礫含む。炭化物粒あり。酸化鉄斑紋（構造明確でない）あり。
5:10YR5/2灰黄褐色粘土　10YR5/3にぶい黄褐色細砂粒状（径5mm）含む（1%）。10YR5/3にぶい黄褐色細砂質粘土粒状（径20～40mm）に含む（20%）。10YR3/2黒褐色シルト質砂粒状（径5mm）に含む（1%）。10YR3/1黒褐色砂質シルト粒状（径5～20mm）に含む（5%）。細礫含む。炭化物粒あり。酸化鉄斑紋（構造明確でない）あり。
6:10YR5/2灰黄褐色粘土　10YR3/2黒褐色砂質シルト混じる。10YR5/3にぶい黄褐色細砂粒状（径3mm）に含む（1%）。10YR3/1黒褐色砂質シルト粒状（径5mm）に含む（2%）。細礫あり。酸化鉄斑紋あり。埋め立てる際に作業をしやすくするため平坦にした層か？
7:10YR3/2黒褐色シルト質粘土　砂混じる。10YR5/2灰黄褐色粘土粒状（50～60mm）に含む（50%）。10YR3/1黒褐色砂質シルト粒状（径5～60mm）に含む（10%）。これらブロックは層の傾斜に併せて帯状に分布する。ブロックの境界には膜状の酸化鉄斑紋が局所的に分布する。細～小礫含む。
8:10YR5/2灰黄褐色粘土　10YR3/2黒褐色砂質シルト混じる。10YR3/1黒褐色砂質シルト粒状（径5～10mm）に含む（1%）。炭化物粒あり。細礫含む。酸化鉄斑紋あり。
9:10YR3/2黒褐色微砂質シルト　10YR5/2灰黄褐色粘土粒状（径5～10mm）に含む（30%）。10YR3/1黒褐色砂質シルト粒状（径5～20mm）に含む（2%）。細礫含む。10YR5/3にぶい黄褐色細砂粒状（径3mm）に含む（1%）。炭化物粒（径10mm）あり。酸化鉄斑紋あり。
10:10YR3/2黒褐色微砂質シルト　10YR5/2灰黄褐色粘土粒状（径5～100mm）に含む（20%）。10YR3/1黒褐色砂質シルト粒状（径5～20mm）に含む（2%）。細礫含む。10YR5/3にぶい黄褐色細砂粒状（径3mm）に含む（1%）。炭化物粒（径10mm）あり。酸化鉄斑紋あり。粒状構造のブロックは下方に偏る。
11:10YR3/2黒褐色粘質シルト　10YR5/2灰黄褐色粘土粒状（5～60mm）に含む（30%）。帯状に分布する。10YR3/1黒褐色砂質シルト粒状（径20mm）に含む（2%）。炭化物粒（径10mm）あり。小亜円礫含む。酸化鉄斑紋あり。
12:10YR3/2黒褐色細砂質シルト　10YR5/2灰黄褐色粘土粒状（5～20mm）に含む（5%）。10YR3/1黒褐色砂質シルト粒状（径5～10mm）に含む（1%）。10YR5/3にぶい黄褐色細砂粒状（径5mm）に含む（1%）。細礫含む。炭化物粒あり。上部に管状酸化鉄斑紋あり。
13:10YR3/2黒褐色粘質シルト　10YR5/2灰黄褐色粘土粒状（5～20mm）に含む（10%）。10YR3/1黒褐色砂質シルト粒状（径5～20mm）に含む（2%）。
14:10YR3/2黒褐色細砂質シルト　10YR5/2灰黄褐色粘土粒状（径5～10mm）に含む（1%）。炭化物粒あり。細礫あり。
15:10YR3/3暗褐色微砂質シルト　ほぼ均質。10YR3/1黒褐色砂質シルト粒状（径10mm）に含む（1%）。ただし粒状構造はっきりしない。細礫含む。亜円礫（径10～50mm）含む（2%）。炭化物粒あり。酸化鉄斑紋あり。
16:10YR2/2黒褐色粘土　均質。自然堆積土。
17:7.5YR3/1黒褐色粘土　上部の15との境界は砂質。ほぼ均質。亜円礫（径30～50mm）含む（2%）。砂混じる。炭化物粒あり。自然堆積土。SD1溝跡の上位の層と似る。
18:10YR4/1褐灰色微砂質粘土　ほぼ均質。炭化物粒あり。酸化鉄斑紋あり。SD１溝跡4層と似る。
19:10YR4/1褐灰色微砂質粘土　10YR3/1黒褐色砂質シルト粒状（径20mm）に含む（5%）。10YR5/3にぶい黄褐色細砂粒状（径5mm）に含む（1%）。
20:10YR3/3黒褐色粗砂　砂礫層。亜円礫（径20～40mm）を含む。淘汰が悪い。酸化鉄斑紋で本来の色調判らず。古代の遺物を包含する。
21:7.5YR4/1褐灰色微砂質粘土　ほぼ均質。細礫含む。酸化鉄斑紋あり。
22:10YR2/2黒褐色粘土質砂　ほぼ均質。細礫含む。
23:10YR4/1褐灰色微砂　亜円礫（径50～150mm）含む。10YR3/1黒褐色微砂粒状（径10mm）に含む。酸化鉄斑紋あり。炭化物粒あり。
24:10YR3/2黒褐色シルト質砂　10YR3/1黒褐色微砂粒状（径20mm）にあり。10YR5/2灰黄褐色砂混じる。酸化鉄斑紋あり。
25:10YR4/1褐灰色シルト質砂　亜円礫（径10～20mm）含む。植物根あり。ボソボソする。
26:10YR3/2黒褐色シルト質砂　上部に植物根及び炭化物あり。亜円礫（径10～20mm）含む（25より少ない）。ボソボソする。
27:10YR4/1褐灰色微砂　10YR5/2灰黄褐色砂混じる。酸化鉄斑紋あり。亜円礫（径40mm）含む。植物根あり。
28:2.5Y6/3にぶい黄色砂　亜円礫（径50～100mm）含む。10YR4/1褐灰色微砂粒状（径10mm）に含む。細礫含む。酸化鉄斑紋あり。
29:10YR4/1褐灰色微砂　10YR5/2灰黄褐色砂混じる。酸化鉄斑紋あり。炭化物粒あり。
30:10YR5/3にぶい黄褐色砂　亜角礫（径50mm）含む。粗砂混じる。
31:10YR5/3にぶい黄褐色砂　10YR4/1褐灰色微砂、10YR6/1褐灰色微砂の平行ラミナ発達。
32:7.5YR4/1褐灰色微砂　10YR5/2灰黄褐色微砂粒状（径10～20mm）に含む（20%）。10YR2/1黒色細砂粒状（径10mm）に含む（10%）。
33:10YR4/1褐灰色シルト質砂　砂混じる。細礫あり。酸化鉄斑紋あり。ほぼ均質だが、ボソボソする。
34:10YR3/2黒褐色シルト質砂　細礫あり。ほぼ均質。酸化鉄斑紋あり。
35:7.5YR3/1黒褐色砂質シルト　砂混じる。細礫あり。ほぼ均質。酸化鉄斑紋あり。
36:7.5YR3/1黒褐色砂質シルト　ほぼ均質。酸化鉄斑紋あり。35より粘質。
37:10YR4/1褐灰色シルト質砂　砂混じる。酸化鉄斑紋あり。
38:10YR4/1褐灰色粘質シルト　10YR7/1灰白色細砂粒状（径5mm）に含む（5%）。10YR2/1黒色細砂粒状（径10mm）に含む（5%）。細礫あり。酸化鉄斑紋あり。
39:10YR4/1褐灰色粘質シルト　ほぼ均質。細礫あり。酸化鉄斑紋あり。
40:10YR4/3にぶい黄褐色砂　10YR4/1褐灰色細砂の平行ラミナあり。酸化鉄斑紋あり。
41:10YR4/1褐灰色砂　10YR4/3にぶい黄褐色砂混じる。酸化鉄斑紋あり。
42:2.5Y5/2暗灰黄色細砂　7.5YR3/1黒褐色砂質シルト混じる。酸化鉄斑紋あり。
4310YR1.7/1黒色粘質シルト　均質。
44:10YR4/1褐灰色砂　10YR6/3にぶい黄橙色砂混じる。細礫あり。酸化鉄斑紋あり。
45:10YR3/3暗褐色砂　ラミナか？
46:10YR3/2黒褐色細砂　炭化物粒含む。10YR5/3にぶい黄褐色砂混じる。酸化鉄斑紋あり。
47:10YR4/1褐灰色微砂　10YR6/3にぶい黄橙色砂（扇起因）混じる。酸化鉄斑紋あり。
48:7.5YR3/1黒褐色粘質シルト　ほぼ均質。SD1溝跡4層と似る。

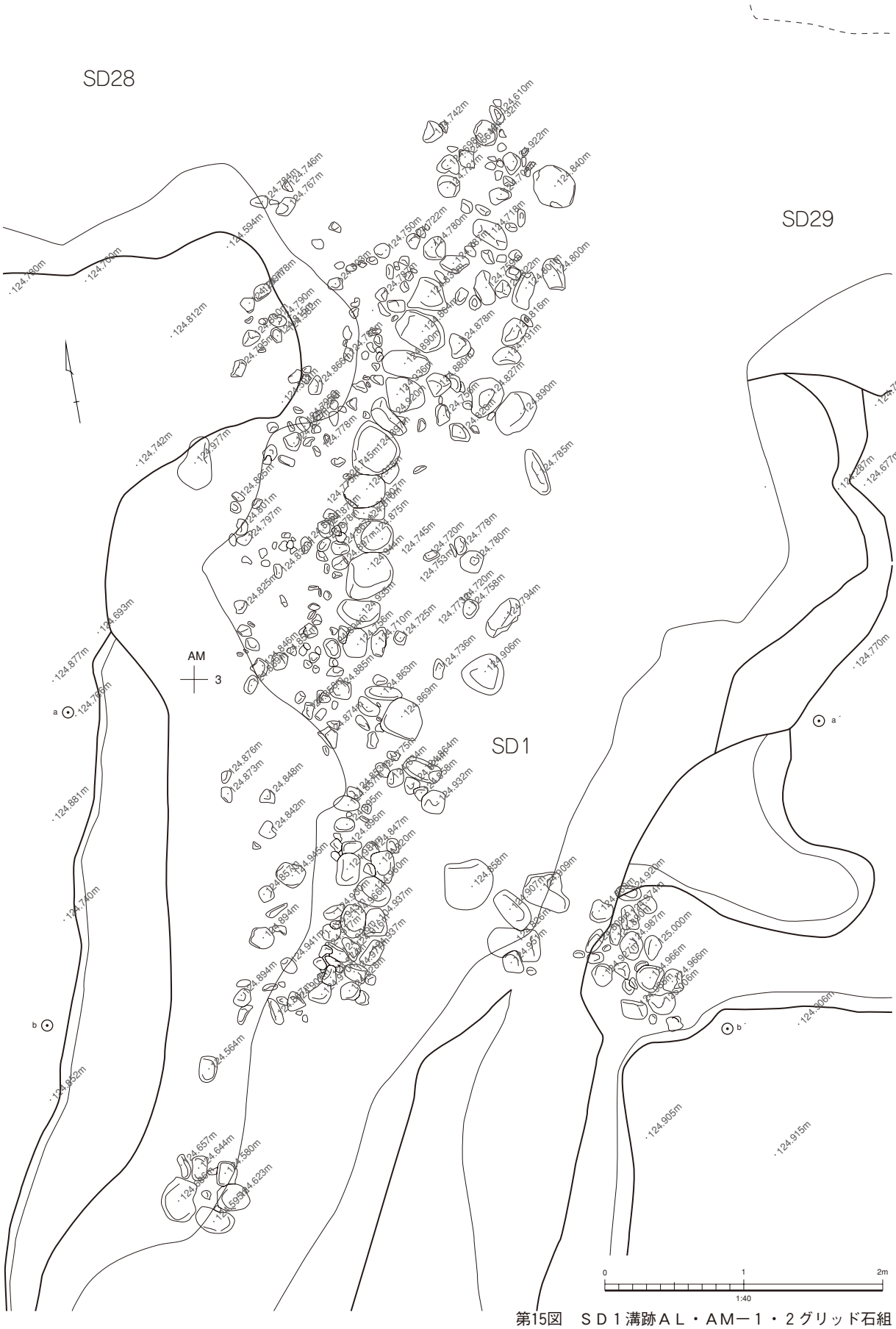
第12図　ＳＤ28堀跡断面図（２）



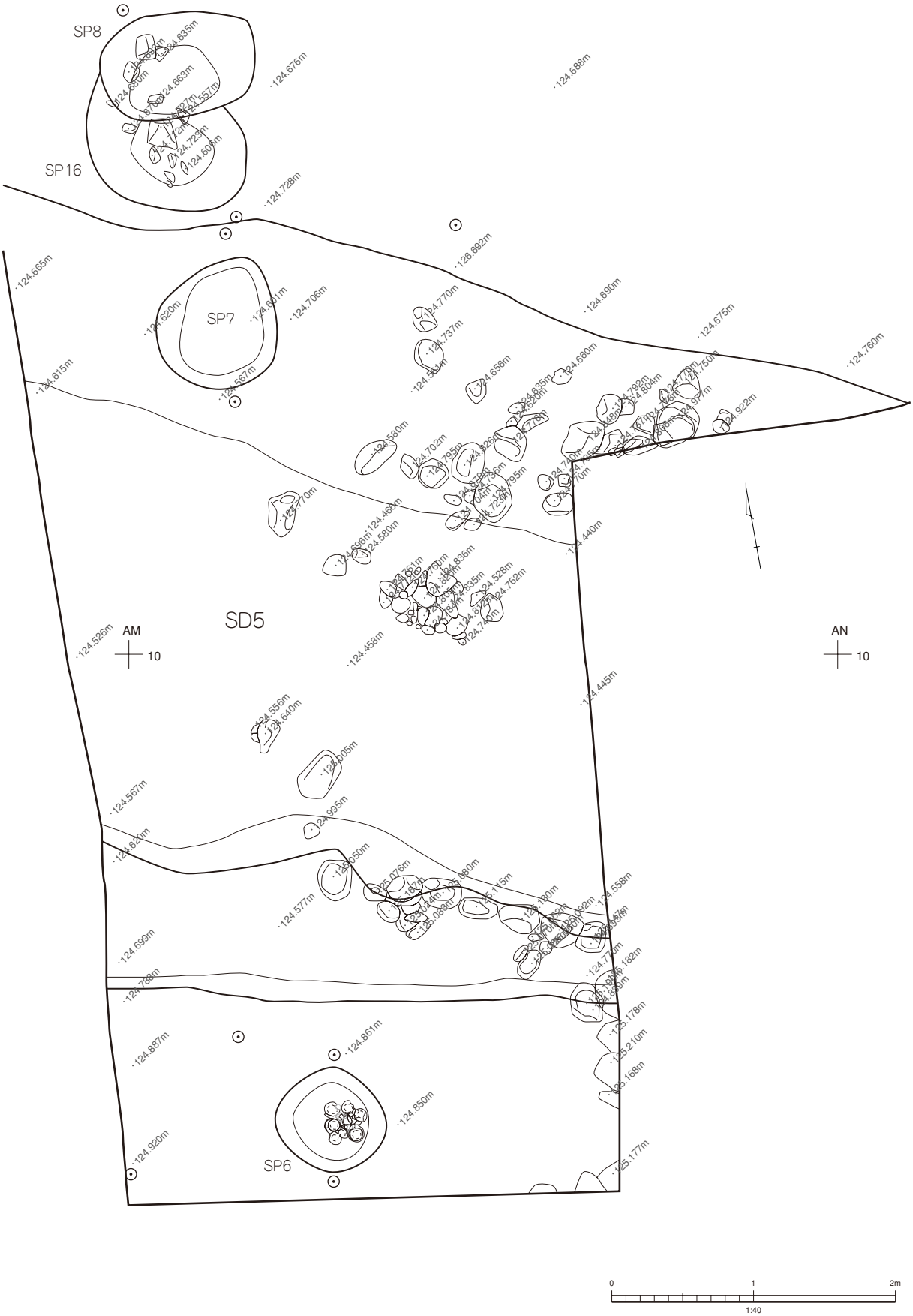
第13図　ＳＤ28堀跡断面図（３）



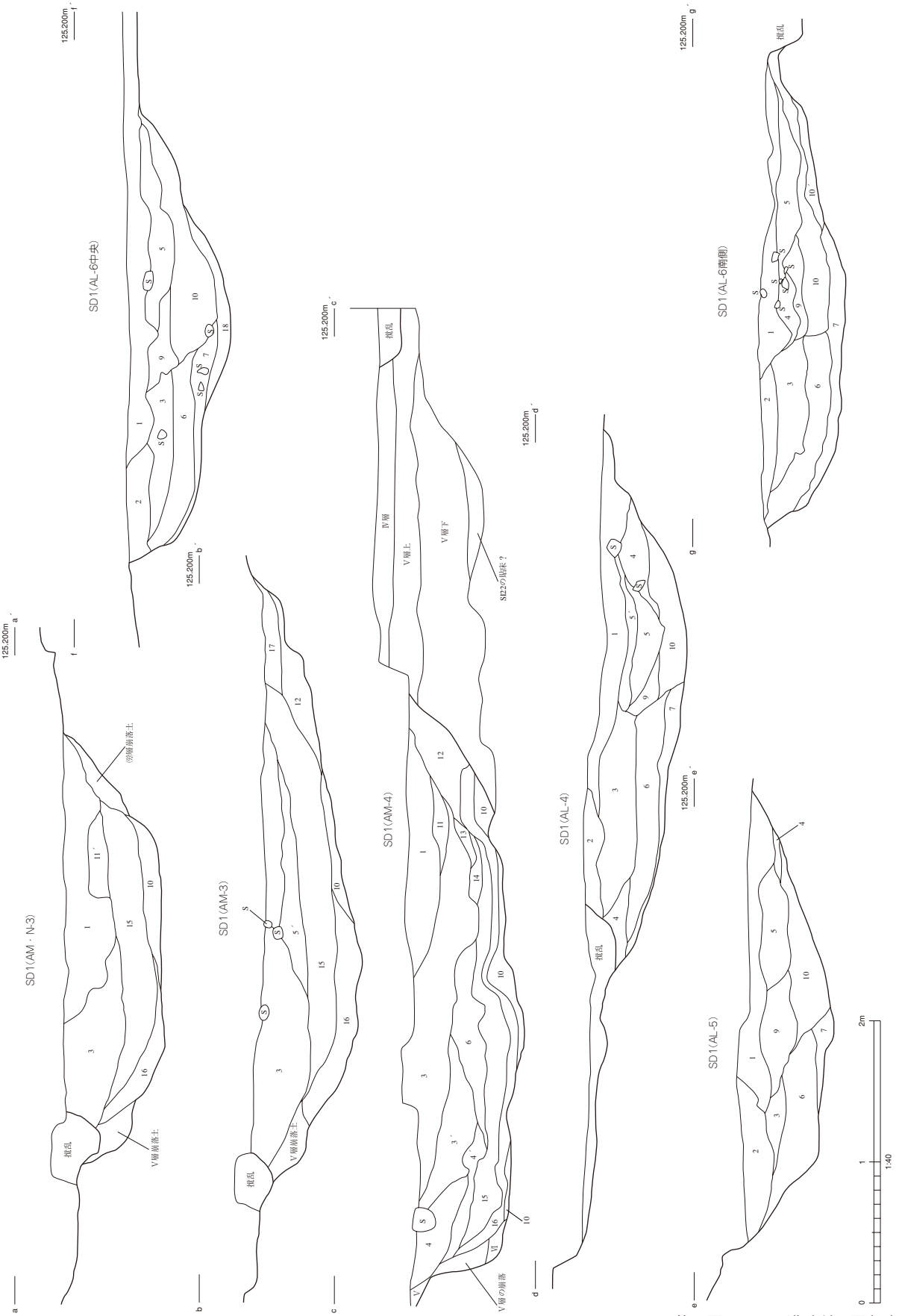
第14図　ＳＤ28堀跡出土遺物



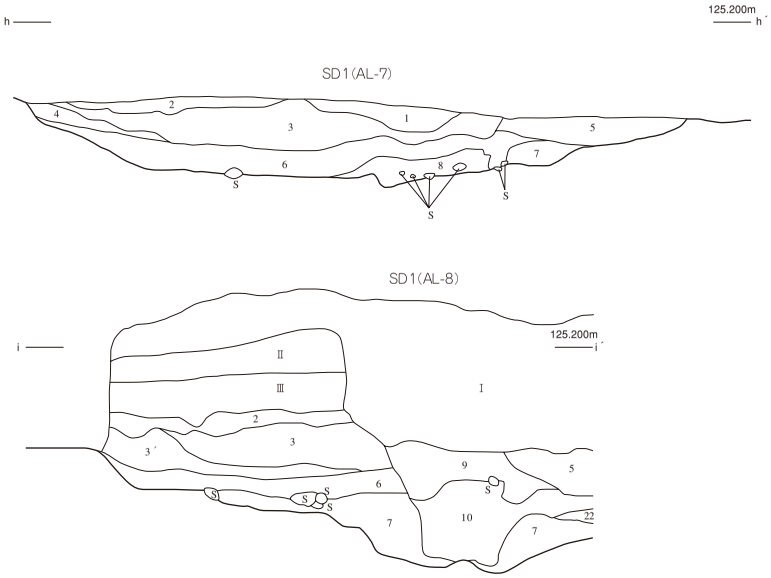
第15図　ＳＤ１溝跡ＡＬ・ＡＭ－１・２グリッド石組



第16図　ＳＤ５溝跡石組

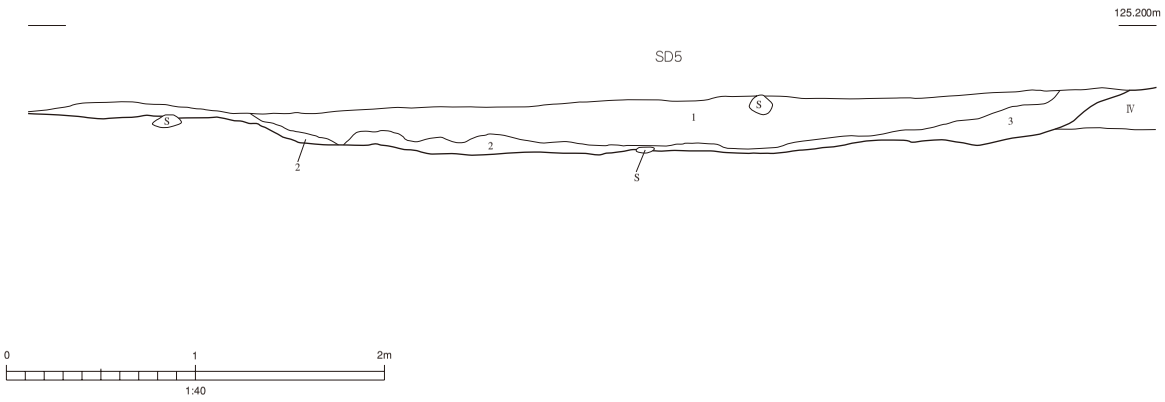


第17図　ＳＤ１溝跡断面図（１）



SD1溝跡土層注記

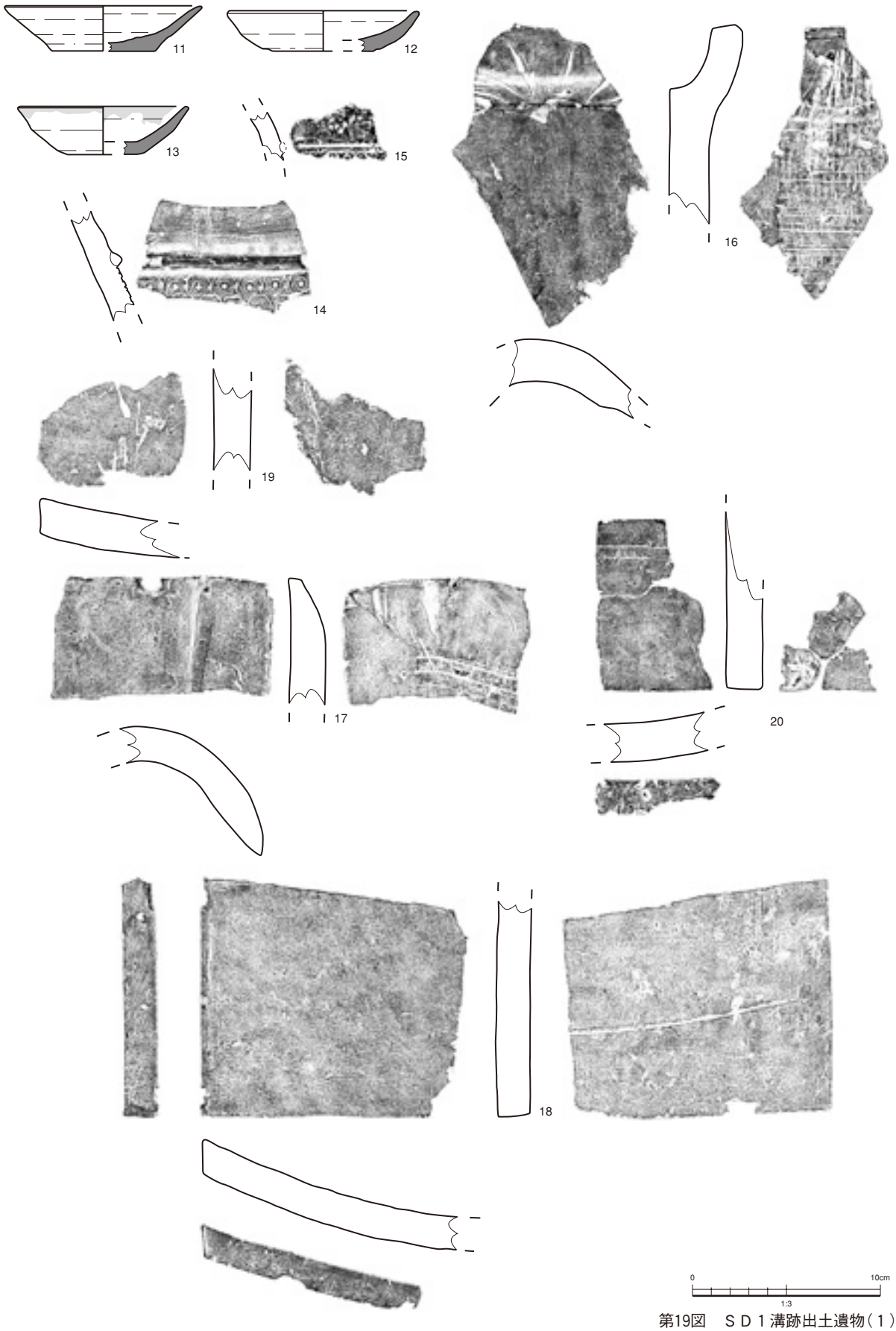
1:10YR3/2黒褐色微砂質粘土～シルト　北へ行くほど粒度が小さくなる。10YR8/1灰白色砂の波状ラミナが発達する（北側へ行くにつれ発達する。）。管状酸化鉄斑紋あり。炭化物粒あり。
2:10YR4/1褐灰色微砂質シルト　ほぼ均質。管状酸化鉄斑紋あり（1より発達）。炭化物粒あり。
3:10YR4/1褐灰色微砂質粘土　10YR8/1灰白色砂の波状ラミナが非常に発達する。AL-6グリッドでは、10YR8/1灰白色粗砂の波状ラミナが上位～中位に発達する。ラミナ周囲に板状酸化鉄斑紋発達。炭化物粒あり（2より大きい）。溝の岸側に管状酸化鉄斑紋あり。AM-4グリッドでは、粘土の比率が殆ど無くなりラミナが主体となる。
3´:10YR4/1褐灰色粘土　下部に炭化物粒含む。
4:10YR4/1褐灰色微砂質粘土　均質。管状酸化鉄斑紋あり。
4´:10YR4/1褐灰色微砂質粘土　ほぼ均質。砂混じる。
5:10YR4/1褐灰色微砂　10YR8/1灰白色細砂の平行ラミナ発達。上位に炭化物粒あり。
5´:10YR4/1褐灰色微砂質粘土　10YR8/1灰白色砂の平行ラミナ厚く発達。
6:10YR4/1褐灰色粘土　10YR8/1灰白色微砂の平行ラミナ発達。西側で砂の混入多くなる。管状酸化鉄斑紋あり。炭化物粒あり。AM-4グリッドでは粘土の比率が殆ど無くなりラミナが主体となる。
7:10YR3/2黒褐色砂　北側へ行くにつれ粗粒になる。10YR8/1灰白色砂の波状ラミナあり。周囲に板状酸化鉄斑紋あり。亜円礫（径20～40mm）含む。
8:10YR4/1褐灰色微砂　10YR8/1灰白色微砂の波状ラミナ発達。管状酸化鉄斑紋あり。炭化物粒あり。
9:10YR3/2黒褐色細砂　砂混じる。炭化物粒あり。管状酸化鉄斑紋あり。細礫含む。ラミナが無い。
10:10YR3/2黒褐色砂　細礫あり。管状酸化鉄斑紋あり。Ⅴ層起因の10YR2/1黒色細砂ブロック含む（溝の立ち上がりに多い。北側へ行くにつれブロックが多きくなる）。下部に亜円礫（径5～40mm）含む。
10´:10YR3/2黒褐色砂　Ⅵ層の土混じる。地山の崩落。
11:10YR4/1褐灰色粘土　炭化物ブロック多量に含む。殆どが炭。ほぼ均質。
12:10YR4/1褐灰色粘土　炭化物ブロック含む（5%）。10YR2/1黒色砂（Ⅴ層）ブロック含む。
13:10YR4/1褐灰色粘土　10YR8/1灰白色砂の平行ラミナやや発達。酸化鉄斑紋あり。
14:10YR4/1褐灰色粘土　10YR8/1灰白色砂の平行ラミナやや発達。酸化鉄斑紋あり。13との境界に砂の薄層あり。
15:10YR4/1褐灰色粘土　10YR8/1灰白色砂ブロック含む。
16:10YR4/1褐灰色粘土　ほぼ均質。10YR8/1灰白色砂ブロック僅かに含む。
17:10YR4/2灰黄褐色砂質シルト　細礫あり。酸化鉄斑紋あり。
18:10YR5/3にぶい黄褐色砂　ほぼ均質。Ⅳ層起因。暗褐色シルトの平行ラミナやや発達。
19:10YR2/1黒色細砂　細礫あり。炭化物あり。10YR6/1褐灰色微砂粒状（径5mm）にあり。
20:10YR4/1褐灰色粘質シルト　東側に10YR6/1褐灰色微砂の平行ラミナあり。中央部はラミナの平行が崩れ、乱流の様相を呈し、かつ粒度が大きくなり砂になる。
21:10YR4/1褐灰色微砂　10YR6/3灰黄褐色砂の平行ラミナとブロックを含む。下部はSD28堀跡の22層と似る。
22:10YR4/1褐灰色粘質細砂　炭化物の平行ラミナあり。焼土ブロック（径20～40mm）含む。Ⅴ層の土混じる。西側でより比率が多くなり、かつブロックが大きくなる。また白色粘土ブロックを含むようになる。付近から被熱した土師器長胴甕が出土することから、破壊された竪穴住居のカマド起因の堆積土と推定される。



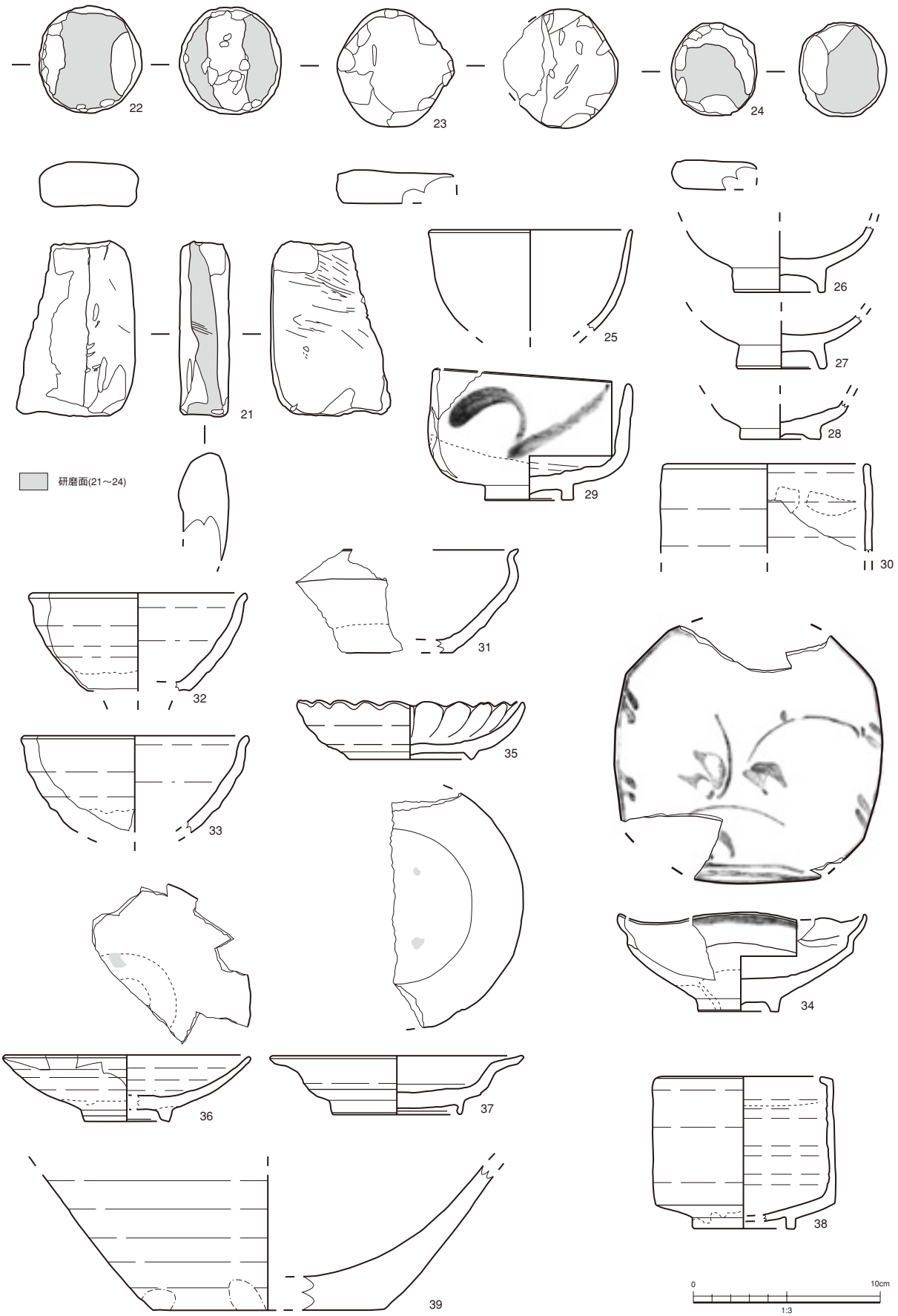
SD5溝跡土層注記

1:10YR3/2黒褐色微砂質シルト　ほぼ均質。暈管状酸化鉄斑紋あり。炭化物粒あり。粗砂混じる。Ⅲ層に似る。
2:10YR4/1褐灰色細砂　10YR6/2灰黄褐色粗砂の平行ラミナあり。Ⅳ層に似る。
3:10YR3/2黒褐色微砂質シルト　10YR6/2灰黄褐色粗砂ブロック混じる。亜円礫（径5～20mm）含む。砂の廻りに酸化鉄斑紋発達。南側では10YR6/2灰黄褐色粗砂の平行ラミナやや発達。下部にはⅤ層のブロック含む。

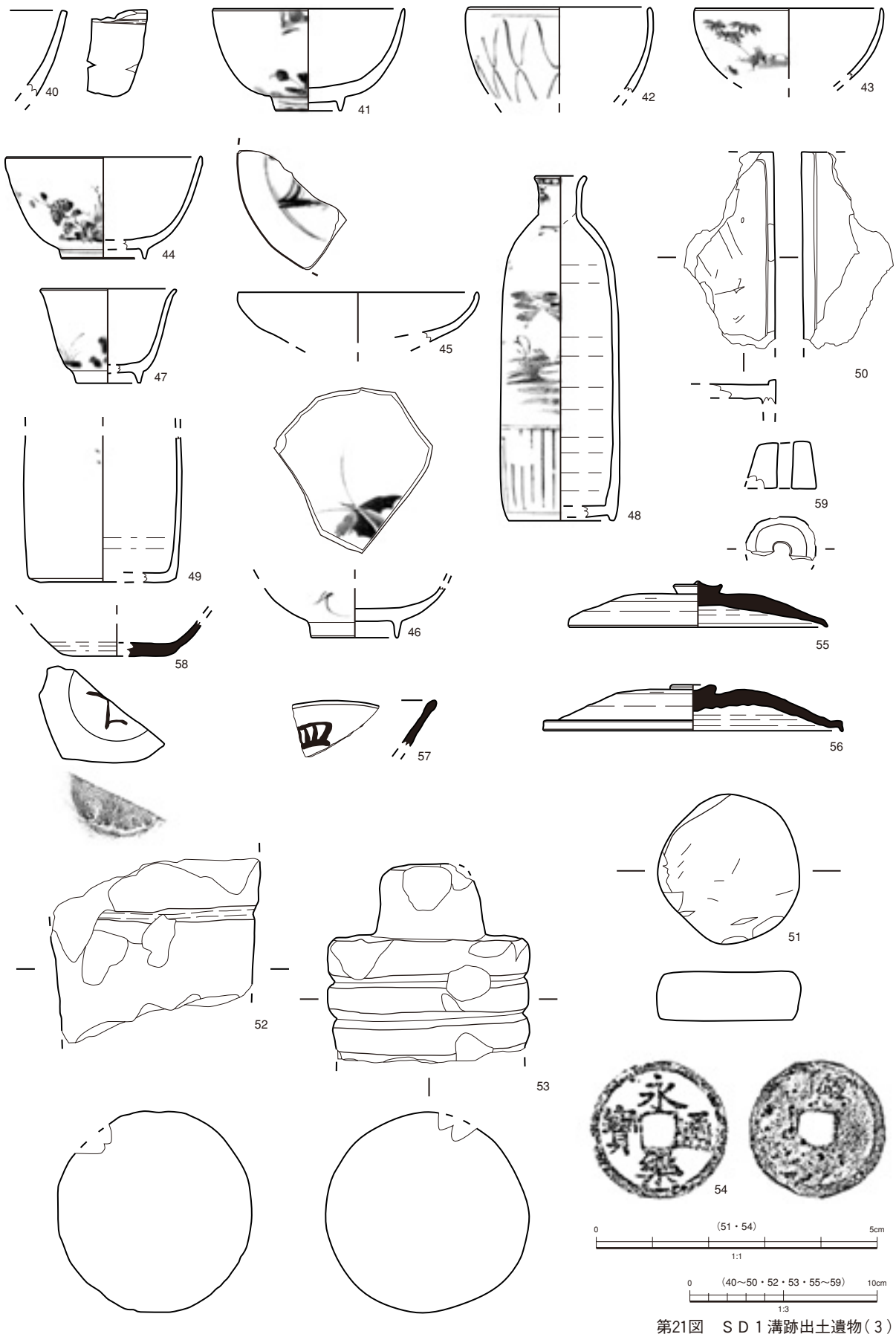
第18図　ＳＤ１溝跡断面図（２）・ＳＤ５溝跡断面図



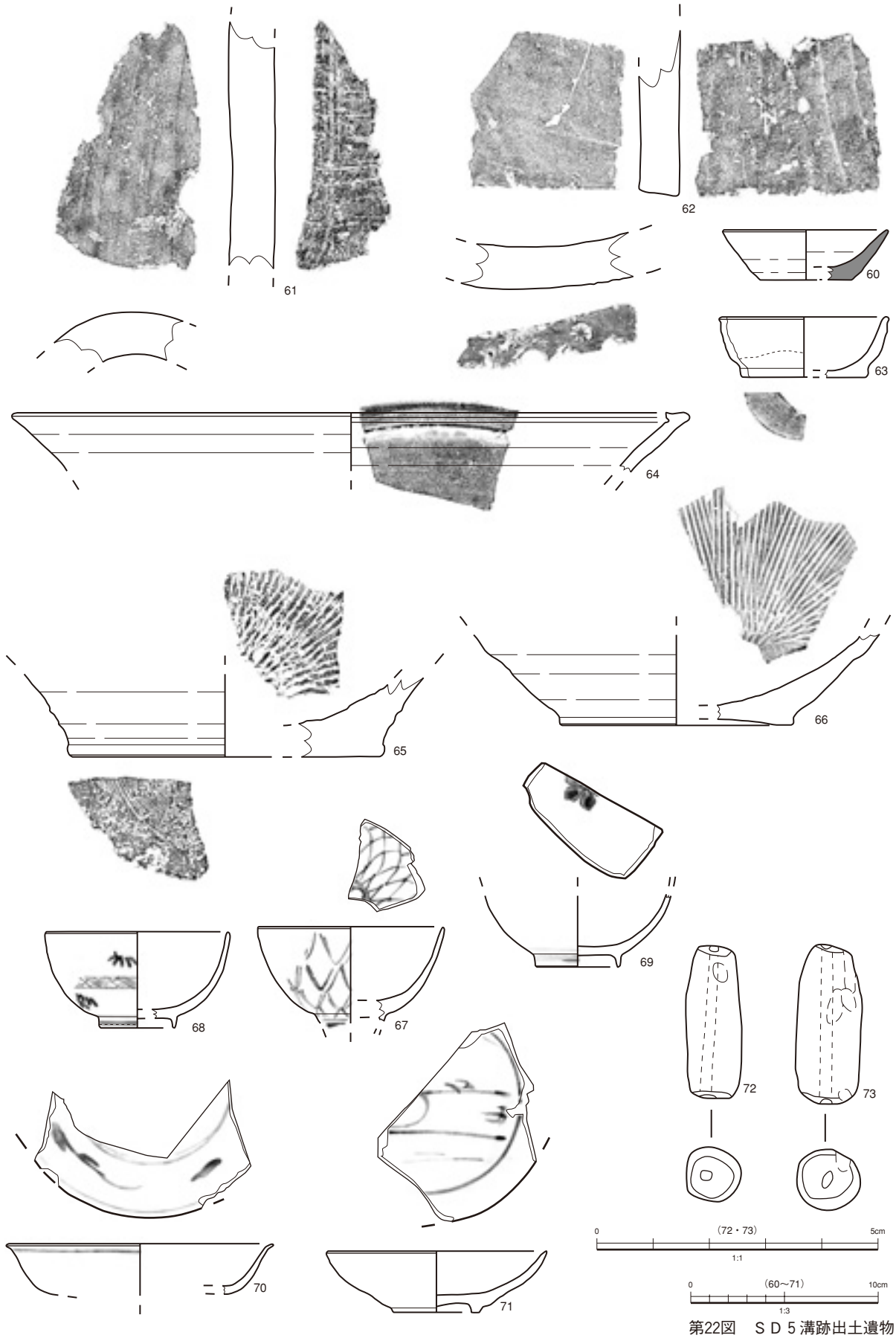
第19図　ＳＤ１溝跡出土遺物（１）



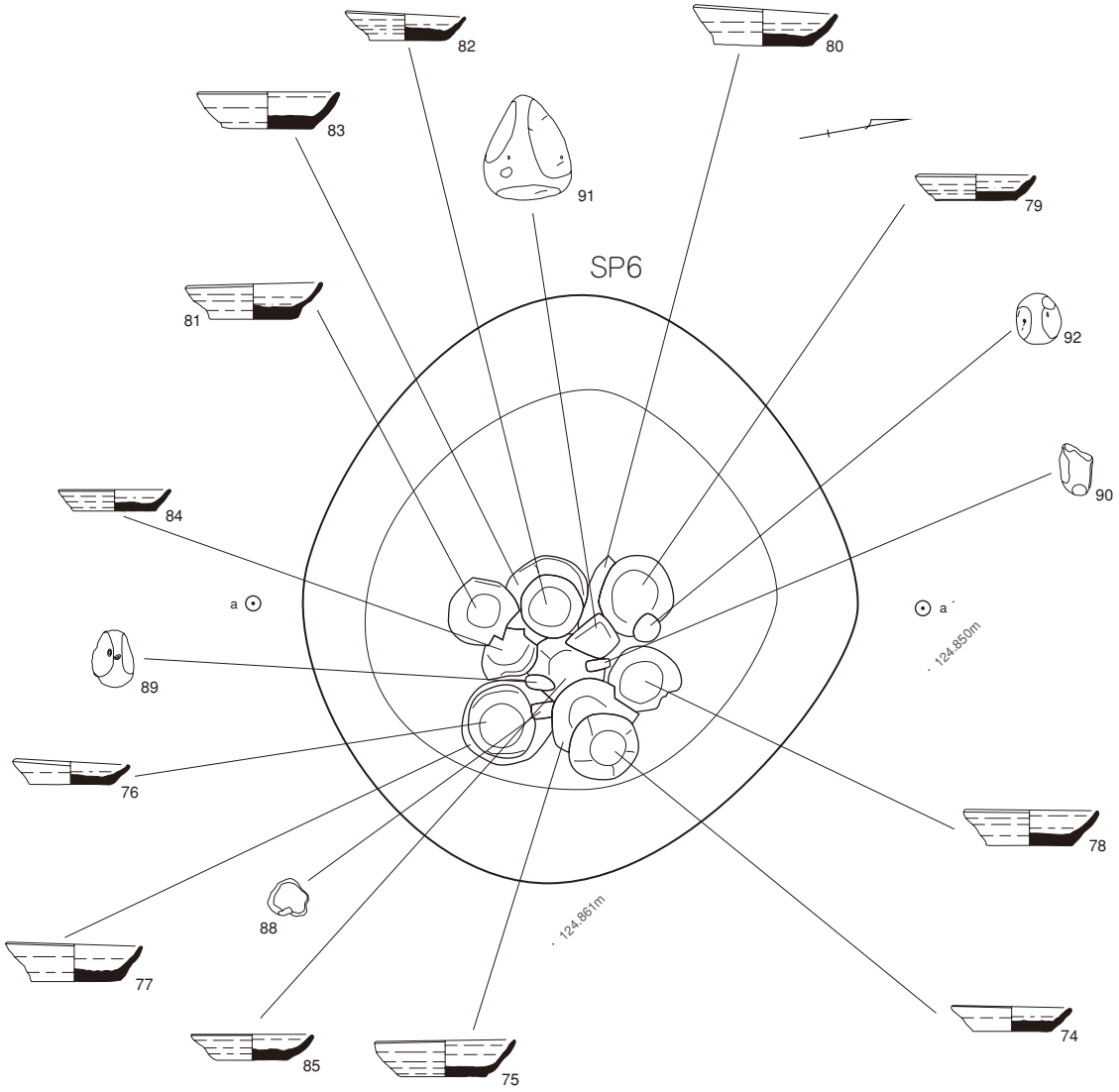
第20図　ＳＤ１溝跡出土遺物（２）

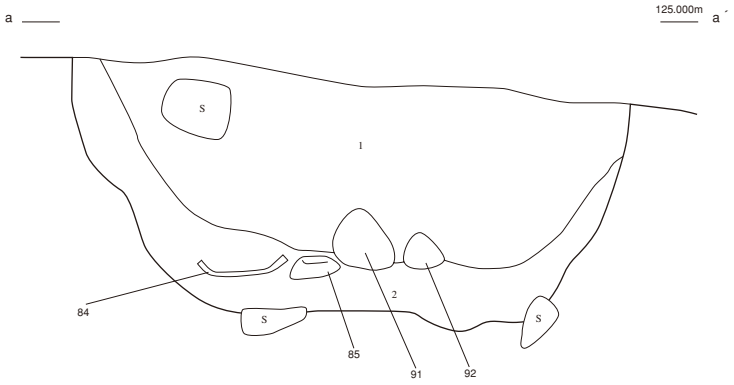


第21図　ＳＤ１溝跡出土遺物（３）



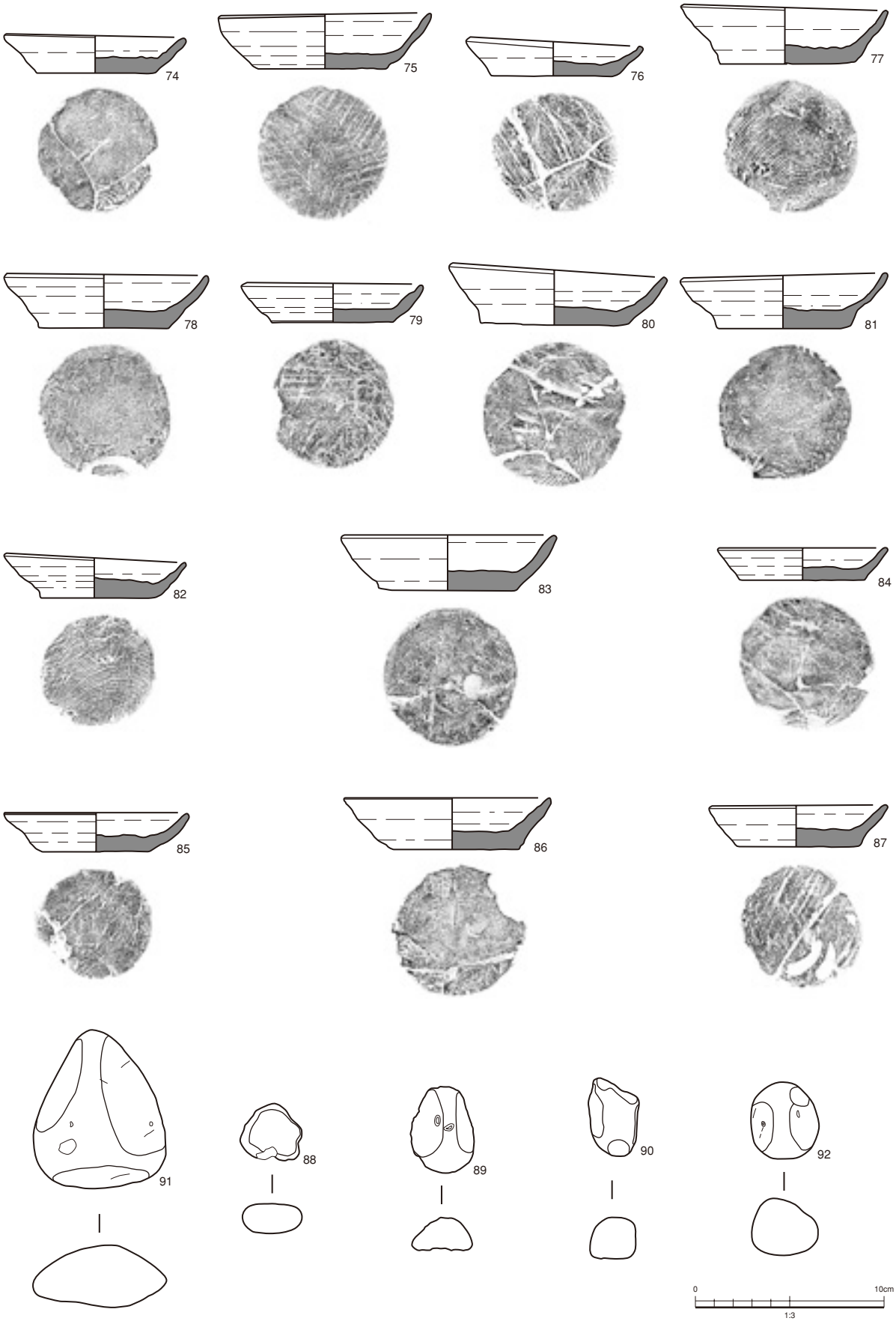
第22図　ＳＤ５溝跡出土遺物



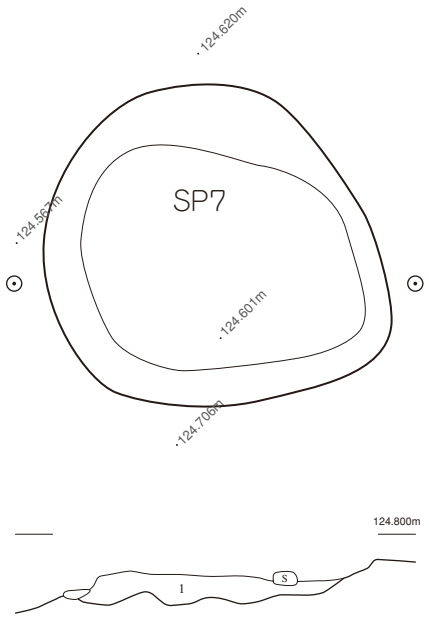


SP6土層注記
1:10YR4/2灰黄褐色微砂質シルト　植物根あり。礫（径3～5cm）僅かに混じる。SP71層と近似。Ⅳ層と近似。
2:10YR3/1黒褐色微砂質シルト　10YR2/2黒褐色細砂質シルト（Ⅴ層起因？）粒状（径10mm）に含む（20%）。
　かわらけ埋納時の堆積土か？

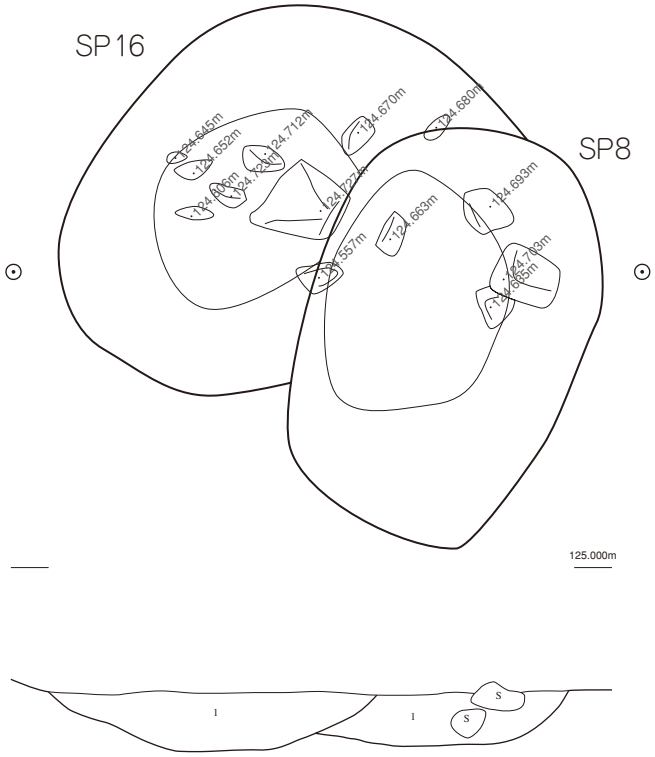
第23図　ＳＰ６不明ピット



第24図　ＳＰ６不明ピット出土遺物

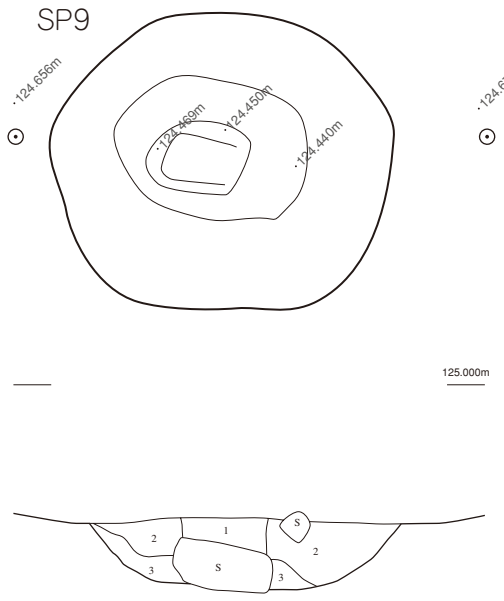


SP7土層注記
1:10YR5/3にぶい黄褐色微砂質シルト　酸化鉄斑紋あり。
炭化物粒（径10mm）わずかに含む。Ⅳ層のブロック（径1～20mm）微量に含む。

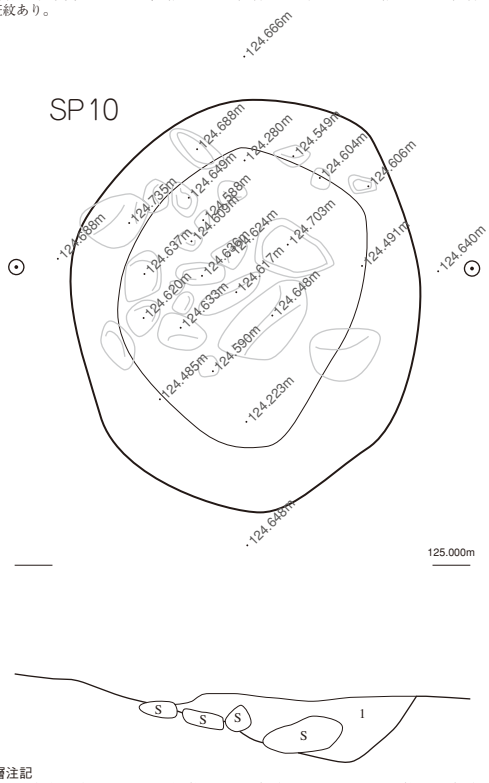


SP8土層注記
1:10YR4/1褐灰色微砂質シルト　Ⅴ層ブロック（径5mm）含む（2%）。
酸化鉄斑紋あり。炭化物粒あり。

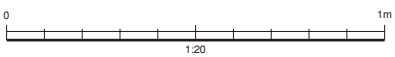
SP16土層注記
1:10YR4/1褐灰色微砂質シルト　円礫（径5～20mm）含む。Ⅴ層ブロック（径5～20mm）含む（5%）。
酸化鉄斑紋あり。



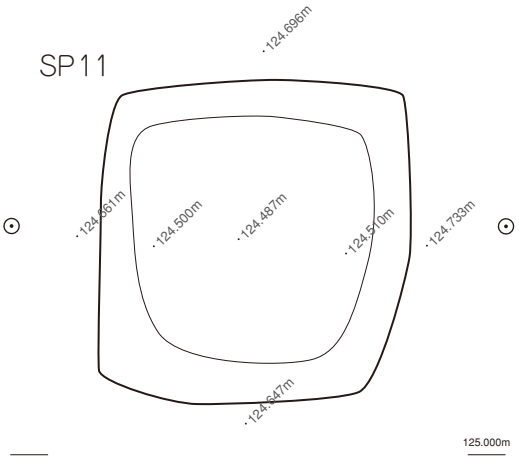
SP9土層注記
1:10YR4/1褐灰色微砂質シルト　細礫混じる。酸化鉄斑紋あり。炭化物粒あり。
2:10YR4/1褐灰色微砂質シルト　1と似るがⅤ層のブロック（径20mm）を含む（5%）。
3:10YR4/1褐灰色シルト質粘土　粗砂混じる。



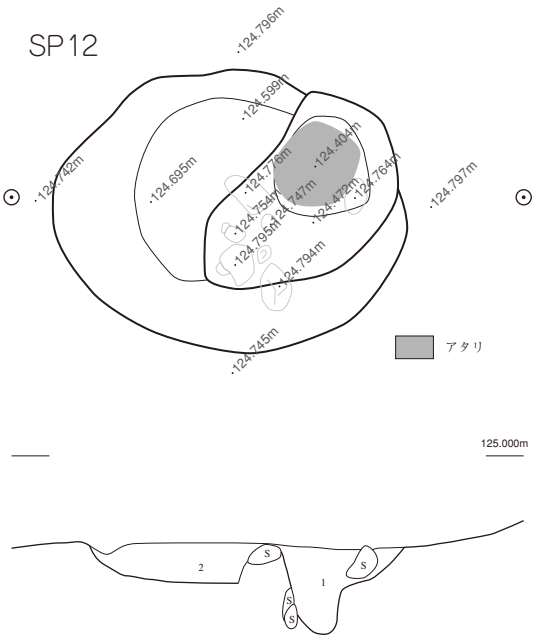
SP10土層注記
1:10YR4/1褐灰色微砂質シルト　亜円礫（径5～20mm）含む。Ⅴ層ブロック（径20mm）含む（1%）。
酸化鉄斑紋あり。炭化物粒あり。



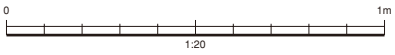
第25図　ＳＰ７～10不明ピット



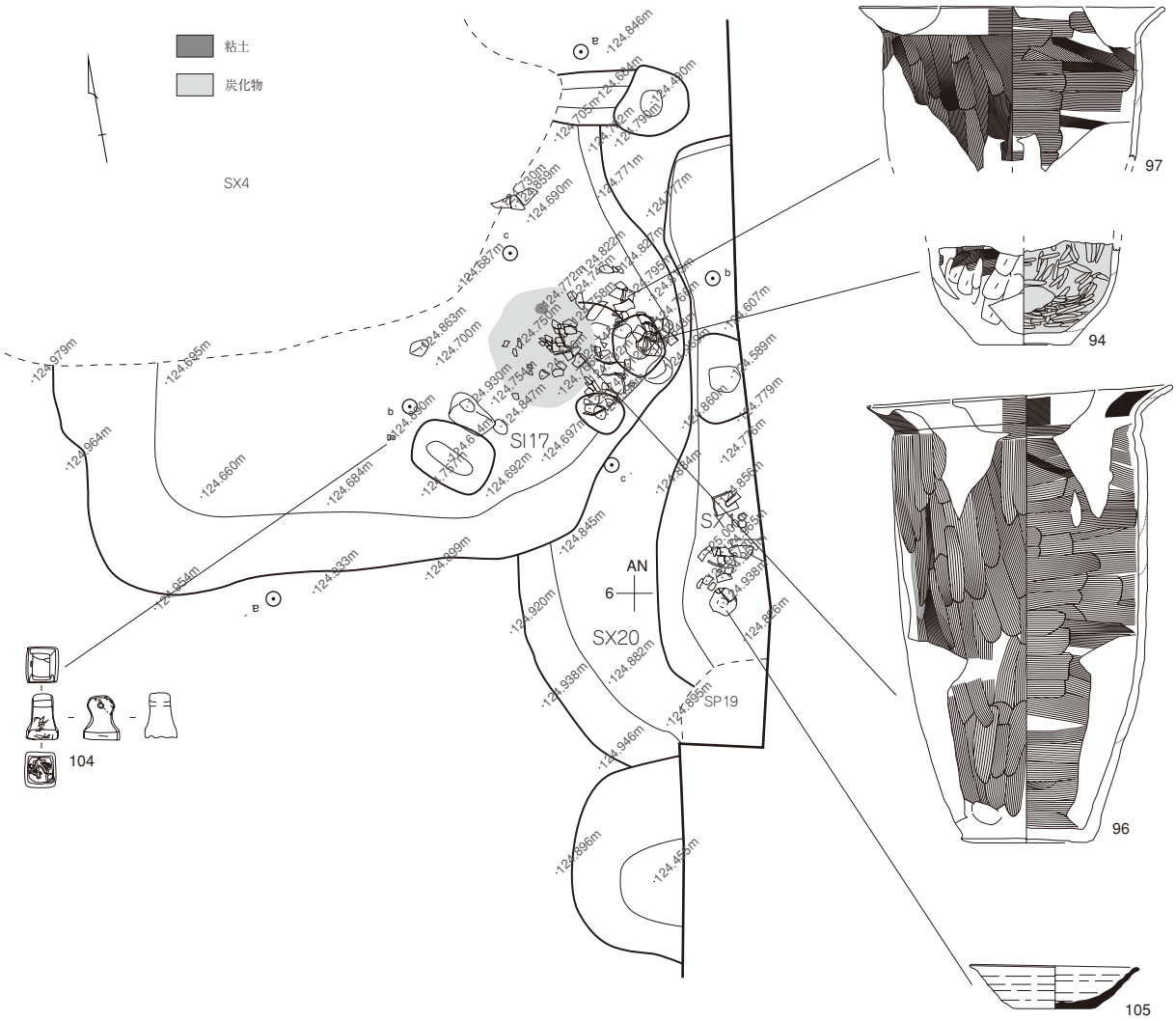
SP11土層注記
1:10YR4/2灰黄褐色微砂質シルト　10YR5/2灰黄褐色微砂粒状（径5mm）に含む（5%）。
　Ⅴ層を粒状に含む。酸化鉄斑紋あり。炭化物粒あり。
2:10YR4/2灰黄褐色微砂質シルト　10YR5/2灰黄褐色微砂粒状（径5mm）に含む（5%）。
　円礫含む。酸化鉄斑紋あり（1より少ない）。炭化物粒あり。

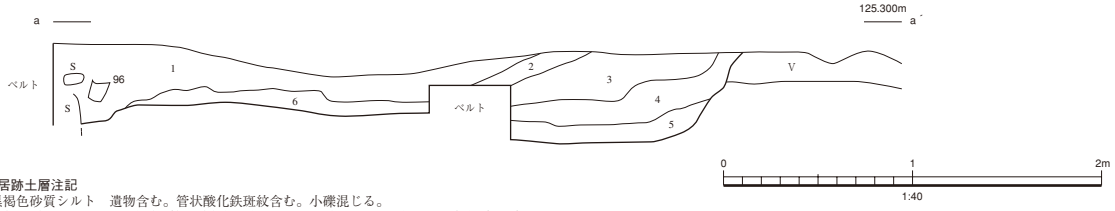


SP12土層注記
1:10YR3/2黒褐色細砂質シルト　亜角礫（径100mm）含む。酸化鉄斑紋あり。
　Ⅴ層のブロック（径20mm）含む。柱穴。
2:10YR4/1褐灰色細砂質シルト　細礫混じる。ほぼ均質。酸化鉄斑紋あり。掘り方。

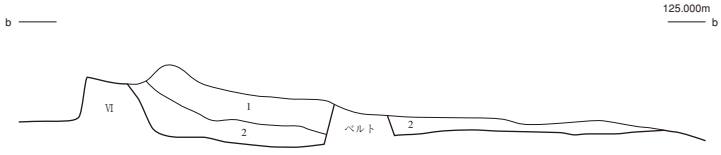


第26図　ＳＰ11・12不明ピット

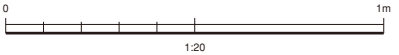




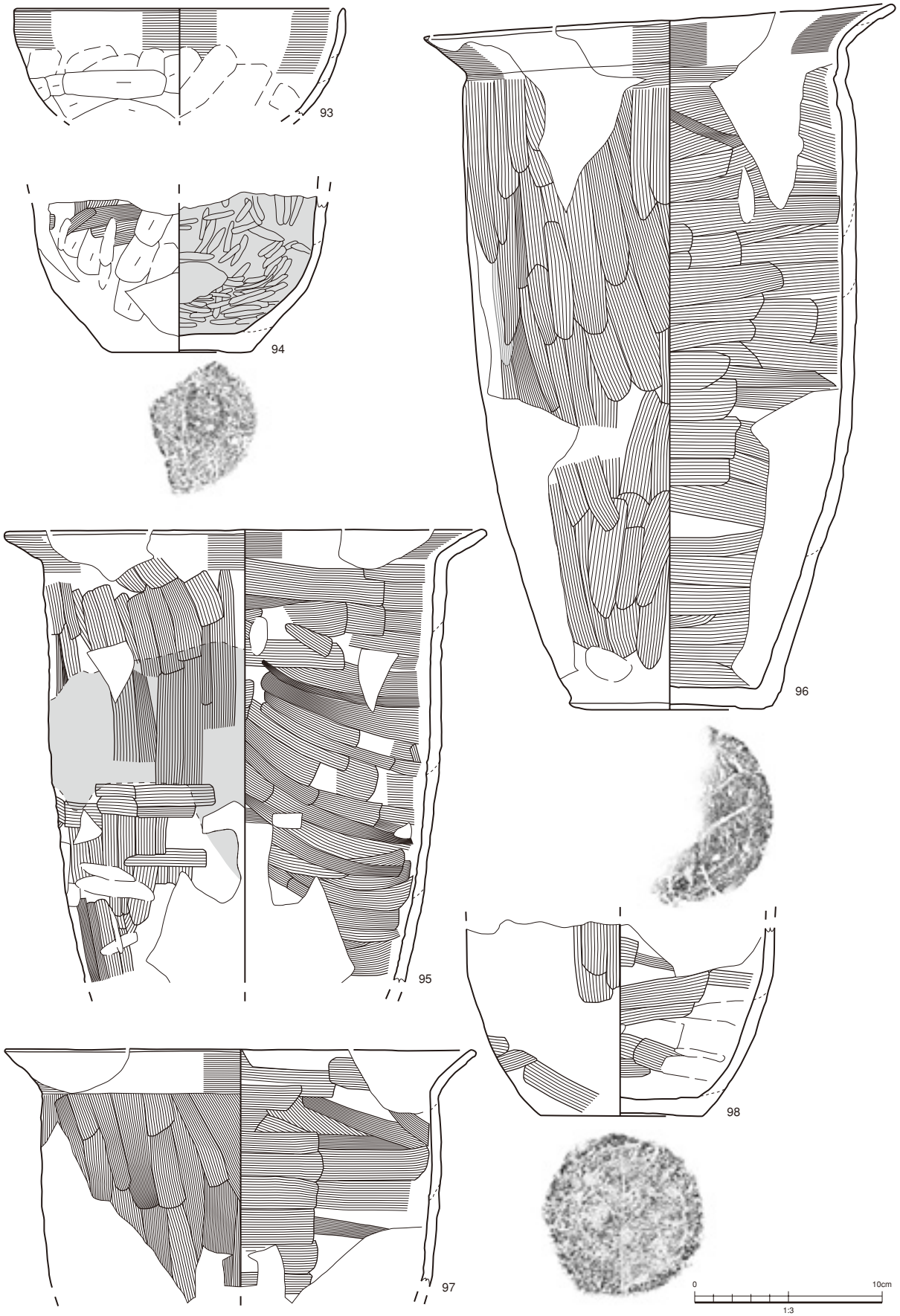
SI17竪穴住居跡土層注記
1:10YR3/2黒褐色砂質シルト　遺物含む。管状酸化鉄斑紋含む。小礫混じる。
2:10YR2/1黒色砂質シルト　1より砂質。管状酸化鉄斑紋あり。硬く締まる。小礫あり。遺物（小片）あり。
3:10YR3/2微砂質シルト　2より緩い。管状酸化鉄斑紋あり。小亜円礫（径10～30mm）含む。遺物含む（下位の方が大きい）。
4:10YR3/1黒褐色砂質シルト　遺物含む（上層より大きくなる）。亜円礫（径30mm）含む。管状酸化鉄斑紋あり。
5:10YR5/2灰黄褐色砂　Ⅳ層起因。10YR3/2黒褐色砂質シルトブロック（径3～4mm）含む。管状酸化鉄斑紋あり。マンガン斑あり。
6:10YR5/2灰黄褐色砂　5とほぼ同質。10YR3/2黒褐色砂質シルトブロック含む。5と同じか？



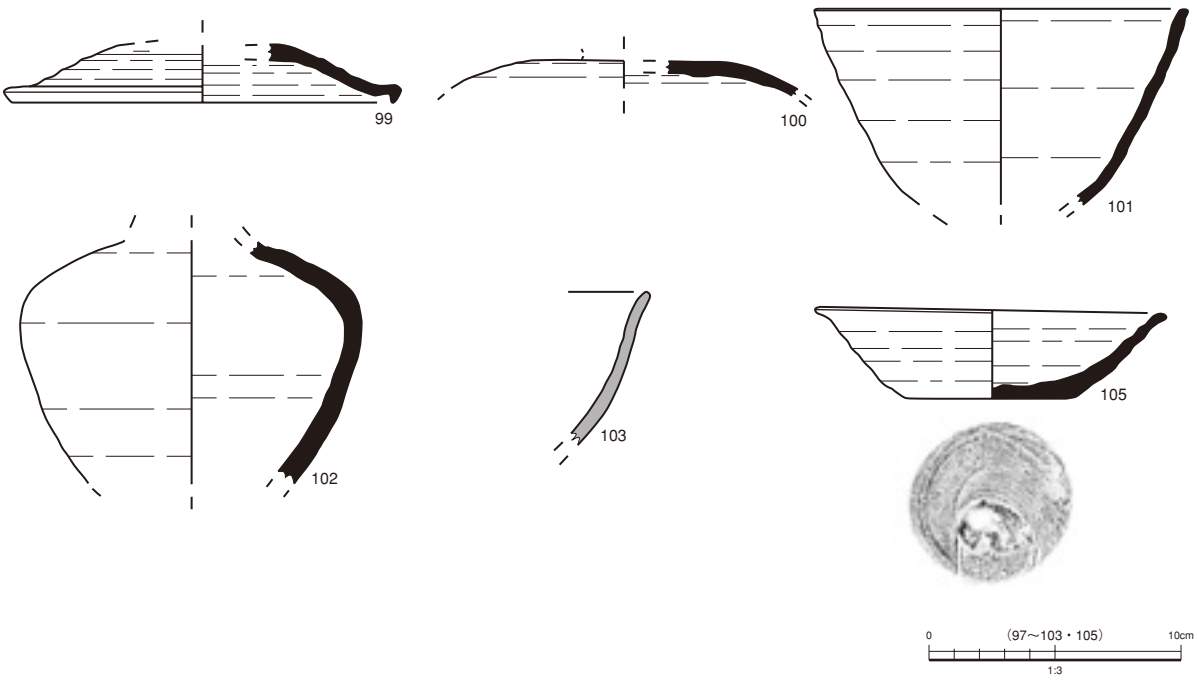
SI17竪穴住居跡カマド土層注記
1:10YR4/1褐灰色細砂　10YR7/1灰白色シルトブロック（径3～5mm）含む。（10%）
10YR7/1灰白色シルトブロック（径10mm）含む（10%）。
カマド構築材の崩れか？
2:10YR2/1黒色細砂質シルト　焼土ブロック（径5～10mm）含む（10%）。
3:10YR8/3浅黄橙色細砂　カマド袖材の残骸か？

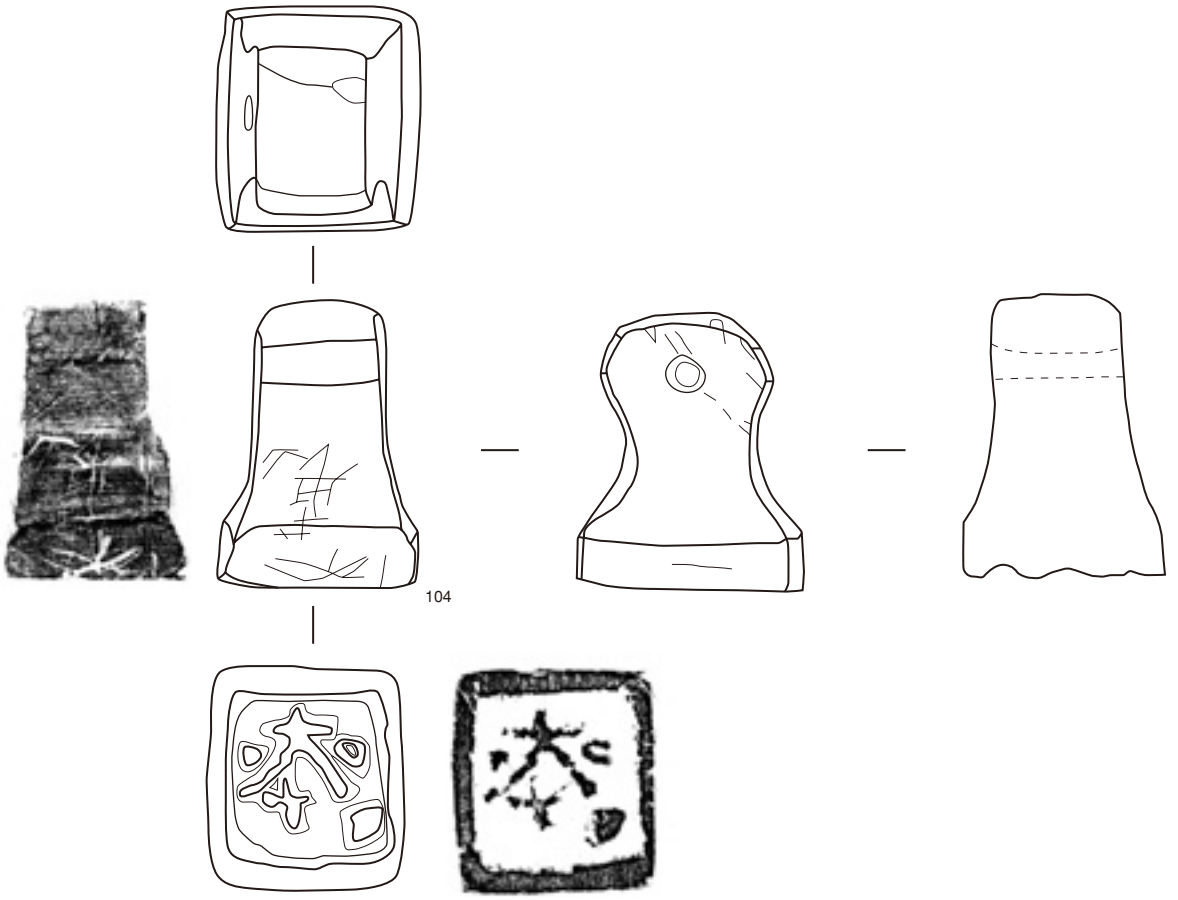


第27図　ＳＩ17竪穴住居跡

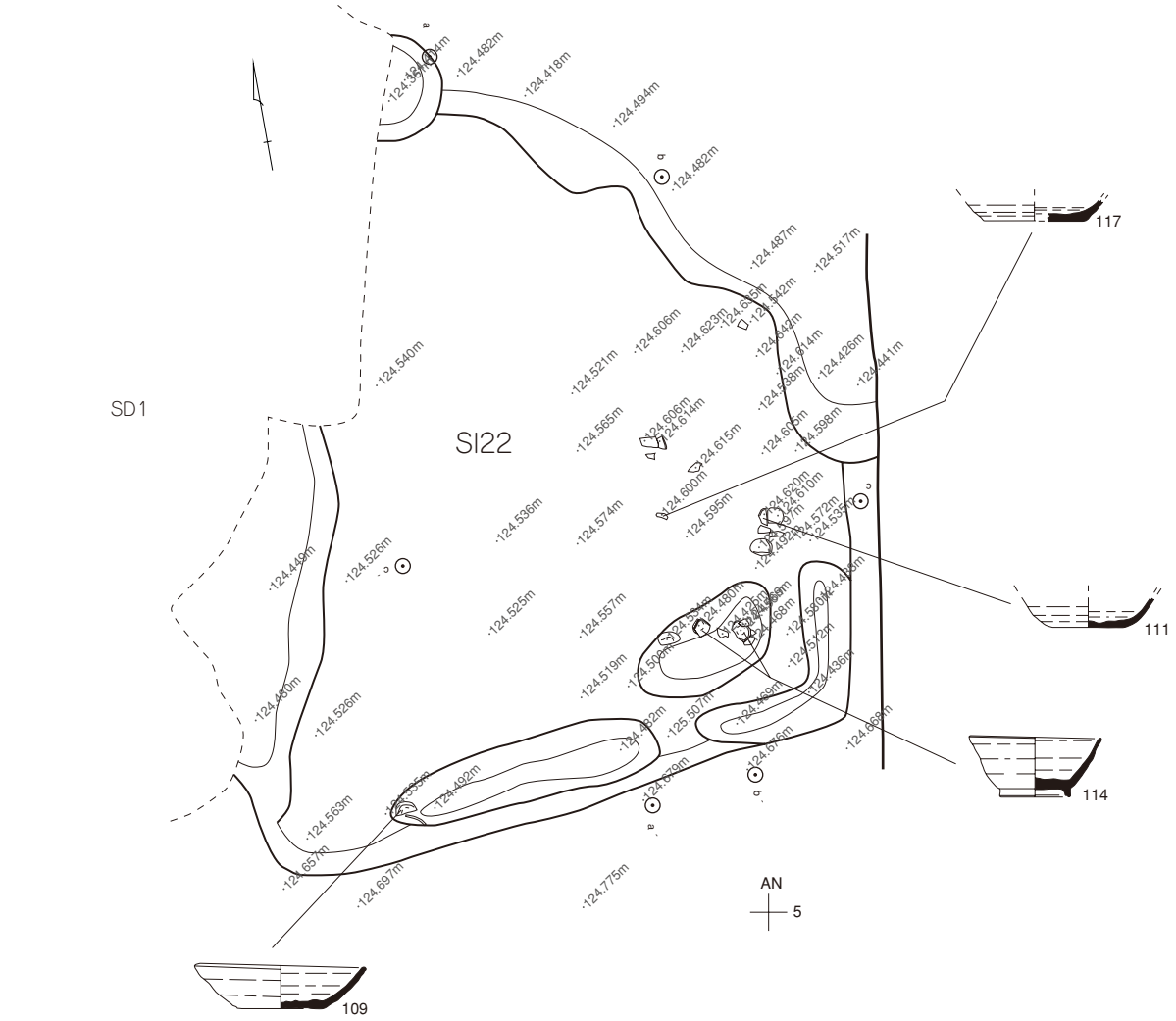


第28図　ＳＩ17竪穴住居跡出土遺物（１）





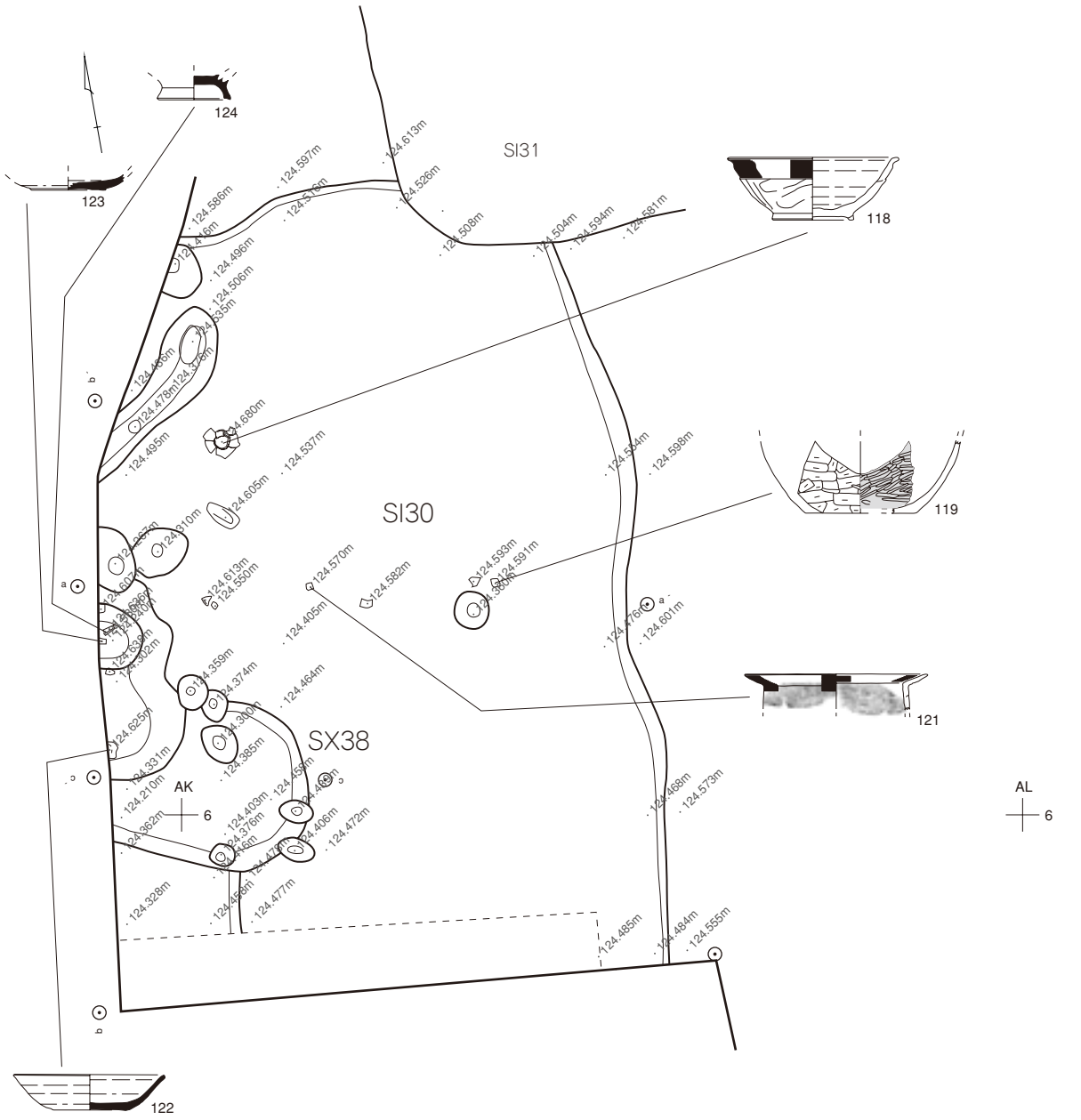
第29図　ＳＩ17竪穴住居跡出土遺物（２）・ＳＸ18性格不明遺構出土遺物

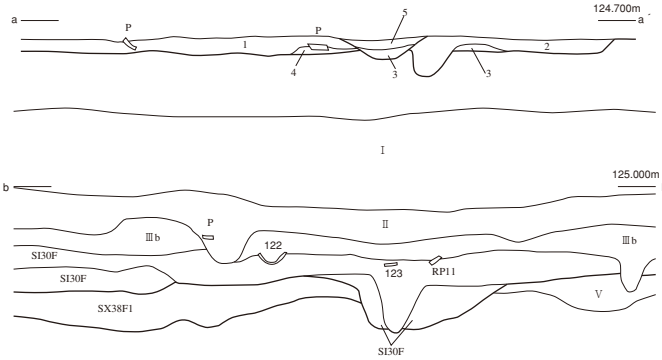


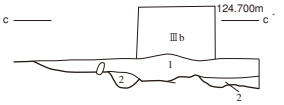
SI22竪穴住居跡土層注記
1:10YR2/2黒褐色砂質シルト　酸化鉄斑紋あり。炭化物粒含む。周溝付近はやや暗色。遺物含む。細礫あり。

SI22炭化物範囲土層注記
1:10YR2/2黒褐色シルト質細砂　中央部分に高物、焼土ブロック（径10mm大）含む（10%）。床面か？
2:2.5Y3/1黒褐色細砂　10YR3/1黒褐色シルトブロック（V層）含む（30%）。貼床か？
3:10YR2/1黒色シルト　炭化物層の落ち込みピット状の堆積。

第30図　ＳＩ22竪穴住居跡

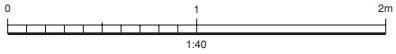




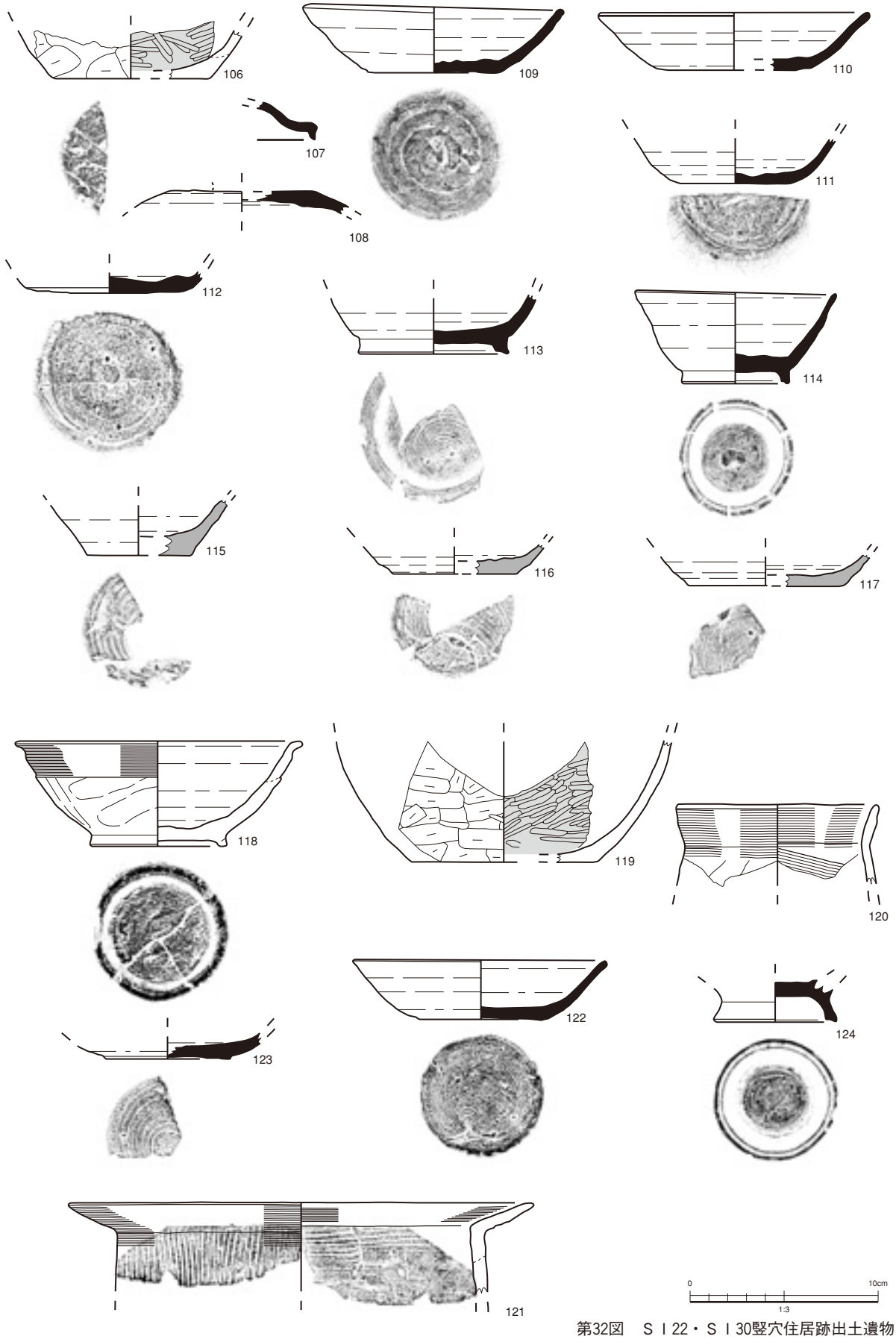


SI30土層注記
1:10YR3/2黒褐色シルト　細礫含む。ほぼ均質。酸化鉄斑紋あり。
　東側ではF4（Ⅴ層のブロック）含む。
2:10YR3/2黒褐色シルト　F1より粘質。ほぼ均質。
3:10YR5/2灰黄褐色砂　Ⅳ層。地山。
4:10YR2/1黒色砂質シルト　均質。Ⅴ層下部。
5:10YR3/2黒褐色砂質シルト　撹乱。

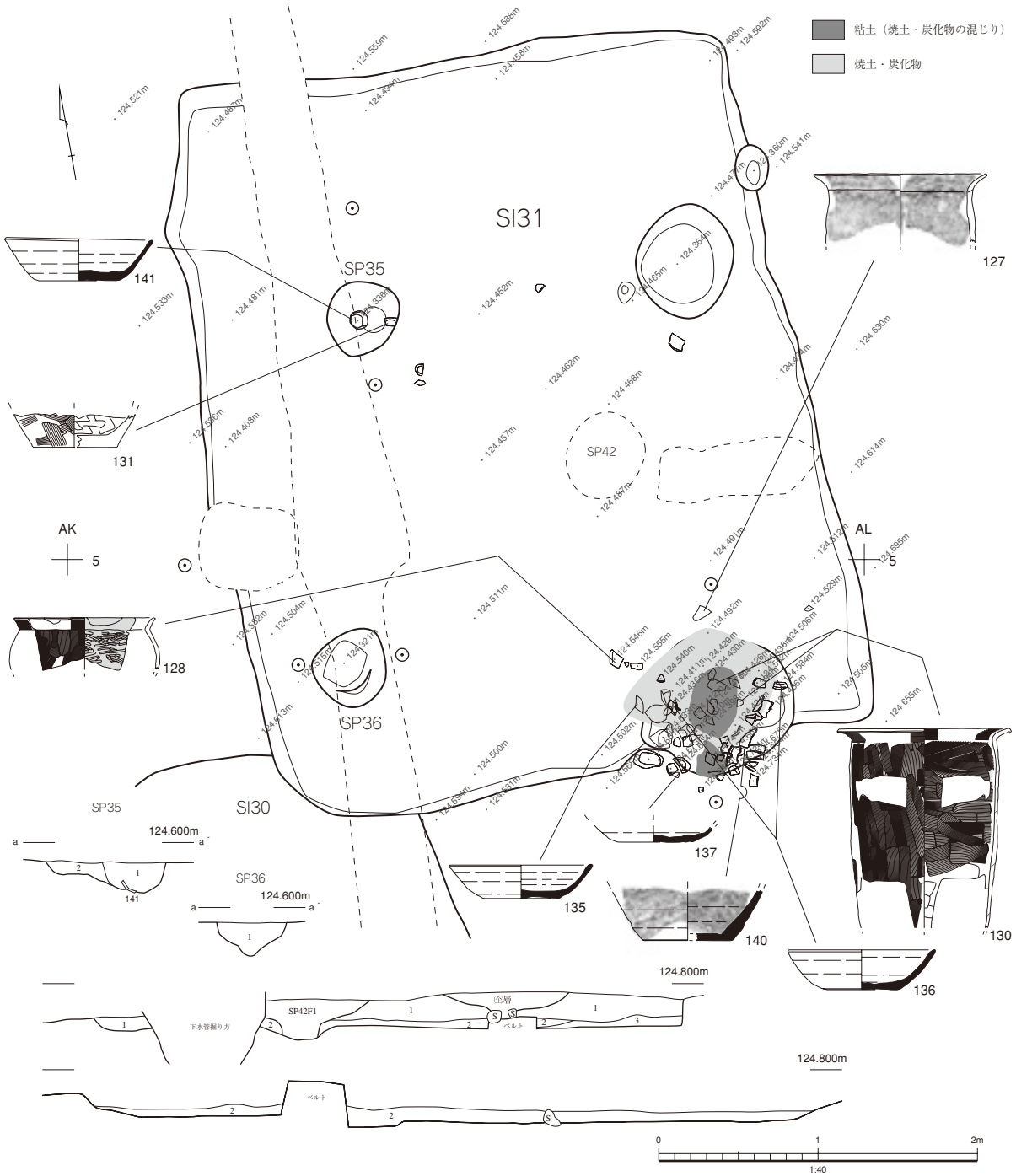
SX38土層注記
1:10YR3/2黒褐色砂質シルト　10YR7/2にぶい黄橙色細砂ブロック（径5～10mm）あり。細礫あり。酸化鉄斑紋あり。
2:10YR4/1褐灰色砂質シルト　ほぼ均質。

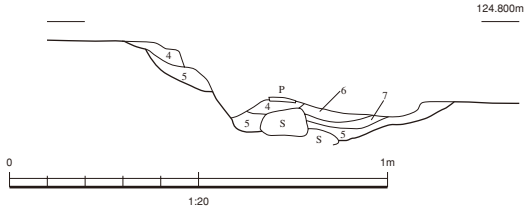


第31図　ＳＩ30竪穴住居跡



第32図　ＳＩ22・ＳＩ30竪穴住居跡出土遺物





SI31竪穴住居跡土層注記
1:10YR3/2黒褐色シルト質砂　炭化物粒あり。酸化鉄斑紋あり。遺物含む。砂ブロック混じる。
　竪穴住居廃絶後の埋土か？
2:10YR3/2黒褐色シルト　FlよりⅡ粘質。炭化物粒あり。砂混じる。遺物含む（Flより破片が大きい）。
3:10YR3/2黒褐色シルト質砂　細礫あり。砂混じる。床構築時の土？

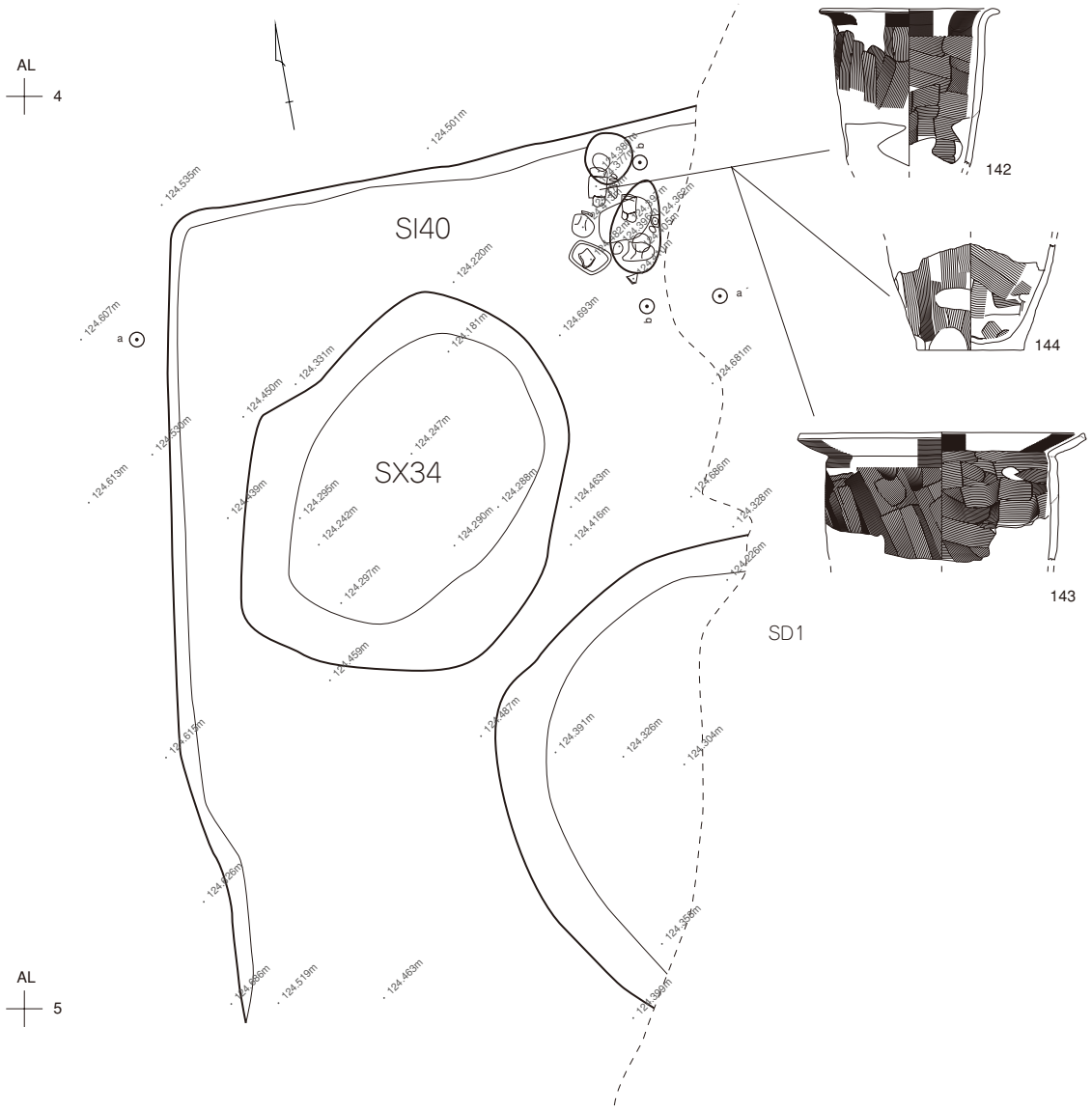
SI31竪穴住居跡カマド土層注記
4:10YR3/2黒褐色細砂質シルト　10YR8/4浅黄橙色シルトブロック（径10mm）含む（5%）。炭化物粒（径5mm）あり。煙道部の残りか？
5:10YR4/2灰黄褐色砂質シルト　炭化物及び焼土粒（径5mm）含む（10%）。床若しくは燃焼部か？
6:2.5Y6/2灰黄色シルト　炭化物粒含む（20%）。天井部若しくは袖部の崩落土か？
7:7.5YR7/6橙色シルト　炭化物及び焼土粒（径5～10mm）含む（20%）。天井部の崩落土か？

SP42土層注記
1:10YR3/3暗褐色砂質シルト　細礫あり。酸化鉄斑紋あり。炭化物粒あり。

SP35土層注記
1:10YR2/2黒褐色粗砂　酸化鉄斑紋あり。炭化物粒（径5mm）含む（5%）。礫（径5～20mm）わずかに混じる。
2:10YR3/1黒褐色細砂　下部に10YR5/2灰黄褐色細砂多く混じる。

SP36土層注記
1:10YR4/2灰黄褐色粗砂　中位に炭化物粒（径5mm）わずかに混じる。下方に2.5Y7/4浅黄色粗砂（Ⅵ層由来）多く堆積する。

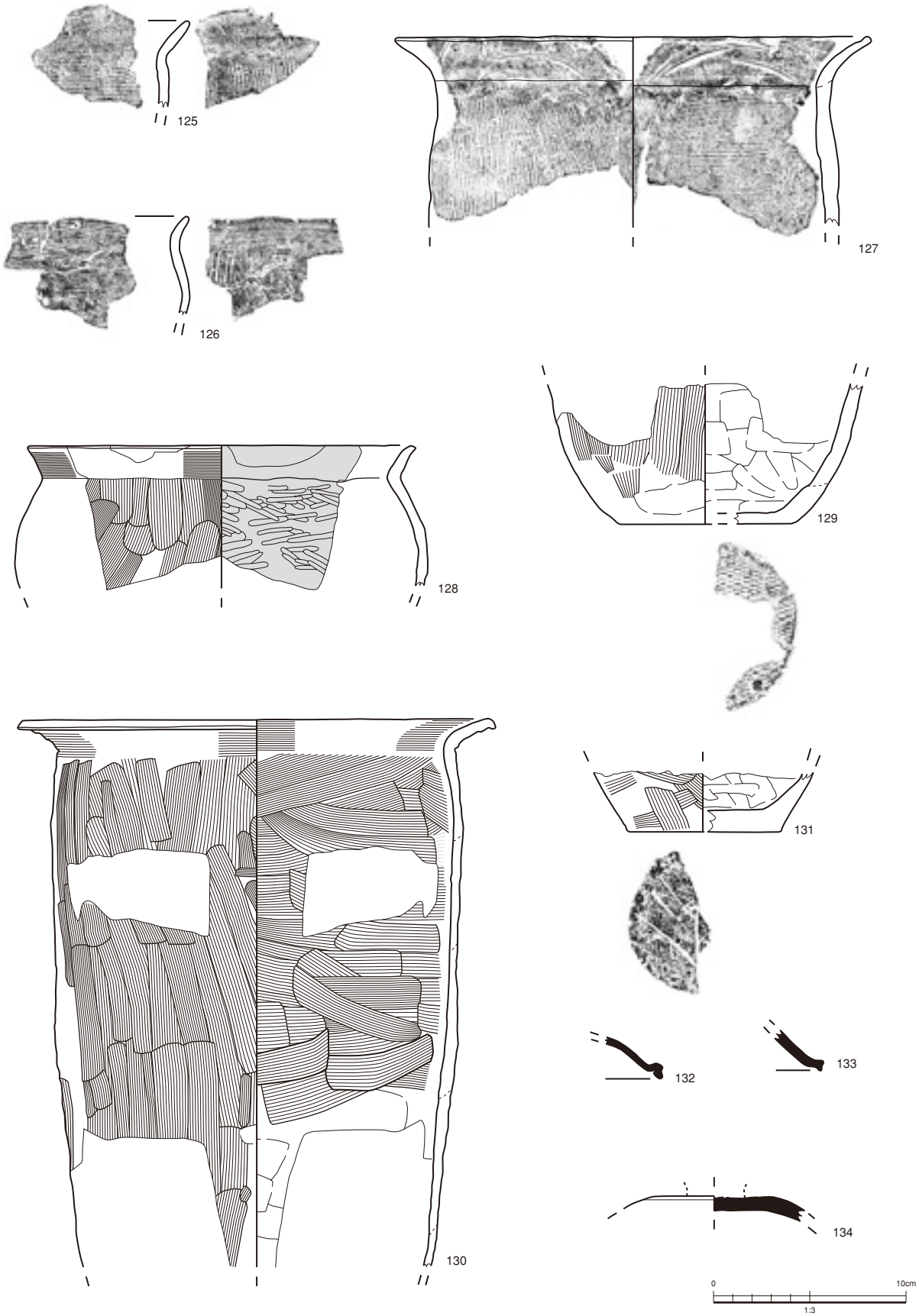
第33図　ＳＩ31竪穴住居跡



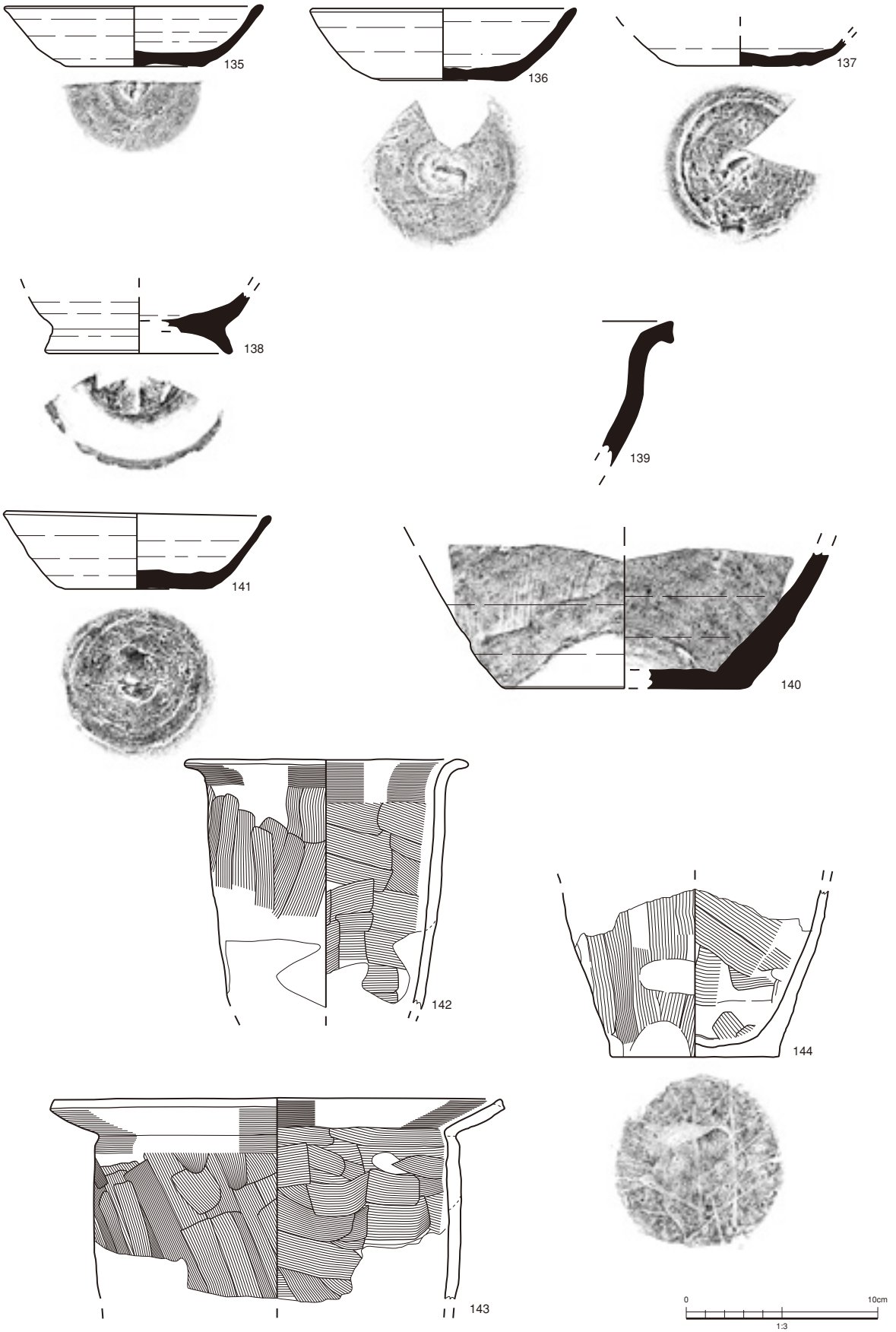
SI40土層注記
1:10YR3/3暗褐色細砂　管状酸化鉄斑紋含む（10%）。焼土ブロック若干混じる。
2:10YR2/1黒色炭化物　10YR6/2灰黄褐色シルト板状に含む（20%）。焼土粒（径5mm）含む（3%）。カマド燃焼部残りか？
3:10YR3/1黒褐色細砂　10YR6/2灰黄褐色微砂ブロック（径10～20mm）含む（40%）。管状酸化鉄斑紋あり。住居貼床か？

SX34性格不明遺構土層注記
1:2.5Y4/1黄灰色シルト質細砂　焼土粒（径５mm）含む（１%）。微砂の平行ラミナ発達。縁辺に酸化鉄斑紋を多く含む。
2:10YR2/2細砂　下部に微砂の平行ラミナ発達。炭化物粒（径5mm）含む（１%）。
3:10YR4/1褐灰色シルト　管状酸化鉄斑紋含む（10%）。粘性強い。

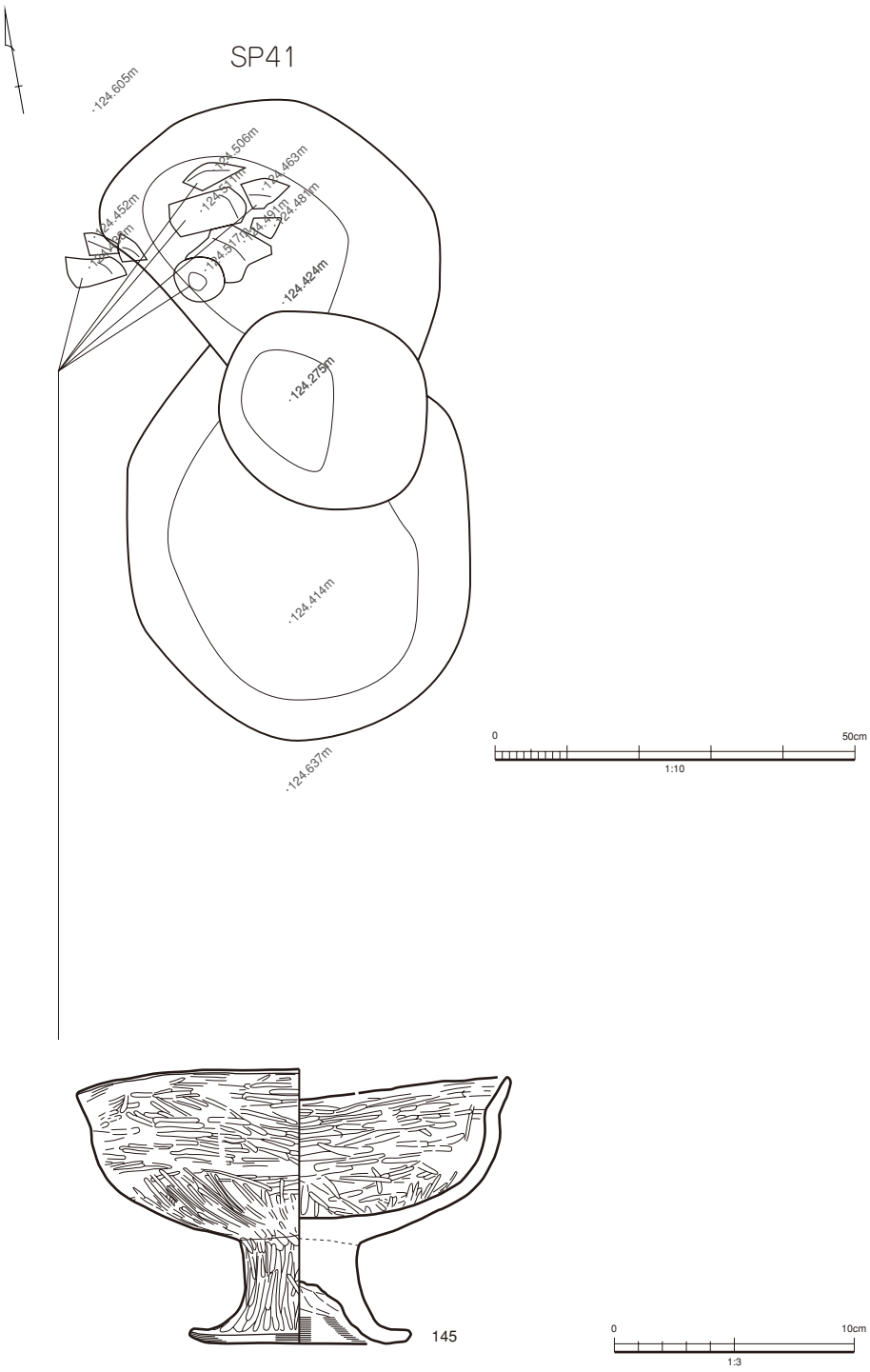
第34図　ＳＩ40竪穴住居跡



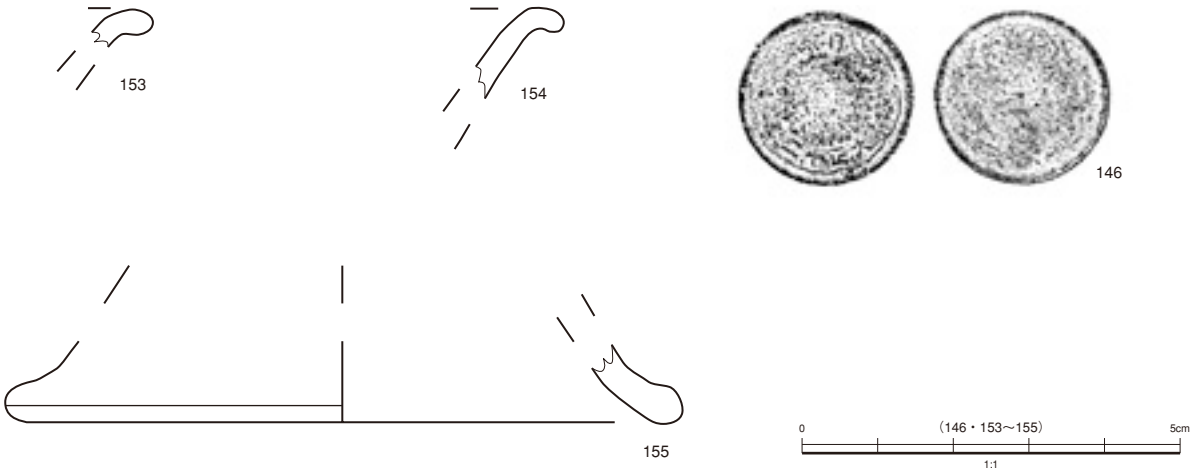
第35図　ＳＩ31竪穴住居跡出土遺物（１）

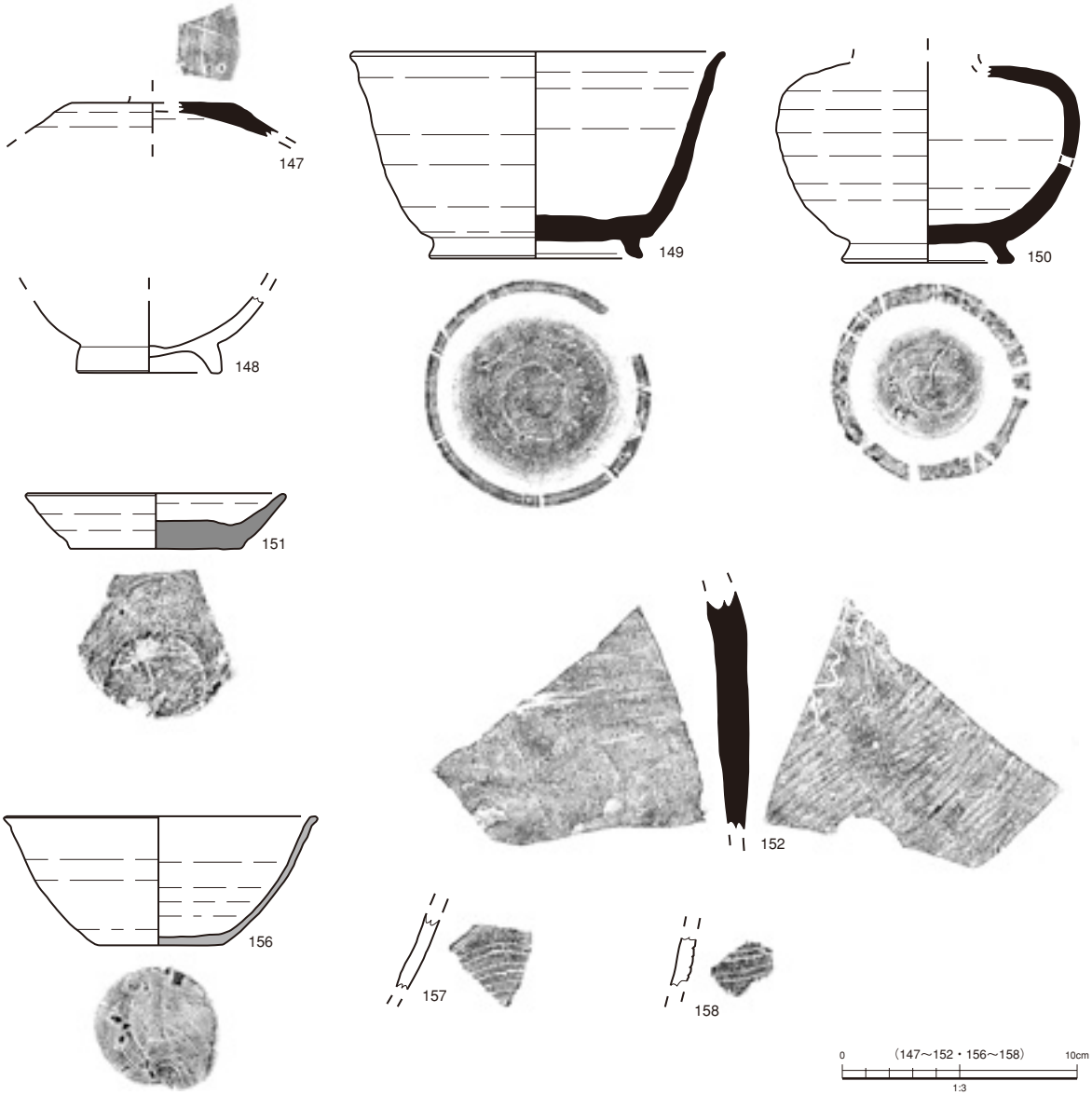


第36図　ＳＩ31竪穴住居跡出土遺物（２）・ＳＩ40竪穴住居跡出土遺物



第37図　ＳＰ41不明ピット・同出土遺物





第38図　遺構外出土遺物

表５　かわらけ・瓦質土器観察表

番号	挿図	図版	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値（㎜）			特徴			備考	分類
								口径	底径	器高	外面	内面	底面		
11	19	28	ＡＭ－５	ＳＤ１	Ｆ１	かわらけ		(106)	(56)	24.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁部にわずかに煤付着	Ｉ１ａ
12	19	28	ＡＬ－４	ＳＤ１	Ｆ１	かわらけ		(100)	(54)	21.5	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	体部内外面ともに薄くスス痕目立つ	Ｉ２
13	19	28	ＡＭ－２	ＳＤ１	Ｆ１	かわらけ		(89.5)	(38)	26	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁部内外面にスス痕付着する	Ｉ２ａ
14	19	28	ＡＭ－２	ＳＤ１	Ｆ	瓦質土器	火鉢？	－	－	－	ヘラミガキ→菱型紋	縦ミガキ→横ヘラナデ	不明		
15	19	28	ＡＬ－６	ＳＤ１	Ｆ１	瓦質土器	火鉢？	－	－	－	横ナデ→花型紋	横ナデ	不明		
60	22	32	ＡＭ－９	ＳＤ５	Ｆ１	かわらけ		(94)	(49)	27	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	体部内面にわずかに煤痕有り	Ｉ１ａ
74	24	33	ＡＭ－10	ＳＰ６	Ｆ２	かわらけ		97	65	21	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り		Ｉ３ａ
75	25	33	ＡＭ－10	ＳＰ６	Ｆ２	かわらけ		113	68	29	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り→板状圧痕		Ｉ４Ｂｂ
76	26	33	ＡＭ－10	ＳＰ６	Ｆ２	かわらけ		91.5	66.5	28.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り		Ｉ３ｂ
77	27	33	ＡＭ－10	ＳＰ６	Ｆ２	かわらけ		111	70	30.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り		Ｉ４Ｂａ
78	28	33	ＡＭ－10	ＳＰ６	Ｆ２	かわらけ		102	70	29	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り→板状圧痕		Ｉ３Ｂｂ
79	29	33	ＡＭ－10	ＳＰ６	Ｆ２	かわらけ		94	64	21	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り→板状圧痕		Ｉ４Ａｂ
80	30	33	ＡＭ－10	ＳＰ６	Ｆ２	かわらけ		114.5	80	29.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り→板状圧痕?		Ｉ４Ｂｂ
81	31	33	ＡＭ－10	ＳＰ６	Ｆ２	かわらけ		111	72	30	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り		Ｉ４Ｂａ
82	32	33	ＡＭ－10	ＳＰ６	Ｆ２	かわらけ		97	59	22	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り		Ｉ４Ａａ
83	33	33	ＡＭ－10	ＳＰ６	Ｆ２	かわらけ		113	72	30	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り→板状圧痕		Ｉ４Ｂｂ
84	34	33	ＡＭ－10	ＳＰ６	Ｆ２	かわらけ		(89)	68	18	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り		Ｉ３ｂ
85	35	33	ＡＭ－10	ＳＰ６	Ｆ２	かわらけ		98	58	21	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ及び擦痕のため不明		Ｉ３
86	36	33	ＡＭ－10	ＳＰ６	Ｆ２	かわらけ		109	68	28	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデのため不明		Ｉ４Ｂ
87	37	33	ＡＭ－10	ＳＰ６	Ｆ１	かわらけ		93	66	23.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り→板状圧痕		Ｉ４Ａｂ
151	38	38	ＡＬ－５		Ⅴ層	かわらけ		(110)	74.5	24	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁部にわずかに煤付着	Ｉ４ａ

表６　陶磁器観察表（１）

番号	挿図	図版	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値（㎜）			特徴			備考
								口径	底径	器高	外面特徴	内面特徴	底部特徴	
1	14	27	Ｘ－０	ＳＤ28	検出面	陶器	擂鉢	(291)	114	166	鉄釉　ロクロナデ→ケズリ	鉄釉　卸目	不明	産地不明
2	14	27	ＡＭ－２	ＳＤ28	Ｆ	陶器	擂鉢	(340)	－	－	ロクロナデ　鉄釉	卸目→ナデ　鉄釉	不明	口縁～体部　産地不明
3	14	27	ＡＦ－２	ＳＤ28	Ｆ１	陶器	擂鉢	－	－	－	ロクロナデ　鉄釉	卸目　鉄釉	不明	口縁部　産地不明
4	14	27	Ｘ－０	ＳＤ28	検出面	磁器	蓋	(80)	(38)	30	植物文　扇文？	雷文		
5	14	27	ＡＨ－２	ＳＤ28	Ｆ１	磁器	碗	(111)	56	66	梅花紋	見込み底面に「寿」	底部内面も施釉。畳付無釉。	広東碗　18世紀後半
6	14	27	ＡＩ－２	ＳＤ28	Ｆ１	磁器	碗	115	59	64	山水文？	圏線　見込内面に「寿」	高台内面施釉畳付無釉	広東碗　18世紀後半

表６　陶磁器観察表（２）

番号	挿図	図版	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値（㎜）			特徴			備考
								口径	底径	器高	外面特徴	内面特徴	底部特徴	
7	14	27	ＡＨ－２	ＳＤ28	Ｆ１	磁器	碗	(110)	46	61	圏線　蝶文	圏線　（見込底面に）不明文	高台内面施釉　畳付無釉	内外面染付
8	14	28	ＡＩ－２	ＳＤ28	Ｆ１	磁器	皿	－	(137)	－	染付	植物文	高台内面施釉	底面にピン痕？１箇所あり
9	14	28	ＡＧ－２	ＳＤ28	Ｆ１	磁器	徳利	－	30	－	六曜文？	無釉	回転糸切り　無釉	
10	14	28	ＡＧ－２	ＳＤ28	Ｆ１	磁器	花瓶	(78)	－	－	植物文？	口縁部のみ施釉	不明	口縁部
25	20	28	ＡＭ－３	ＳＤ１	Ｆ１	陶器	碗	(108)	－	－	透明黄釉	透明黄釉	不明	漆継ぎ痕跡あり　呉器手茶碗
26	20	28	ＡＬ－５	ＳＤ１	Ｆ１	陶器	碗	－	(49)	－	黄白色釉	黄白色釉	黄白色釉	全面に施釉、陥入目立つ　呉器手茶碗
27	20	29	ＡＭ－５	ＳＤ１	Ｆ１	陶器	碗	－	47	－	黄白色釉	黄白色釉	畳付無釉　高台内面施釉	畳付以外全面無釉　陥入目立つ　呉器手茶碗
28	20	29	ＡＭ－３	ＳＤ１	Ｆ１	陶器	碗	－	44	－	灰釉	灰釉	高台内面に灰釉	
29	20	29	ＡＭ－３	ＳＤ１	Ｆ１	陶器	碗	104	46	68	灰釉　鉄絵	灰釉	無釉	唐津鉄絵碗
30	20	29	ＡＬ－７	ＳＤ１	Ｆ１	陶器	筒型茶碗	(109)	－	－	鉄釉	ロクロナデ　鉄釉	不明	
31	20	29	ＡＭ－３	ＳＤ１	Ｆ１	陶器	天目茶碗	－	－	－	鉄釉	鉄釉　体部下半ケズリ		
32	20	29	ＡＭ－２	ＳＤ１	Ｆ１	陶器	天目茶碗	(114)	－	－	鉄釉	鉄釉　底面ケズリ	不明	
33	20	29	ＡＭ－３	ＳＤ１	Ｆ１	陶器	天目茶碗	(120)	－	－	ロクロナデ→ケズリ	ロクロナデ	不明	
34	20	30	ＡＭ－４	ＳＤ１	Ｆ１	陶器	向付	132	42.5	54	鉄釉	鉄釉　鉄絵	無釉	鉄絵菖蒲文
35	20	30	ＡＭ－４	ＳＤ１	Ｆ１	陶器	皿	121	66	31	長石釉	長石釉	高台内長石釉	志野菊皿　長石釉　ピン留め痕３箇所　17世紀前半
36	20	30	ＡＬ－３	ＳＤ１	Ｆ	陶器	皿	(128)	(45)	36.5	灰釉	銅緑釉	ナデ	唐津　蛇の目釉剥ぎ　銅緑釉　17世紀末
37	20	30	ＡＬ－６	ＳＤ１	Ｆ１	陶器	皿	(135)	70	32	灰釉	灰釉	無釉	御深井向付　胎土目痕　陥入目立つ
38	20	29	ＡＭ－２	ＳＤ１	Ｆ	陶器	火入	87	54	83	灰釉	ロクロナデ	高台内外無釉	
39	20	30	ＡＭ－４	ＳＤ１	Ｆ１	陶器	擂鉢	－	(124)	－	ロクロナデ　底部に指頭痕	卸目	回転糸切り	唐津擂鉢　底～体部
40	21	29	ＡＬ－６	ＳＤ１	Ｆ１	磁器	碗	－	－	－	口縁部に沈線	施釉	不明	青磁碗　龍泉窯Ｅ類か　15~16世紀代
41	21	30	ＡＭ－３	ＳＤ１	Ｆ１	磁器	碗	(102)	35	55.5	植物文	無文	高台内面施釉　畳付部分無釉	外面染付　17世紀末～18世紀代
42	21	30	ＡＭ－３	ＳＤ１	Ｆ１	磁器	碗	(98)	－	－	口縁部に圏線　一重網目文	無文	不明	外面染付　17世紀末～18世紀代
43	21	30	ＡＬ－６	ＳＤ１	Ｆ１	磁器	碗	(100)	－	－	松竹梅文	無紋	不明	外面染付
44	21	30	ＡＭ－２	ＳＤ１	Ｆ１	磁器	碗	(105)	46	55	植物文　高台に圏線	無文	高台内側に圏線　畳付部分無釉	外面染付
45	21	30	ＡＬ－７	ＳＤ１	Ｆ１	磁器	皿	(128)	－	－	無文	草花文？	不明	内面染付
46	21	31	ＡＭ－２	ＳＤ１	Ｆ１	磁器	皿	－	46	－	草花文	草花文	高台内面施釉	内外面染付
47	21	31	ＡＬ－６	ＳＤ１	Ｆ１	磁器	小坏	(72)	(34)	51	植物文　畳付無釉	無文	高台内面無釉	外面染付　18世紀代
48	21	31	ＡＭ－２	ＳＤ１	Ｆ１	磁器	徳利	27	56	186	山水文　外面の被熱著しい	無釉　ロクロナデ	高台内面無釉	外面染付　産地不明

表６　陶磁器観察表（３）

番号	挿図	図版	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値（㎜）			特徴			備考
								口径	底径	器高	外面特徴	内面特徴	底部特徴	
49	21	31	ＡＭ－３	ＳＤ１	Ｆ１	磁器	合子？	－	(68)	－	染付	無釉	無釉	内面無釉
63	22	32	ＡＭ－10	ＳＤ５	Ｆ１	陶器	小碗	(90)	(68)	33	ロクロナデ→ケズリ→鉄釉	鉄釉	回転糸切り	
64	22	32	ＡＭ－９	ＳＤ５	Ｆ１	陶器	擂鉢	(360)	－	－	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	唐津擂鉢　口縁部
65	22	32	ＡＭ－10	ＳＤ５	Ｆ１	陶器	擂鉢	－	(165)	－	ロクロナデ	卸目	回転糸切り	唐津擂鉢　底部
66	22	32	ＡＭ－10	ＳＤ５	Ｆ１	陶器	擂鉢	－	(124)	－	ロクロナデ	ロクロナデ		唐津擂鉢　底部
67	22	32	ＡＭ－10	ＳＤ５	Ｆ１	磁器	碗	(100)	－	－	二重網目文	網目文　見込に圏線	不明	17世紀後半
68	22	33	ＡＭ－９	ＳＤ５	Ｆ１	磁器	碗	(98)	(40)	52	四方襷文　松竹梅文	無文	高台内面施釉畳付無釉	17世紀末～18世紀代
69	22	33	ＡＭ－10	ＳＤ５	Ｆ１	磁器	碗	－	(44)	－	圏線	桔梗文	高台内面施釉畳付無釉	17世紀後半
70	22	33	ＡＭ－９	ＳＤ５	Ｆ１	磁器	皿	(142)	－	－	圏線	圏線　飛雲文	不明	漳州窯か
71	22	33	ＡＭ－10	ＳＤ５	Ｆ１	磁器	皿	(118)	46	33	無文	山水文		内面に染付　初期伊万里
148	38	38	ＡＭ－３		Ⅲ層	陶器	碗	－	(62)	－	白色釉	白色釉	白色釉　畳付無釉	
153	38	38	ＡＪ－２		Ⅴ層	施釉陶器	皿	－	－	－	緑釉	緑釉	不明	口縁部　京都産か猿投産か不明
154	38	38	ＡＪ－２		Ⅴ層	施釉陶器	皿	－	－	－	横位に施釉	横位に施釉	不明	口縁部　京都産か
155	38	38	ＡＬ－２		Ⅴ層	施釉陶器	瓶	－	(86)	－	灰釉	灰釉	不明	脚部と推定　口縁部の可能性あり

表７　瓦観察表

番号	挿図	図版	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値（㎜）			特徴		備考
								長軸	短軸	厚さ	外面	内面	
16	19	28	ＡＬ－７	ＳＤ１	Ｆ１	黒瓦	丸瓦	〔93〕	〔64〕	22	ナデ	布目圧痕　ケズリ	
17	19	28	ＡＭ－４	ＳＤ１	Ｆ１	黒瓦	丸瓦	〔68〕	〔78〕	19	ナデ	布目圧痕	
18	19	29	ＡＭ－２	ＳＤ１	Ｆ	黒瓦	平瓦	〔117〕	〔118〕	18	ナデ	ナデ	
19	19	29	ＡＭ－３	ＳＤ１	Ｆ１	黒瓦	平瓦	〔55〕	〔63〕	20	ナデ	ナデ	
20	19	29	ＡＭ－４	ＳＤ１	Ｆ１	黒瓦	平瓦	〔94〕	〔55〕	20	ナデ	ナデ	
61	22	32	ＡＭ－９	ＳＤ５	Ｆ１	黒瓦	丸瓦	〔134〕	〔71〕	24	ナデ	布目圧痕	
62	22	32	ＡＭ－10	ＳＤ５	Ｆ１	黒瓦	平瓦	〔65〕	〔81〕	23	ナデ	ナデ	

表８　石製品観察表

番号	挿図	図版	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値（㎜）			特徴			備考
								長軸	短軸	厚さ	外面	内面	底部	
50	21	31	ＡＭ－２	ＳＤ１	Ｆ１	石製品	硯	〔116〕	〔48〕	〔13〕				スレート
51	21	31	ＡＭ－５	ＳＤ１	Ｆ１	石製品	円盤状製品	27	25	9	研磨	研磨		
52	21	31	ＡＭ－２	ＳＤ１	Ｆ１	石製品	五輪塔空風輪	－	106（径）	〔80〕			不明	流紋岩（石英安山岩）　断面半円形の溝が彫られる
53	21	31	ＡＬ－４	ＳＤ１	Ｆ１	石製品	宝塔	－	109（径）	〔107〕			不明	石英安山岩の溶結凝灰岩　断面逆三角形（薬研掘り）の溝が彫られる
59	21	32	ＡＭ－２	ＳＤ１	Ｆ１	石製品	紡錘車	25（上部径）	（32）（底部径）	25（器高）				砂岩か　孔径８㎜
88	24	34	ＡＭ－10	ＳＰ６	Ｆ２	石製品	礫	32	29	16				
89	24	34	ＡＭ－10	ＳＰ６	Ｆ２	石製品	礫	46	34	17	研磨痕？			
90	24	34	ＡＭ－10	ＳＰ６	Ｆ２	石製品	礫	38	25	22				
91	24	34	ＡＭ－10	ＳＰ６	Ｆ２	石製品	礫	85	71	33	傷			
92	24	34	ＡＭ－10	ＳＰ６	Ｆ２	石製品	礫	41	36	31	擦痕状の傷あり			
104	29	35	ＡＭ－５	ＳＩ17	Ｆ１	石製品	印	－	－	38（器高）	印面上？側側面に「↓」状の線刻			（印面）縦29㎜×横26㎜　字形不明

表９　金属製品観察表

番号	挿図	図版	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値（㎜）		重量（ｇ）	備考
								長さ	厚さ		
54	21	31	ＡＭ－４	ＳＤ１	Ｆ１	金属	貨幣	24.4	1.2	2.8	永楽通寶
146	38	38	ＡＭ－１	カクラン	カクラン	金属	貨幣	23	1	4.8	五十銭銅貨　大正10年鋳造か

表10　土製品観察表

番号	挿図	図版	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値（㎜）			特徴		備考
								長さ	最大径	軸径	外面	内面	
21	20	29	ＡＬ－６	ＳＤ１	Ｆ１	土製品	丸瓦転用土製品	〔93〕	〔56〕	26	研磨痕跡	研磨痕跡	黒瓦の丸瓦を研磨具に転用
22	20	29	ＡＬ－６	ＳＤ１	Ｆ１	土製品	円盤状土製品	58（長軸）	55（短軸）	24（厚さ）	研磨痕跡	研磨痕跡	黒瓦の丸瓦を研磨具に転用
23	20	29	ＡＬ－７	ＳＤ１	Ｆ１	土製品	円盤状土製品	64（長軸）	63（短軸）	17（厚さ）	研磨痕跡	研磨痕跡	黒瓦の平瓦を研磨具に転用
24	20	29	ＡＬ－６	ＳＤ１	Ｆ１	土製品	円盤状土製品	50.5（長軸）	46（短軸）	15.5（厚さ）	研磨痕跡	研磨痕跡	黒瓦の平瓦を研磨具に転用
72	22	33	ＡＭ－10	ＳＤ５	Ｆ１	土製品	管状土錘	28.5	10	1.5	ナデ		重量2.6ｇ
73	22	33	ＡＭ－10	ＳＤ５	Ｆ１	土製品	管状土錘	27.6	12	2	ナデ		重量3.8ｇ

表11　土師器・須恵器・赤焼土器観察表（１）

番号	挿図	図版	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値（㎜）			特徴			備考	分類
								口径	底径	器高	外面	内面	底部		
55	21	31	ＡＭ－３	ＳＤ１	Ｆ１	須恵器	蓋	140	－	25	ロクロナデ→体部上半にケズリ	ロクロナデ	静止糸切り（天井部）	天井～口縁部全体	ⅢＡ３ｅ
56	21	31	ＡＭ－４	ＳＤ１	Ｆ１	須恵器	蓋	(162)	－	25	ロクロナデ→体部上半にケズリ	ロクロナデ	回転糸切り（天井部）	天井～口縁部全体	ⅢＡ３ａ
57	21	31	ＡＬ－４	ＳＤ１	Ｆ１	須恵器	坏	－	－	－	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	口縁部　外面に「皿」状の墨書有り	ⅢＢ
58	21	32	ＡＭ－４	ＳＤ１	Ｆ１	須恵器	坏	－	(50)	－	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	底部に字形不明の墨書有り	ⅢＢ１ａ
93	28	34	ＡＭ－５	ＳＩ17	Ｆ１	土師器	鉢	(188)	－	－	横位ヘラナデ→口縁部指ナデ	横位ナデ→縦位ナデ		口縁～体部	ⅡＤ１
94	28	34	ＡＭ－５	ＳＩ17	Ｙ(炭化物)	土師器	鉢	－	(72)	－	ケズリ→ハケメ→ナデ	黒色処理→ミガキ	葉脈痕	内面黒色処理	ⅡＤ２
95	28	34	ＡＭ－５	ＳＩ17	Ｙ(炭化物)	土師器	甕	(256)	－	－	縦方向ハケ目→横方向ナデ	横方向ハケ目	不明	口縁～体部	ⅡＦ３ア
96	28	34	ＡＭ－５	ＳＩ17	Ｙ(炭化物)	土師器	甕	(231)	(89)	339	縦方向ハケ目→横ナデ	横方向ハケ目→ヨコナデ	葉脈痕	口縁～底部	ⅡＦ３イｃ
97	28	34	ＡＭ－５	ＳＩ17	Ｙ(炭化物)	土師器	甕	(251)	－	－	縦方向ハケメ→横ナデ	横方向ハケメ	不明	口縁～体部	ⅡＦ３ア
98	28	34	ＡＭ－５	ＳＩ17	Ｙ	土師器	甕	－	87.5	－	ハケ目　火ハネ?による剥離顕著	横位ハケ目　横位ナデ	葉脈痕	体～底部	ⅡＦｃ
99	29	35	ＡＭ－５	ＳＩ17	Ｆ１	須恵器	蓋	(153)	－	－	ロクロナデ	ロクロナデ	欠損のため不明	端部	ⅢＡ２
100	29	35	ＡＭ－５	ＳＩ17	Ｆ１	須恵器	蓋	－	－	－	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り（天井部）	天井部のヘラ切痕をナデ調整か	ⅢＡ１
101	29	35	ＡＭ－５	ＳＩ17	Ｆ１	須恵器	有台坏？	(148)	－	－	ロクロナデ	ロクロナデ	欠損のため不明	口縁～体部	ⅢＣ３？
102	29	35	ＡＭ－５	ＳＩ17	Ｆ１	須恵器	壺	－	－	－	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	肩～体部	ⅢＥ
103	29	35	ＡＮ－５	ＳＩ17	Ｆ１	赤焼土器	坏	－	－	－	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	口縁部～体部	ⅣＢ１
105	29	35	ＡＮ－６	ＳＸ18	Ｆ１	須恵器	坏	140	68	36	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁～底部	ⅢＢ２ａ
106	32	35	ＡＭ－４	ＳＩ22	Ｆ１	土師器	甕	－	(82)	－	ケズリ	ミガキ	葉脈痕	内面黒色処理	ⅡＦｃ
107	32	35	ＡＭ－４	ＳＩ22	Ｆ１	須恵器	蓋	－	－	－	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	端部	ⅢＡ
108	32	35	ＡＭ－４	ＳＩ22	Ｙ(焼土ブロック)	須恵器	蓋	－	－	－	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り（天井部）	天井部	ⅢＡ１
109	32	35	ＡＭ－４	ＳＩ22	Ｆ１	須恵器	坏	140	70	35.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	口縁～底部	ⅢＢ２ｆ
110	32	35	ＡＭ－４	ＳＩ22	Ｆ１	須恵器	坏	(146)	(74)	31	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	口縁～底部	ⅢＢ２ｆ
111	32	35	ＡＭ－４	ＳＩ22	Ｙ	須恵器	坏	－	(56)	－	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	底部	ⅢＢ１ｆ

表11　土師器・須恵器・赤焼土器観察表（２）

番号	挿図	図版	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値（㎜）			特徴			備考	分類
								口径	底径	器高	外面	内面	底部		
112	32	35	ＡＭ－４	ＳＩ22	Ｆ１	須恵器	坏	－	80	－	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	底部	ⅢＢ２ｆ
113	32	35	ＡＭ－４	ＳＩ22	Ｆ１	須恵器	有台坏	－	80	－	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	底部	ⅢC2ia
114	32	35	ＡＭ－４	ＳＩ22	Y（炭化物）	須恵器	有台坏	108	58	50	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	口縁～底部	ⅢＣ４ｆ
115	32	35	ＡＭ－４	ＳＩ22	Y（炭化物）	赤焼土器	坏	－	（56）	－	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	底部	ⅣＢ１
116	32	35	ＡＭ－４	ＳＩ22	Ｆ１	赤焼土器	坏	－	（66）	－	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	底部	ⅣＢ２
117	32	35	ＡＭ－４	ＳＩ22	Y	赤焼土器	坏	－	（82）	－	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	底部	ⅣＢ２
118	32	36	ＡＫ－５	ＳＩ30	Ｆ１	土師器	有台坏	（150）	72	57	ロクロナデ→ナデ→ヨコナデ	ロクロナデ　炭化物塗布か？	回転糸切り	口縁～底部	ⅡＣ
119	32	36	ＡＫ－５	ＳＩ30	Y	土師器	鉢	－	（98）	－	横位ケズリ	黒色処理→横位ミガキ	葉脈痕	内面黒色処理	ⅡＤ２
120	32	36	ＡＫ－６	ＳＩ30	Y	土師器	甕	（106）	－	－	縦位ナデ→横ナデ	横位ハケメ→横ナデ	不明	口縁部	ⅡＦ１ア
121	32	36	ＡＫ－５	ＳＩ30	Y	土師器	甕	（248）	－	－	縦位ナデ→横ナデ	横位ハケメ→横ナデ	不明	口縁部	ⅡＦ３ア
122	32	36	ＡＪ－５	ＳＩ30	Ｆ１	須恵器	坏	136	66	34.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁～底部	ⅢＢ２ａ
123	32	36	ＡＪ－５	ＳＩ30	Y	須恵器	坏	－	（68）	－	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	底部	ⅢＢ１ａ
124	32	36	ＡＪ－５	ＳＩ30	Ｆ１	須恵器	有台坏	－	65	－	ロクロナデ	ロクロナデ	高台接合痕跡をナデ調整	高台	ⅢＣ１ｇ
125	35	36	ＡＫ－５	ＳＩ31	Ｆ１	土師器	甕	－	－	－	縦位ハケメ→横ナデ	横位ハケメ→横ナデ	不明	口縁部	ⅡＦア
126	35	36	ＡＫ－５	ＳＩ31	Ｆ１	土師器	甕	－	－	－	縦位ハケメ→ナデ	横位ナデ	不明	口縁部	ⅡＦア
127	35	36	ＡＫ－５	ＳＩ31	Ｆ１	土師器	甕	（247）	－	－	縦位ハケメ→横ナデ	縦位ハケメ→ナデ	不明	口縁～体部	ⅡＦ３イ
128	35	36	ＡＫ－５	ＳＩ31	Y	土師器	甕	（200）	－	－	縦位ハケメ→横ナデ	内面黒色処理→横位ミガキ	不明	口縁部　内面黒色処理	ⅡＦ２イ
129	35	37	ＡＫ－５	ＳＩ31	Ｆ１	土師器	甕	－	（90）	－	縦位ハケメ	横位ナデ	網代痕	底部～体部下半	ⅡＦｄ
130	35	36	ＡＫ－５	ＳＩ31	Y（炭化物）	土師器	甕	（245）	－	－	縦位ハケ目→横ナデ	横位ハケ目・ナデ→横ナデ	不明	口縁～体部	ⅡＦ３イ
131	35	36	ＡＫ－５	ＳＩ31	Y	土師器	甕	－	（80）	－	縦位ハケメ	横位ナデ	葉脈痕	底部	ⅡＦａ
132	35	37	ＡＫ－４	ＳＩ31	Ｆ１	須恵器	蓋	－	－	－	ロクロナデ	ロクロナデ	不明		ⅢＡ
133	35	37	ＡＫ－５	ＳＩ31	Ｆ１	須恵器	蓋	－	－	－	ロクロナデ	ロクロナデ	不明		ⅢＡ
134	35	37	ＡＫ－４	ＳＩ31	Y	須恵器	蓋	－	－	－	ロクロナデ→上半ケズリ	ロクロナデ	回転糸切り→ヘラナデ	天井部にツマミ剥離痕跡	ⅢＡ
135	36	37	ＡＫ－５	ＳＩ31	Y（炭化物）	須恵器	坏	（136）	（70）	32	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	口縁～底部	ⅢＢ２ｆ
136	36	37	ＡＫ－５	ＳＩ31	Ｆ１	須恵器	坏	141	70	38	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	口縁～底部　焼成不良	ⅢＢ２ｆ
137	36	37	ＡＫ－５	ＳＩ31	Ｆ１	須恵器	坏	－	70	－	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	底部	ⅢＢ２ｆ
138	36	37	ＡＫ－５	ＳＩ31	Ｆ１	須恵器	有台坏	－	（96）	－	ロクロナデ	ロクロナデ	高台接合後ナデ	底部	ⅢC2iiｇ
139	36	37	ＡＫ－４	ＳＩ31	Ｆ１	須恵器	鉢	－	－	－	ロクロナデ	ロクロナデ	不明		ⅢＤ

表11　土師器・須恵器・赤焼土器観察表（３）

番号	挿図	図版	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値（㎜）			特徴			備考	分類
								口径	底径	器高	外面	内面	底部		
140	36	37	ＡＫ－５	ＳＩ31	Ｙ	須恵器	甕	－	（128）	－	ロクロナデ　タタキ目→横位ヘラナデ	ロクロナデ　横位ヘラナデ	ナデ調整	底部	Ⅲ Ｆ
141	36	37	ＡＫ－４	ＳＰ35	Ｆ１	須恵器	坏	140	78	40	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	口縁～底部	Ⅲ Ｂ２ｆ
142	36	37	ＡＬ－４	ＳＩ40	Ｆ５	土師器	甕	（139）	－	－	縦位ハケメ	横位ハケメ	不明	口縁～体部	Ⅱ Ｆ１ア
143	36	37	ＡＬ－４	ＳＩ40	Ｆ５	土師器	甕	（235）	－	－	縦位ハケ目→横ナデ	横位ハケ目→横ナデ	不明	口縁～体部	Ⅱ Ｆ３ウ
144	36	37	ＡＬ－４	ＳＩ40	Ｆ６	土師器	甕	－	83	－	縦位ハケメ	横位ハケメ	葉脈痕	体部～底部	Ⅱ Ｆｃ
147	38	37	ＡＮ－１	カクラン	カクラン	須恵器	蓋	－	（70）（天井部）	－	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ（天井部）	天井部に刻書有り	Ⅲ Ａ２
149	38	37	ＡＫ－６		Ⅲｂ層	須恵器	有台坏	159	92	89	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り		Ⅲ Ｃ３ｆ
150	38	37	ＡＫ－６		Ⅲｂ層	須恵器	壺	－	76	－	ロクロナデ	ロクロナデ	静止糸切り→高台接合ナデ	体部外面肩部に自然釉多い　見込み中央にも自然釉	Ⅲ Ｅ
152	38	37	ＡＪ－２		Ｖ層	須恵器	甕	－	－	－	タタキ目	ナデ　ユビオサエ痕	不明	外面に字形不明の刻書有り	Ⅲ Ｆ
156	38	37	ＡＭ－３		Ｖ層	赤焼土器	坏	（126）	（54）	56	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	口縁～底部　内面に浅い沈線	Ⅳ Ｂ１

表12　古式土師器・弥生土器観察表

番号	挿図	図版	グリッド	遺構	層位	種別	器種	計測値（㎜）			特徴			備考
								口径	底径	器高	外面	内面	底部	
145	37	38	ＡＭ－２	ＳＰ41	Ｆ１	土師器	高坏	181	171	115.5	ミガキ	ミガキ	ミガキ	脚部高44㎜　脚部径50㎜　脚部底径93㎜　脚部外面調整ミガキ　脚部内面調整ヘラナデ＋ナデ
157	38	38	ＡＬ－５		Ｖ層	弥生土器	壺	－	－	－	平行沈線	不明	不明	
158	38	38	ＡＭ－９		Ｖ層	弥生土器	壺	－	－	－	平行沈線	不明	不明	

Ⅴ　総括

1　調査の概要

今回の調査は、市立第七小学校旧校舎解体工事並びに新規グラウンド造成工事に伴う「山形城三の丸跡」「城北遺跡」の緊急発掘調査である。調査により近世・奈良～平安時代・古墳時代の遺構及び遺物が確認された。遺物は、近世のかわらけや陶磁器、奈良～平安時代の土師器・須恵器等を中心に出土し、整理用コンテナにして総量で80箱を数える。以下、時期ごとの遺構と遺物について概要を記す。

2　近世の遺構及び遺物について

検出された近世の遺構は、溝状遺構５条、不明ピット９基である。

遺構の概要を述べる。ＳＤ28はその規模や検出位置から、山形城三の丸堀跡と判断された。調査区範囲では、南半部分のみの検出であった。また、堀跡が折れ曲がる部分が確認された。出土遺物は、近世後半から近代に至る時期の陶磁器が出土した。これらの遺物の年代から推定して、ＳＤ28が堀跡としての機能を失い、近代以降に埋没していく過程で堆積した遺物と判断された。

ＳＤ１及びＳＤ５の溝跡について述べる。まず、ＳＤ１については、土層断面の観察から複数回の底面の変遷が推定された。出土遺物は17世紀代初頭～後半の陶磁器が多く確認された。中でも29や34などの茶陶や向付と考えられる遺物の出土が特筆される。ただし、出土陶磁器の中には、近世末期以降と考えられる48の産地不明磁器の徳利なども含まれるため、ＳＤ１は複数回の底面の変更が行われつつ近世末期まで機能したものと推定した。ＳＤ５は、その規模や検出位置からＳＤ１と同一の溝となる可能性があり、調査区の東に伸びると判断される。出土遺物は17世紀代初頭～後半の陶磁器が確認された。

ＳＤ１・ＳＤ５のいずれも、覆土上層より上位に石組列が部分的に構築される。ＳＤ１の石組列の年代は近世末期以降と判断され、双方の石組の機能年代が同時期まで新しくなると仮定するならば、ＳＤ５の機能年代もＳＤ１と共に近世末期まで降る可能性が推定される。ＳＤ１およびＳＤ５は、その規模から三の丸屋敷地内の区画溝として構築された溝と推定されるが、調査区内で屋敷建物跡と判断される遺構は確認できなかった。

次に不明ピットについて述べる。不明ピット群のＳＰ７～12・16は、ＳＤ１に併行して軸線が揃い、概ね等間隔に配置される様相で検出され、ＳＤ１に関連する施設の柱穴と想定した。しかし、いずれのピットからも近世の遺物は出土せず、そのために、近世のどの時期の遺構か、どのような構造物の柱穴となるのかは不明であった。それぞれの形状や深さは不統一で、いかなる性格の柱穴跡であったかは課題が残る。

ＳＰ６不明ピットは、ＳＤ５の南側で確認された。ＳＰ７～12・16と平面形態は類似するが、２枚のかわらけを重ね合わせた組み合わせが複数組、遺構底面に配置した状況を留めたままの出土状況で、特異な様相のピットであった。その検出状況から、意図的にかわらけが埋納された遺構と判断した。三の丸内の整備に伴う地鎮などの祭祀行為を行った遺構と推定される。か

わらけの器形は17世紀前半のものと判断され、遺構の年代も同様に17世紀前半と判断される。

次に、上記の内容をふまえ、山形城絵図の内容と発掘調査結果について検討する。近世初頭の「最上家在城諸家中町割圖」(図版40)、あるいは幕末期の「水野氏時代山形城内絵図」(図版39)等の絵図によれば、本調査区周辺は三の丸堀が下条口から肴町口にかけて東西方向に走る部分と想定された。加えて絵図の中で、堀は肴町口の手前で北へ折れ曲がる描写がされている。本調査区の北に隣接する「みつばち公園」は三の丸堀を埋め立てた名残といわれ(樋口・木村1980)、堀跡推定箇所の一つであった。今回の発掘調査で初めて堀跡の存在とその規模を確認し、かつ堀跡が北へ曲がる部分を特定でき、城絵図に描かれた堀と、遺構としての堀跡の位置を特定する根拠として、三の丸堀跡について新知見を得ることができた。

一方、今回の調査では城絵図の内容との矛盾点も残された。絵図には堀跡の内側に土塁が描かれるため、その存在が想定された。しかし今回の調査区では、土塁と判断される痕跡、または土塁基底部の土層堆積等は確認されなかった。ＳＤ１がＳＤ28に近接して所在することからも、土塁があればＳＤ１が存在し得ないため、ＡＫ～ＡＭ－２～３グリッドの区域では、堀に隣接して土塁は所在しないと判断された。ＡＫ－３グリッド以西は調査区外のため、土塁の有無については不明であった。

3　奈良～平安時代の遺構及び遺物について

近世以降の遺構面を精査後に、下層の遺構の調査を行った。今回確認された奈良～平安時代の遺構は、竪穴住居跡が５棟、性格不明遺構が６基であり、竪穴住居を主体とする集落が検出された。遺構の検出状況は、遺構検出面の上層にⅤ層が厚く堆積し、かつ近世～現代の撹乱も多く、確認された竪穴住居跡のうち、全体の規模を確認できたものはＳＩ31のみであった。ＳＩ31・ＳＩ17・ＳＩ40の竪穴住居跡からはカマドもしくはカマド推定範囲が確認された。それらのうち北壁に確認されたものはＳＩ31・ＳＩ40、東壁に確認されたものはＳＩ17であった。いずれの住居跡でも、カマドもしくはカマド推定範囲周辺に遺物が集中して出土する傾向がうかがえた。

出土遺物から判断して、竪穴住居の推定時期を古いものから列挙すると、ＳＩ31（９世紀代第１四半）→ＳＩ22・ＳＩ30（９世紀代第２～３四半）に変遷すると判断された。ＳＩ17とＳＩ40は、どちらも９世紀代前半の年代と判断したが、遺構の年代については明確にできなかった。

出土遺物で特筆すべきものは、ＳＩ17の覆土１層中から104の石製「印」が出土した。その形状や出土状況から判断して、ＳＩ17出土遺物と同時期かあるいは年代が降る可能性があり、９世紀代の年代が推定される。その規格が小型な事から「公印」ではなく「私印」と判断された。「印」がいかなる目的でこの場所に持ち込まれ、どのように利用されたかは不明であり、今後の検討課題である。

他には153～155の施釉陶器がⅤ層中から出土した。施釉陶器は近隣の双葉町遺跡からも出土している(山形市教育委員会2004ｂ)。これらは遠隔地からの搬入品である。特殊な遺物と判断

される印や施釉陶器などの、城北遺跡およびその周辺の遺跡から出土する要因についても、周辺遺跡の調査結果とも併せ、検討が必要と考える。

4　古墳時代以前の遺構及び遺物について

古墳時代の遺構は、ＡＬ－２グリッドのⅥ層上面でＳＰ41が検出された。145の土師器高坏が出土し、その形状及び調整から判断して古墳時代後期の栗囲式期の土器と判断される。

そのためＳＰ41の時期も古墳時代後期と判断される。ＳＰ41以外には古墳時代と判断できる遺構は検出されなかった。他には古式土師器の破片がＳＤ28やＳＤ１の覆土やＶ層中から出土したが、小破片のため掲載していない。

さらに古い時期の遺物として、157・158の弥生土器がＶ層中から出土したが、これらの時期に該当する遺構は確認できなかった。

本調査区にて確認された古墳時代以前の遺構はＳＰ41のみだが、近隣の双葉町遺跡からは古墳時代前期の竪穴住居跡や、古墳時代に後続する７世紀代の竪穴住居跡が確認されている（山形市教育委員会2005）。そのため、古墳時代の集落は、城北遺跡の周辺で時期によって地点を変えながら断続的に営まれたものと推定される。

参考文献

阿部明彦・水戸弘美　1999 「山形県の古代土器編年」『第25回城柵官衙遺跡研究会資料』
樋口博・木村三郎　1981 「山形城三の丸趾を尋ねて」『研究資料集』第４号　山形市郷土史研究協議会
(財)山形市文化振興事業団　最上義光歴史館　2005 『発掘された山形城三の丸』
上田秀夫　1982 「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』第２号
九州近世陶磁史学会　2000 『九州陶磁の編年』
財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター　2001 『瀬戸大窯とその時代』
高桑弘美　2003 「３　出羽のかわらけ（１）出羽南部－山形県－」『中世奥羽の土器・陶磁器』高志書院
高橋信敬　1973 『最上時代　山形城下絵図』 誌趣会
村田晃一　1998 「栗囲式土器の成立と展開」『考古学の方法』第２号　東北大学文学部考古学研究会
財団法人山形県埋蔵文化財センター　1999 『城南一丁目遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第69集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　2002 『鶴ヶ岡城跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第99集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　2003 『山形西高敷地内遺跡　第６次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第117集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　2004 『達磨寺遺跡　第３次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第127集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　2004 『小田島城跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第131集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　2005 『山形城三の丸跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査

報告書第142集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　2008 『山形城三の丸跡発掘調査説明会資料』
山形市　2000 『史跡「山形城跡」(三の丸)整備基本構想報告書』
山形市教育委員会　2002 『山形城三の丸跡(市立第一小学校地点)発掘調査報告書』山形県山形市埋蔵文化財発掘調査報告書第15集
山形市教育委員会　2004 a 『山形市埋蔵文化財年報－平成14年度－』
山形市教育委員会　2004 b 『双葉町遺跡発掘調査報告書(近世編)』山形県山形市埋蔵文化財発掘調査報告書第17集
山形市教育委員会　2005 『南志田遺跡発掘調査報告書』山形県山形市埋蔵文化財発掘調査報告書第23集
山形市教育委員会　2005 『双葉町遺跡発掘調査報告書(縄文～中世編)』山形県山形市埋蔵文化財発掘調査報告書第24集
山形市教育委員会　2007 『山形市埋蔵文化財年報－平成17年度―』
山形市教育委員会　2008 『嶋遺跡範囲確認調査報告書』山形県山形市埋蔵文化財発掘調査報告書第29集
国立歴史民俗博物館　1996 『日本古代印集成』
国立歴史民俗博物館　1999 『国立歴史民俗博物館研究報告』第79集

報告書抄録

ふりがな	やまがたじょうさんのまるあと（じょうほくいせき）はっくつちょうさほうこくしょ
書名	山形城三の丸跡（城北遺跡）発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県山形市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第30集
編著者名	須藤英之　國井修
編集機関	山形市教育委員会
所在地	〒990－8540　山形県山形市旅篭町二丁目３番25号　電話 023－641－1212
発行年月日	2009年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
やまがたじょう 山形城 さんのまるあと 三の丸跡 じょうほく （城北）	やまがたけん 山形県 やまがたし 山形市 じょうほくまち 城北町 二丁目	6201	平成17年度 新規	38度 15分 38秒	140度 19分 42秒	20080507 ～ 20080930	750 （山形城三の丸跡） 400 （城北）	山形市立第七小学校旧校舎解体及び新規グラウンド造成工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山形城三の丸跡	城館跡	近世	堀跡 溝跡 不明ピット	かわらけ 肥前系陶磁器 産地不明陶磁器 黒瓦 石製品 金属製品（永楽通宝）	
城北	集落跡	奈良時代 平安時代	竪穴住居跡 性格不明遺構 不明ピット	土師器（坏・鉢・甕） 須恵器（蓋・坏・有台坏・鉢・壺・甕） 石製品（私印）	県内初となる私印出土
		奈良時代	竪穴住居跡	土師器 （出土遺物総箱数：80箱）	

要約	山形城三の丸跡は、堀跡が確認され、南半のみの検出であったが、調査区内で北に折れ曲がる様相が確認された。また、範囲確認調査によって調査区から西へ伸びる様相が確認された。他には三の丸内の屋敷区画と推定される溝跡や、かわらけが埋納される不明ピット等が確認された。 城北遺跡は、竪穴住居跡などの遺構が確認された。竪穴住居跡は後世の撹乱などにより形態があまり明瞭ではない。出土遺物より、９世紀代前半の時期の竪穴住居跡を主として構成される集落と判断された。そのうちＳＩ１７から、県内初の出土となる平安時代の「印」が出土した。

図　　版

調査区遠景（南から）

調査区南側完掘状況（北西から）

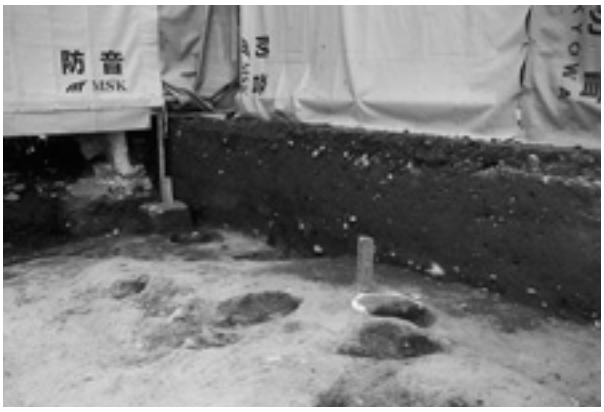
図版 2

ＳＤ28（ＡＦ－１～３）西壁断面（南西から）

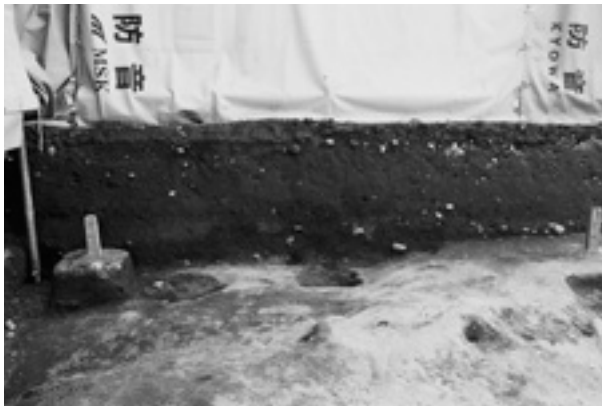
ＳＤ28（ＡＪ～ＡＫ－１）北壁断面（南から）

ＡＮ－５～６東壁断面（北西から）

ＡＮ－６～７東壁断面（南西から）



ＡＫ－８西壁断面（北東から）



ＡＫ－８西壁断面（東から）

ＡＫ－７西壁断面（東から）

図版 4

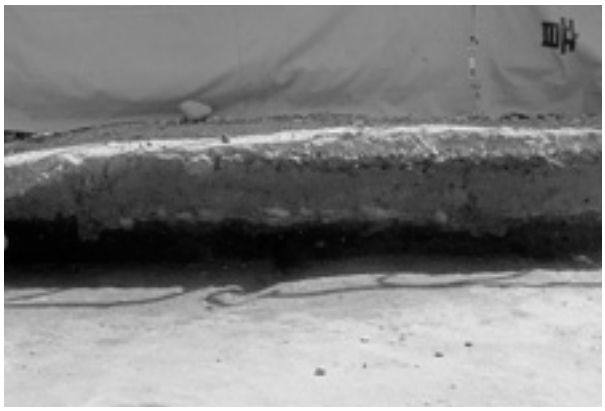
ＡＫ－６西壁断面（東から）

ＡＭ～ＡＮ－４Ⅳ層精査状況（南西から）

ＡＬ－10西壁断面（東から）

ＡＪ－２南壁断面（北から）

ＡＪ－３南壁断面（北から）



ＡＪ－２南壁断面ラミナ検出状況（北から）

ＳＸ45完掘状況（西から）

ＡＩ～ＡＪ－２Ｖ層完掘状況（東から）

ＳＤ28（ＡⅠ－１～２）東壁断面（南西から）

ＳＤ28立上がり部分（ＡⅠ－２）東壁断面（南西から）

ＳＤ28（ＡⅠ－１～２）断面（南から）

ＳＤ28（ＡⅠ－１～２）底面検出状況（西から）

ＳＤ28精査状況（東から）

図版 6

ＳＤ28（ＡＫ－１～２）断面（西から）

ＳＤ28精査状況（西から）

ＳＤ28記録作業風景（南西から）

ＳＤ28（ＡＫ－１～２）断面（南西から）

ＳＤ28（ＡＫ－１～２）精査状況（南西から）

ＳＤ28（ＡＩ～ＡＫ－１～２）完掘状況（東から）

ＳＤ28（ＡＪ～ＡＭ－１～２）完掘状況（南西から）

ＳＤ28底面完掘状況（西から）

ＳＤ28完掘状況（東から）

ＳＤ28完掘状況（南西から）

図版 8

ＳＤ28範囲確認調査東側トレンチ断面（南西から）

ＳＤ28範囲確認調査東側トレンチ断面（南から）

ＳＤ28範囲確認調査東側トレンチ掘削作業風景（南西から）

ＳＤ28範囲確認調査西側トレンチ断面（南から）

ＳＤ28範囲確認調査西側トレンチ断面（南西から）

ＳＤ１（ＡＬ－８）断面（北から）

ＳＤ１（ＡＬ－７）断面（北から）

図版10

ＳＤ１（ＡＬ－５）断面（北から）

ＳＤ１（ＡＬ－４）断面（北から）

ＳＤ１（ＡＬ－６中央）断面（北東から）

ＳＤ１（ＡＬ－７～８）精査風景（南から）

ＳＤ１断面記録作成風景（東から）

ＳＤ１（ＡＬ－６南）断面（北東から）

ＳＤ１（ＡＭ－３）精査状況（東から）

図版12

ＳＤ１（ＡＭ－２）石組検出状況（北から）

ＳＤ１（ＡＭ－３）石組検出状況（北から）

ＳＤ１（ＡＭ－２）断面（北から）

ＳＤ１（ＡＭ－２～３）精査状況（南から）

ＳＤ１（ＡＬ～ＡＭ－４）断面（南から）

ＳＤ１（ＡＭ－３）断面（南から）

ＳＤ１（ＡＭ－２）断面（南から）

ＳＤ１（ＡＭ－２～３）完掘状況（南から）

ＳＤ１（ＡＮ－２）東壁断面（西から）

ＳＤ１（ＡＭ－２～３）完掘状況（北から）

図版14

ＳＤ５東壁・ベルト断面（北西から）

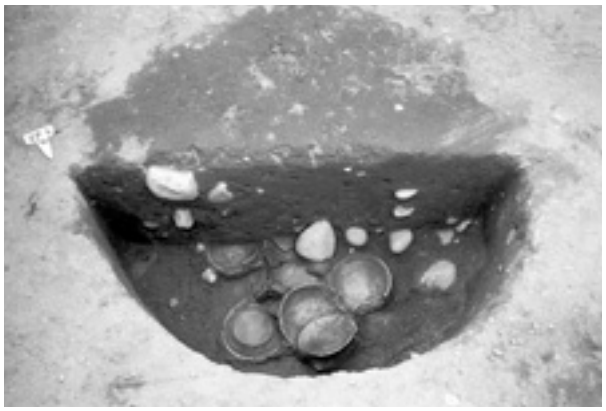
ＳＤ５東壁断面（西から）

ＳＤ５ベルト断面（西から）

ＳＤ５石組検出状況（北から）

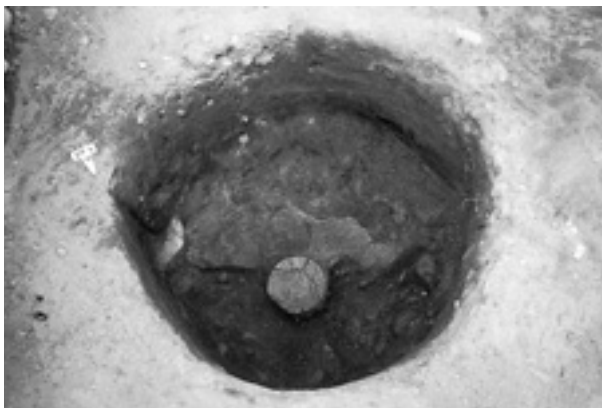
ＳＤ５完掘状況（西から）

ＳＰ６出土遺物（東から）

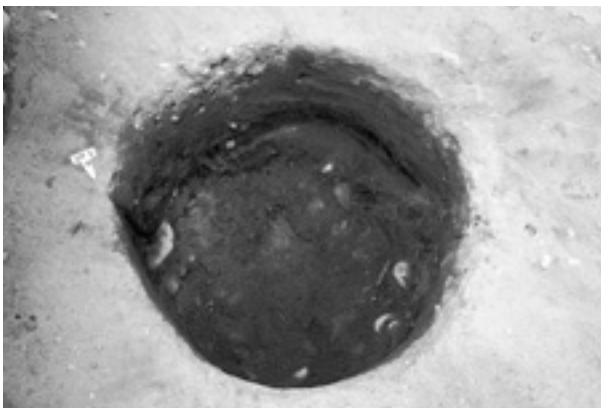


ＳＰ６断面（東から）

ＳＰ６遺物出土状況（東から）

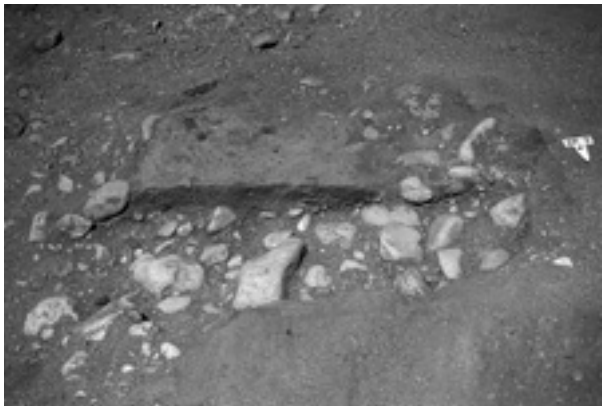


ＳＰ６遺物底面出土状況（東から）

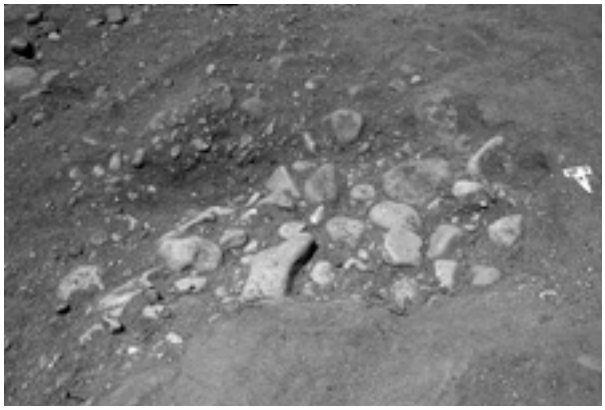


ＳＰ６完掘状況（東から）

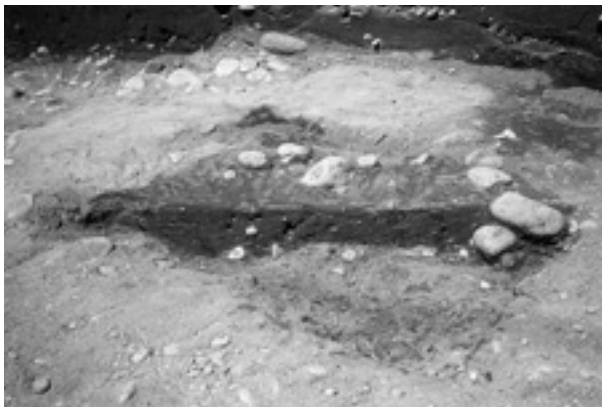
図版16



ＳＰ７断面（東から）



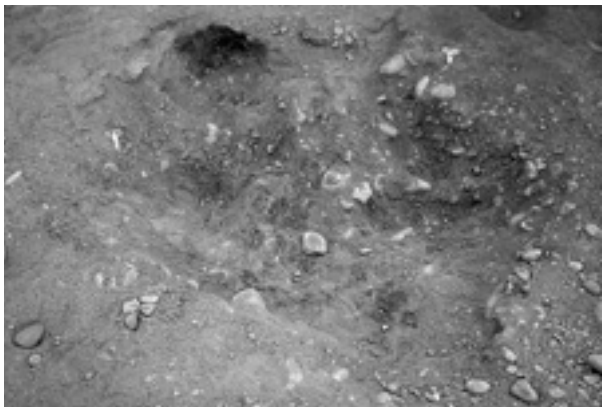
ＳＰ７完掘状況（東から）



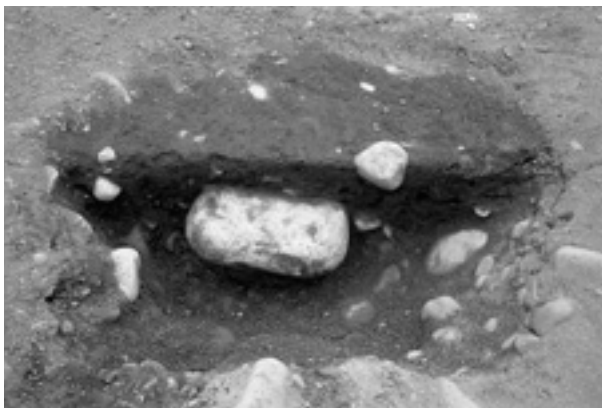
ＳＰ８断面（東から）

ＳＰ８・ＳＰ16石組検出状況（東から）

ＳＰ16石組検出状況（東から）



ＳＰ８・ＳＰ16完掘状況（東から）



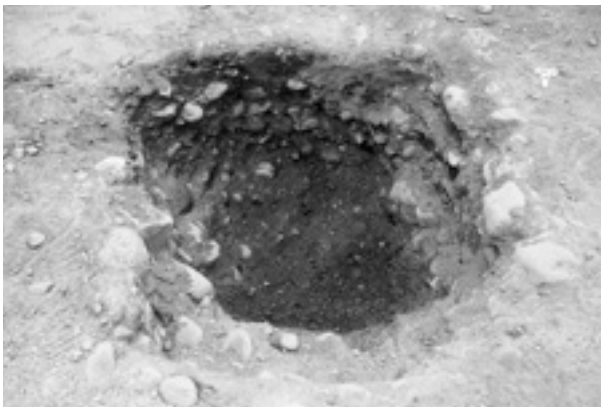
ＳＰ９断面（東から）

ＳＰ９石検出状況（東から）

ＳＰ９完掘状況（東から）

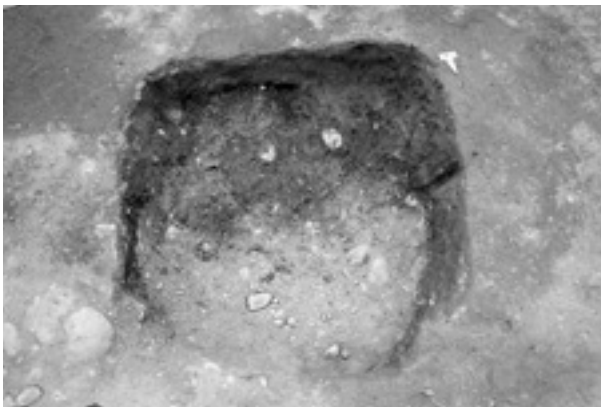
ＳＰ10断面（東から）

ＳＰ10石検出状況（東から）



ＳＰ10完掘状況（東から）

ＳＰ11断面（東から）



ＳＰ11完掘状況（東から）

ＳＰ12断面（東から）

ＳＰ12完掘状況（東から）

図版18

ＳＰ７～12・16完掘状況（北から）

ＳＰ７～12・16完掘状況（南から）

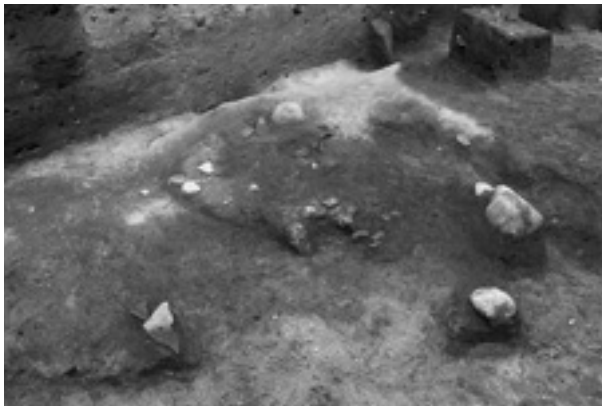
ＳＩ17ベルト断面（北から）

ＳＩ17ベルト断面（北西から）

ＳＩ17石製印出土状況（西から）

ＳＩ17炭化物集中部ベルト断面（北東から）

ＳＩ17炭化物集中部ベルト断面（西から）



ＳＩ17炭化物集中部精査状況（西から）

ＳＩ17炭化物集中部床面検出状況（北から）

ＳＸ18遺物出土状況（南西から）

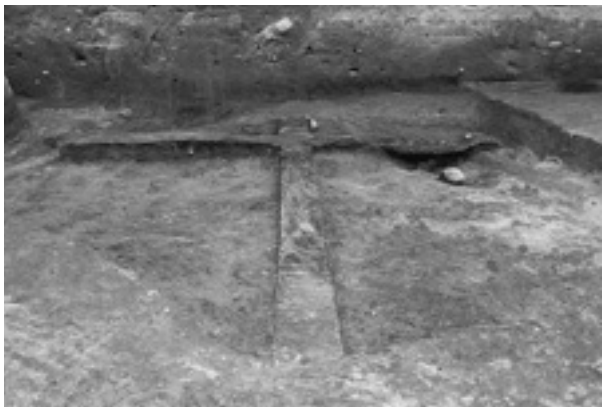
ＳＩ17・ＳＸ18完掘状況（北西から）

ＳＩ17遺物出土状況（西から）

ＳＩ22ベルト断面（南西から）

ＳＩ22床面検出状況（南西から）

ＳＩ22炭化物層ベルト断面（北から）



ＳＩ22炭化物層ベルト断面（西から）

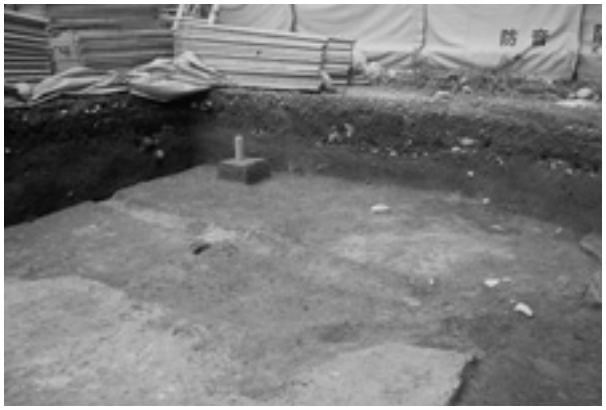
ＳＩ22完掘状況（西から）

図版22

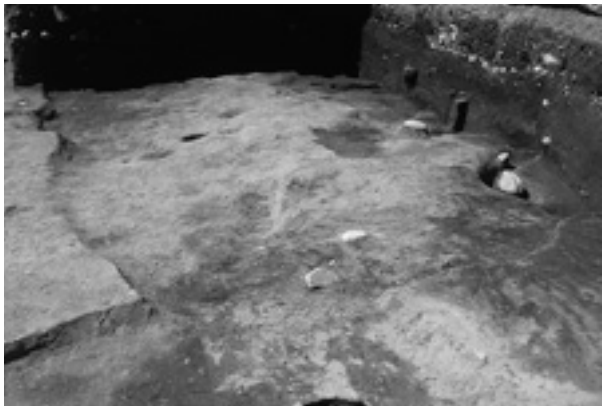
ＡＫ－５～６Ⅲｂ層精査状況（北から）

ＳＩ30ベルト断面（南東から）

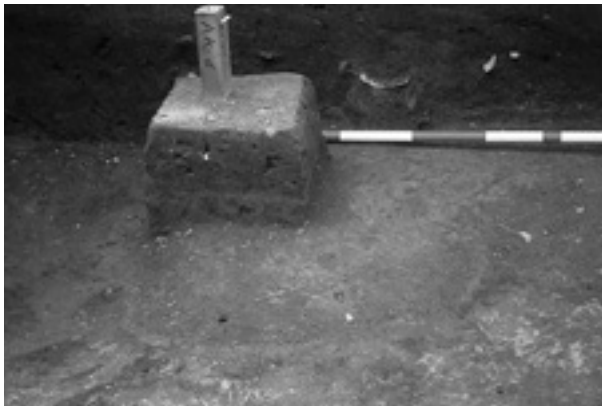
ＳＩ30床面精査状況（東から）



ＳＩ30床面検出状況（東から）

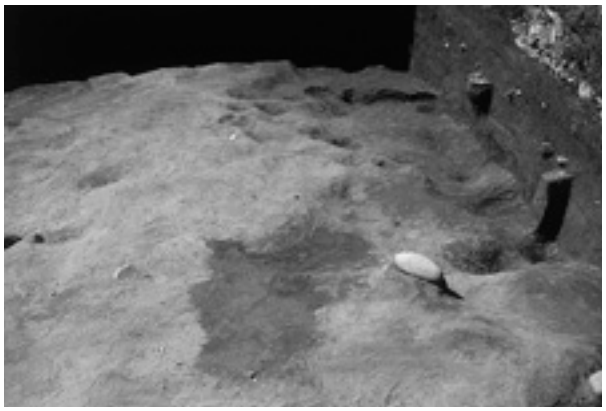


ＳＩ30完掘状況（北から）

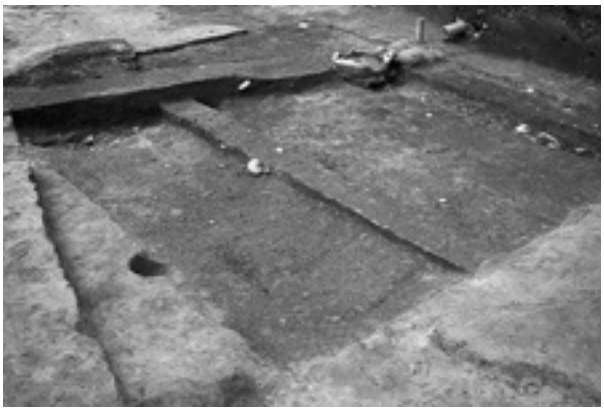


ＳＸ38検出状況（東から）

ＳＸ38断面（東から）



ＳＸ38完掘状況（北から）



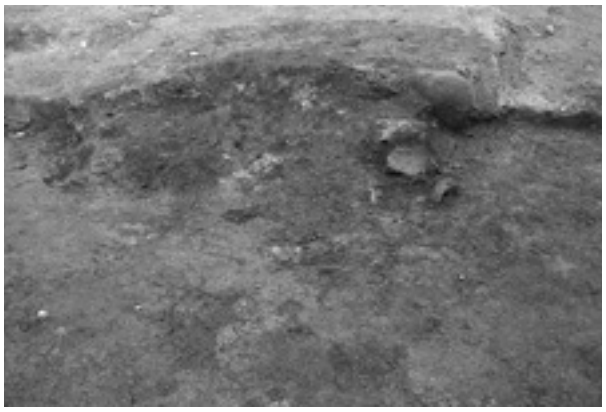
ＳＩ31精査状況（北東から）

ＳＩ31床面検出状況（北から）

図版24

ＳＩ31ベルト断面（南から）

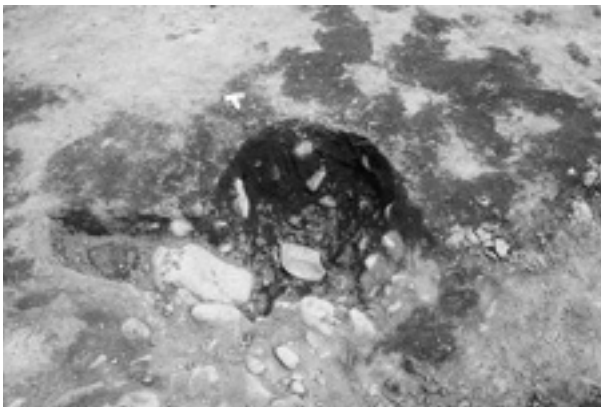
ＳＩ31カマド検出状況（東から）



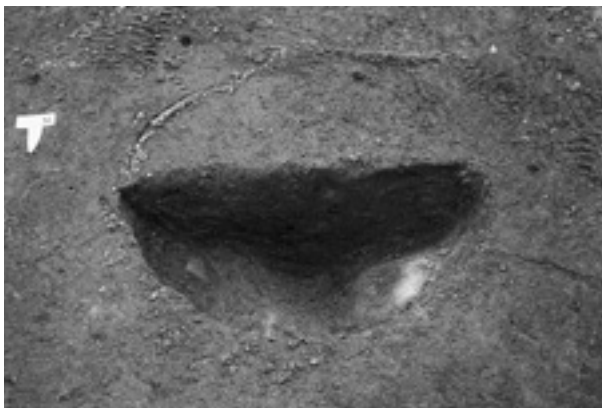
ＳＩ31カマド検出状況（北から）

ＳＩ31カマド断面（東から）

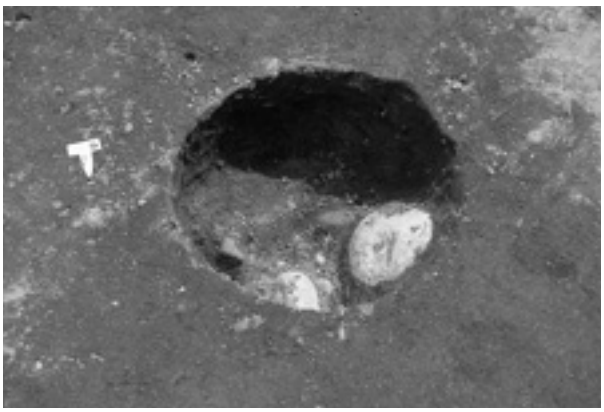
ＳＰ35断面（西から）



ＳＰ35完掘状況（西から）



ＳＰ36断面（北から）



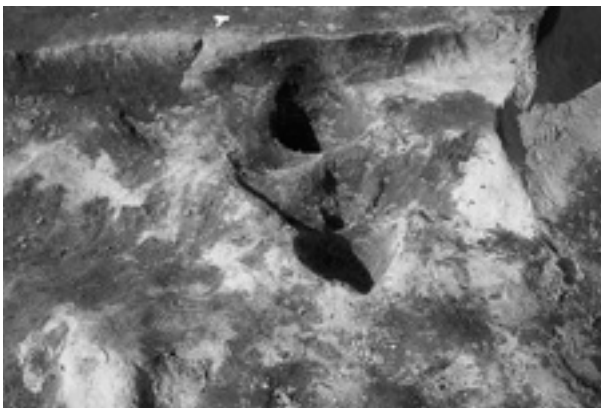
ＳＰ36完掘状況（北から）

ＳＩ40・ＳＸ34断面（南から）

ＳＩ40礫・遺物出土状況（南から）

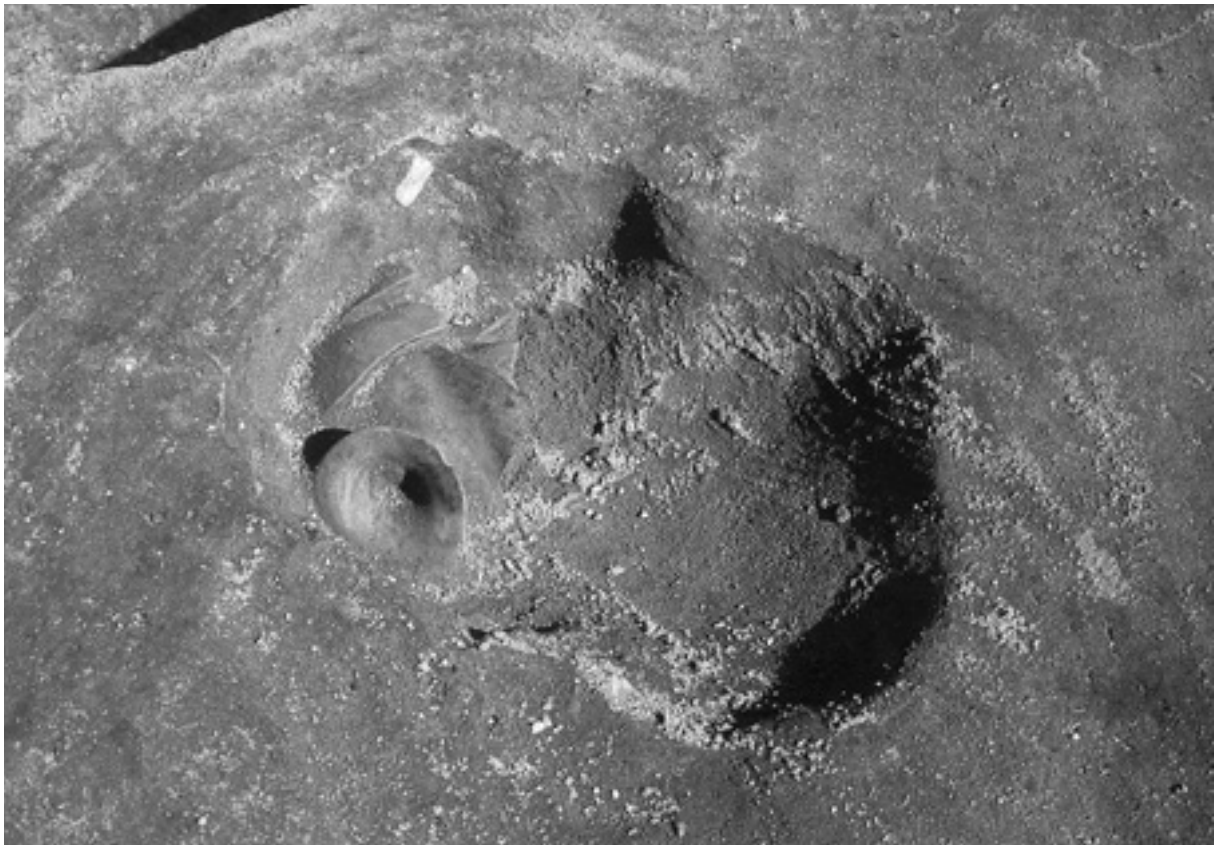
ＳＩ40精査状況（南から）

ＳＩ40内ピット断面（東から）

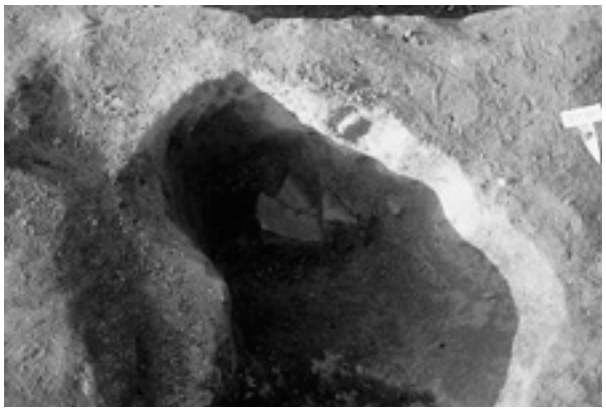


ＳＩ40内ピット完掘状況（南から）

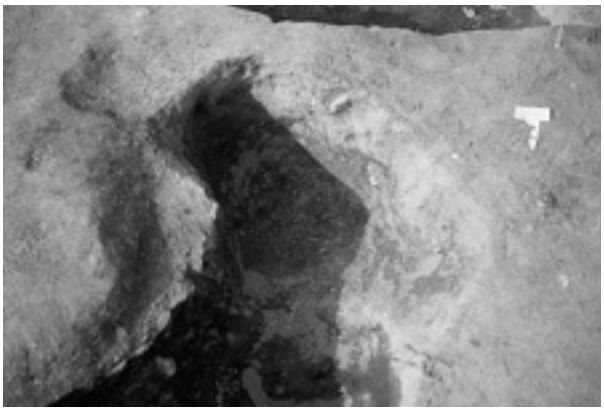
図版26



ＳＰ41遺物出土状況（南から）



ＳＰ41底面遺物出土状況（南から）

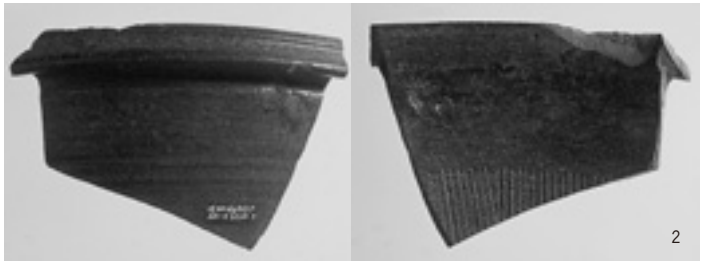


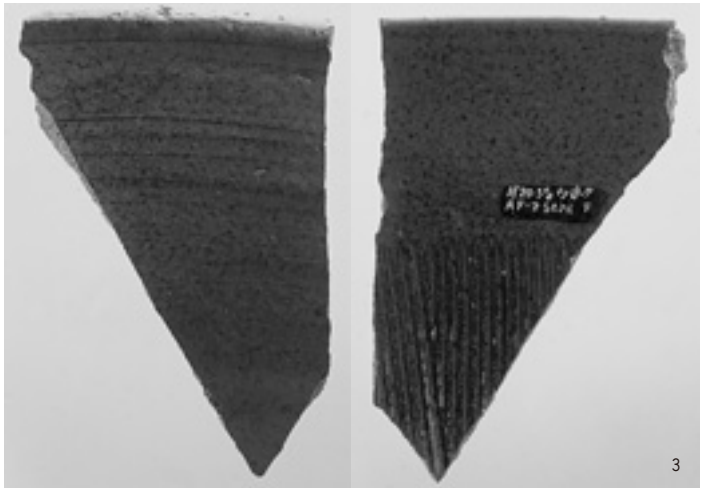
ＳＰ41完掘状況（南から）

ＡＫ～ＡＭ－２Ｖ層完掘状況（北から）

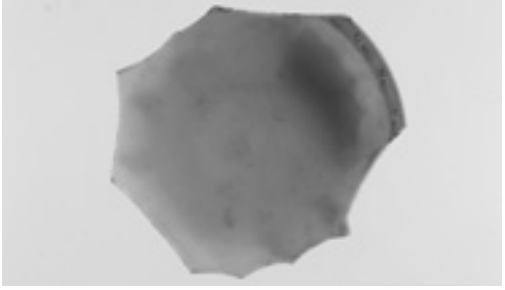
ＡＫ～ＡＭ－２Ｖ層完掘状況（西から）

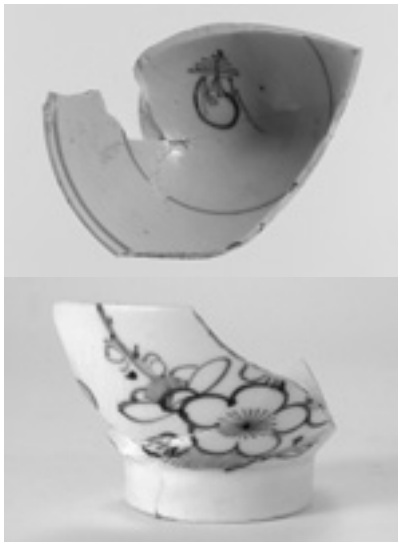
1


2


3

4

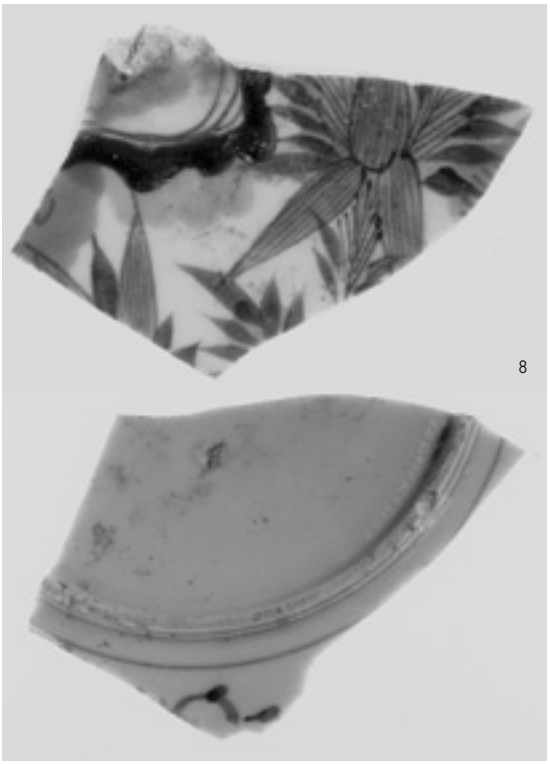




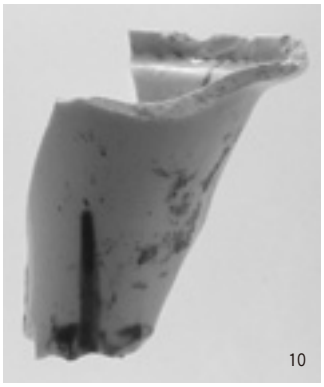
6

7

図版28


8

9


10

11

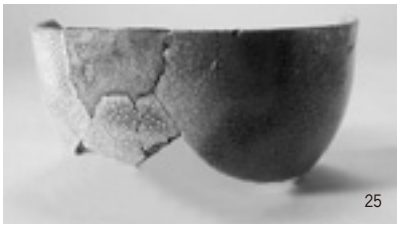
12

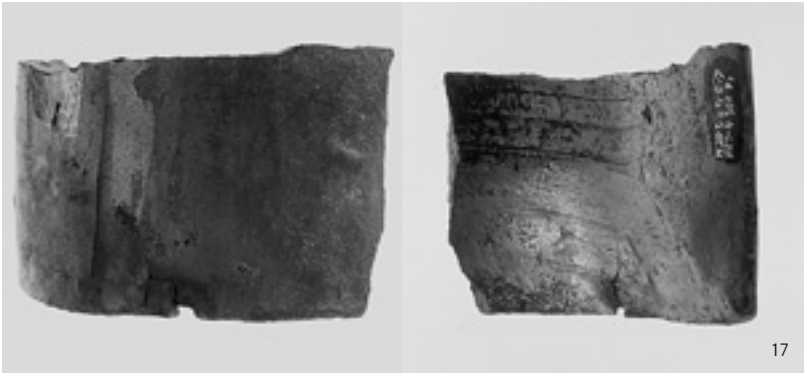
16

13

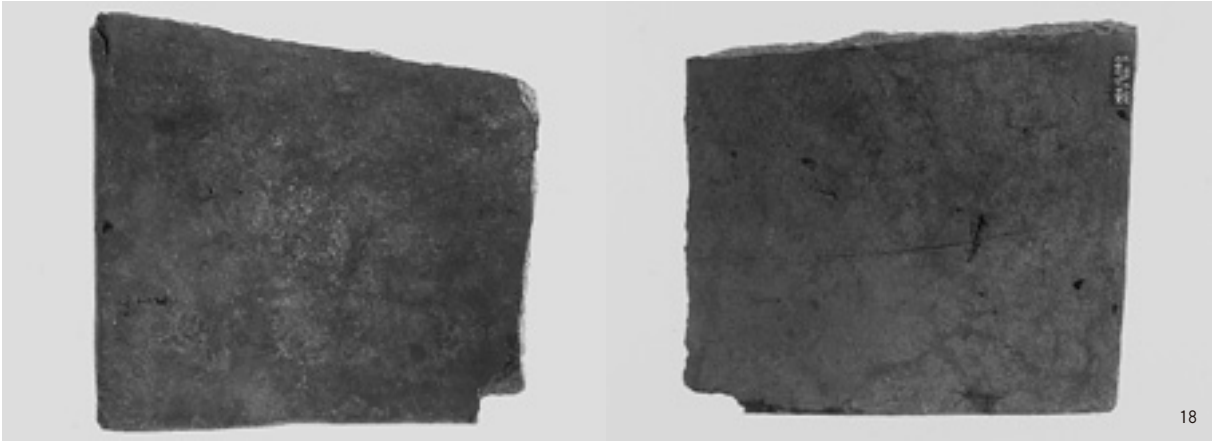
14

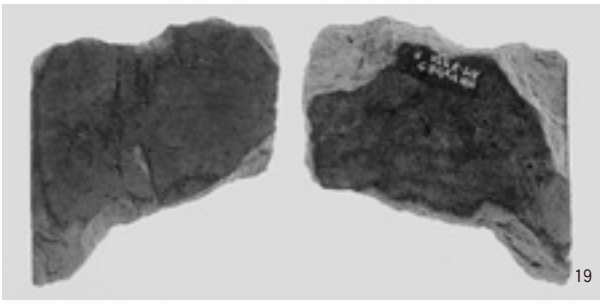
15

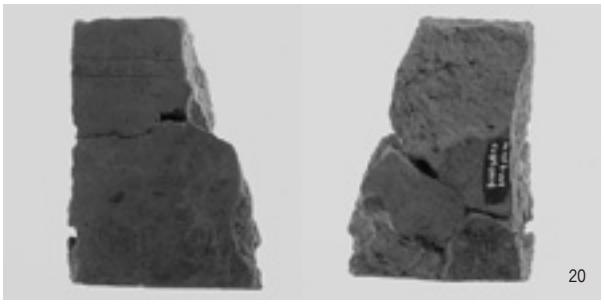

25

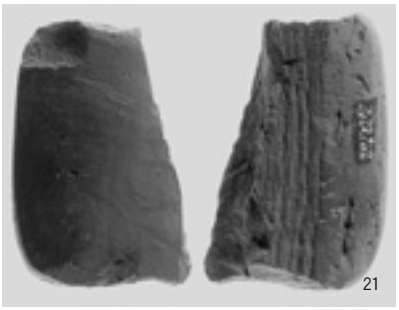

17

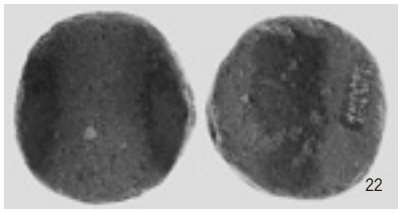
26


18

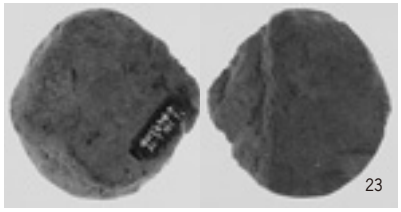

19


20

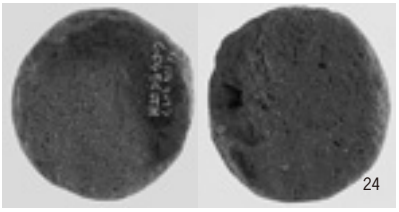

21


22

27

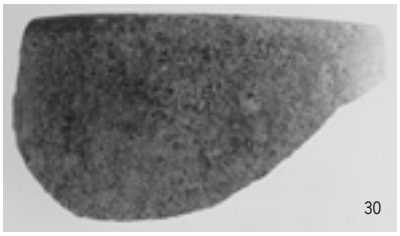

23

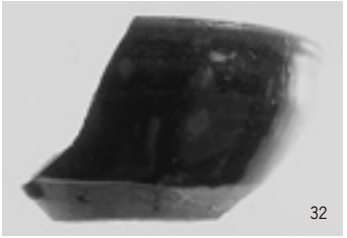
28

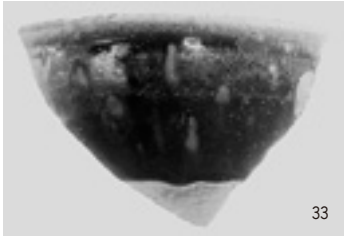

24

29

31


30

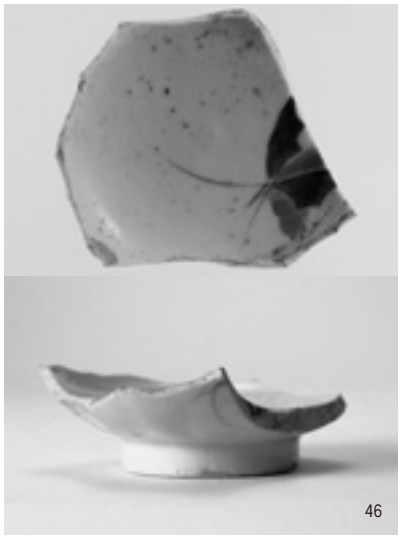

32


33

38

40

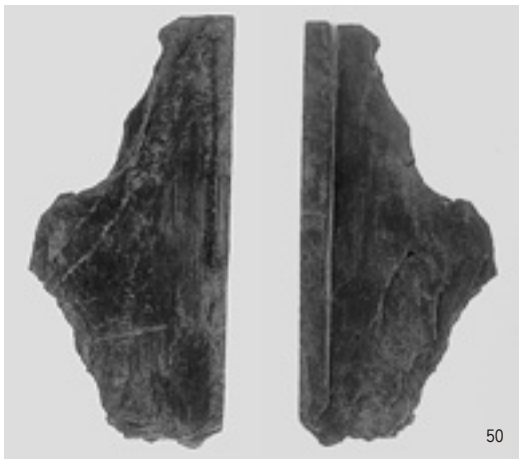
図版30

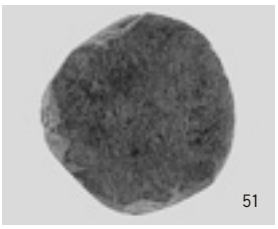

46

48

49

47


50


51

54

52

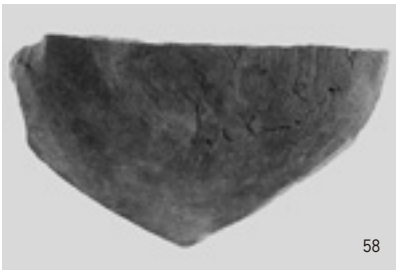
53

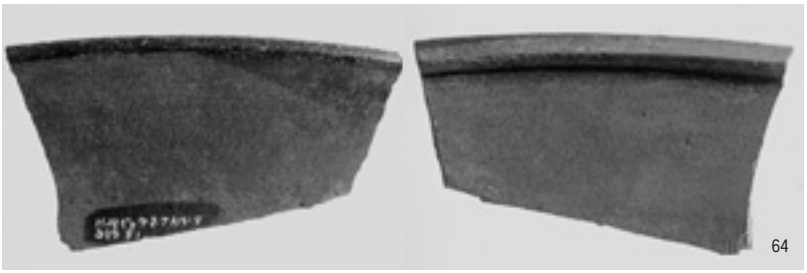
55

56

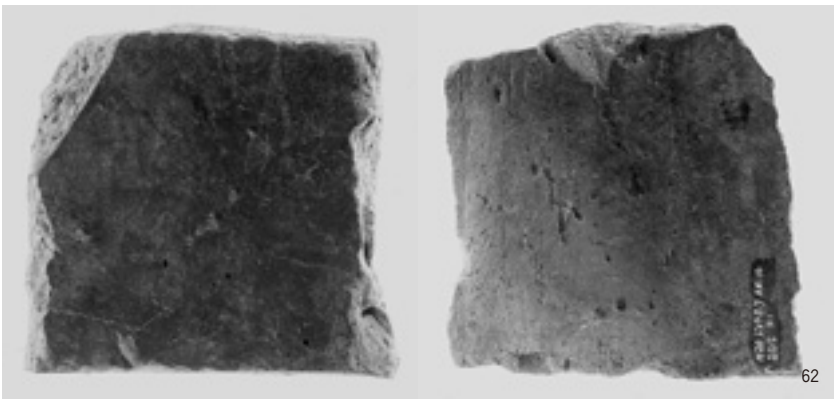
57

図版32

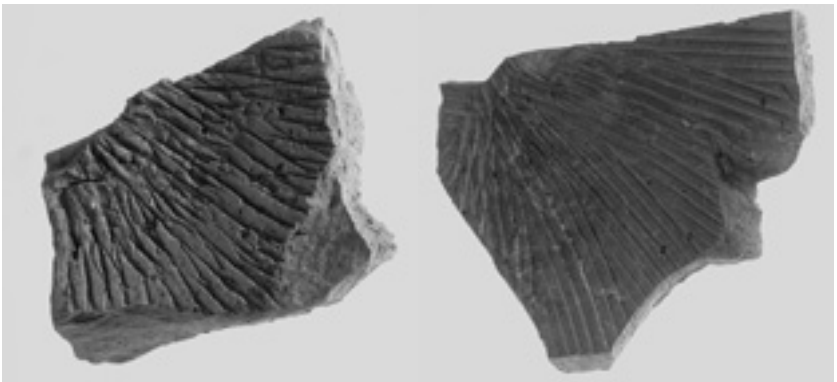

58


64

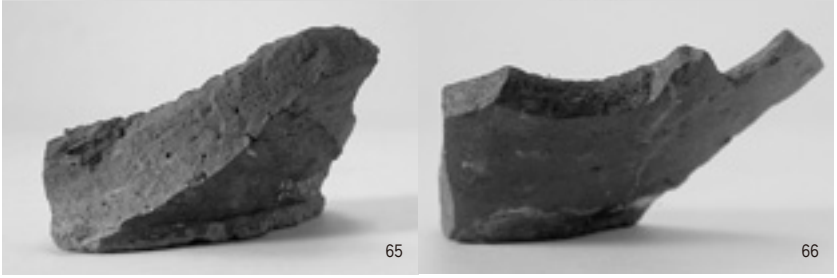
59

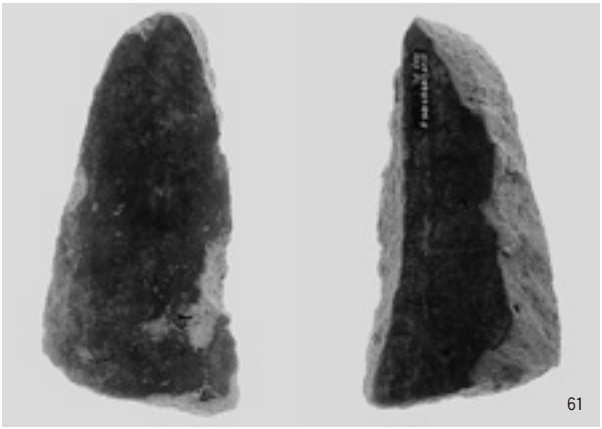

62

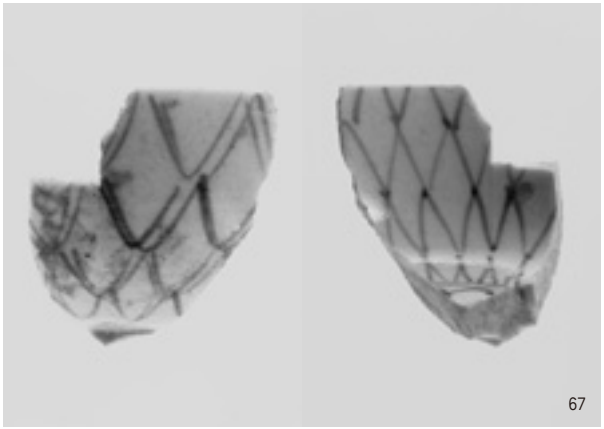
60

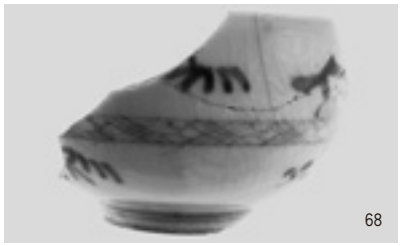


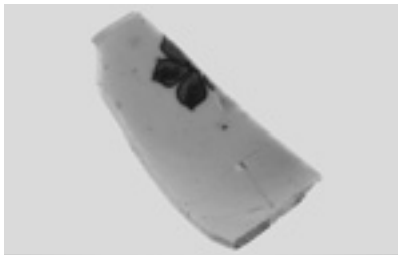
63

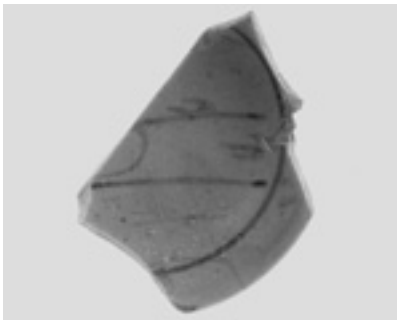

65 66

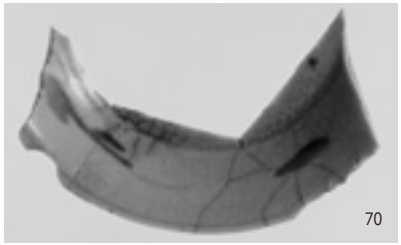

61


67

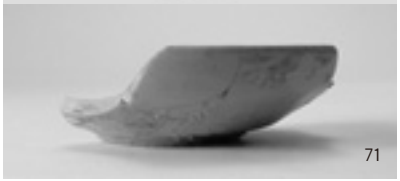

68






70

69


71

72

73

74

75

76

77

78

79

80

81

82

83

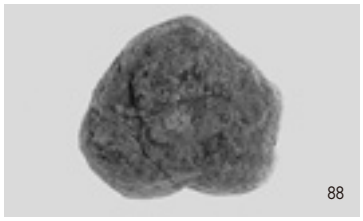
84

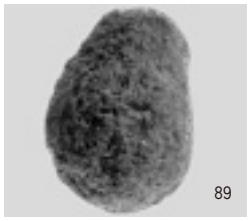
85

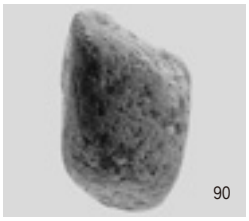
86

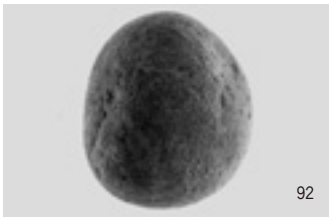
87

図版34


88


89


90


92

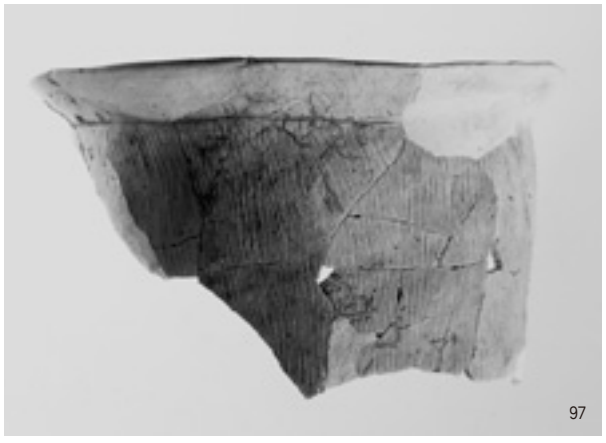
91

93

94

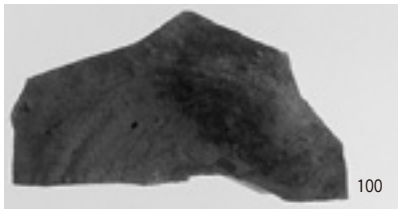
95

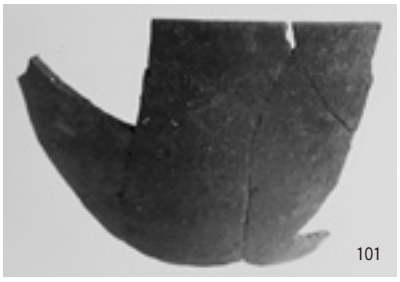
96


97

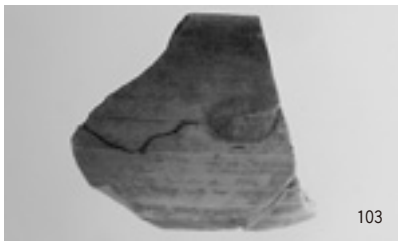
98

99


100


101

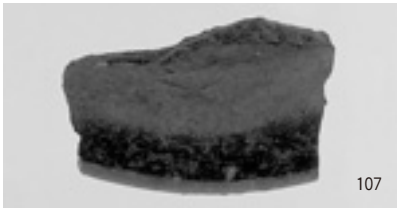
102

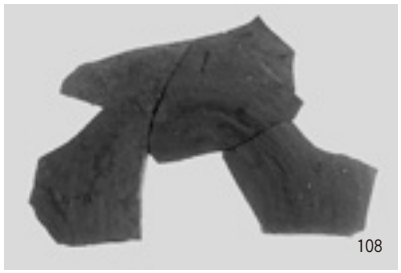

103

105

104

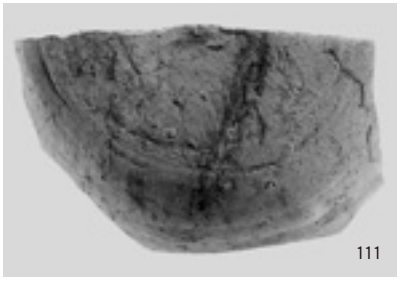
106

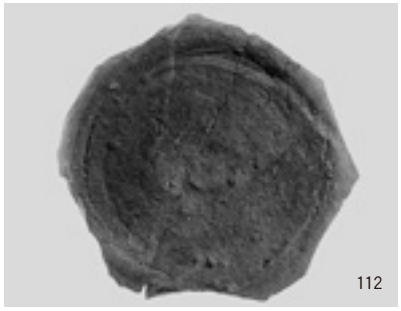

107


108

109

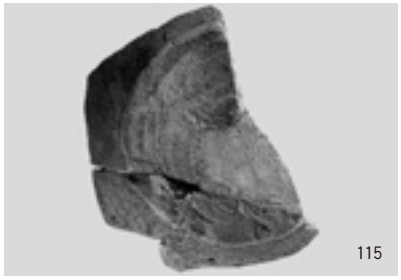
110


111

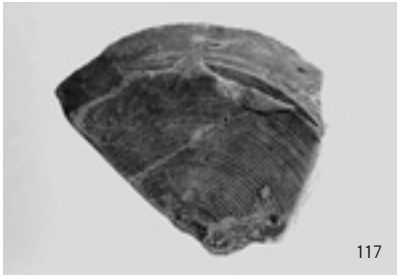

112

113

114


115

116

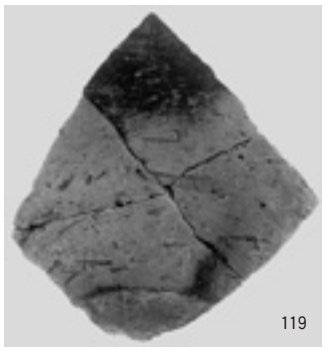

117

図版36

118

120

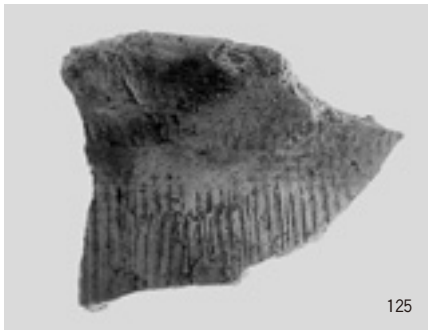
122


119

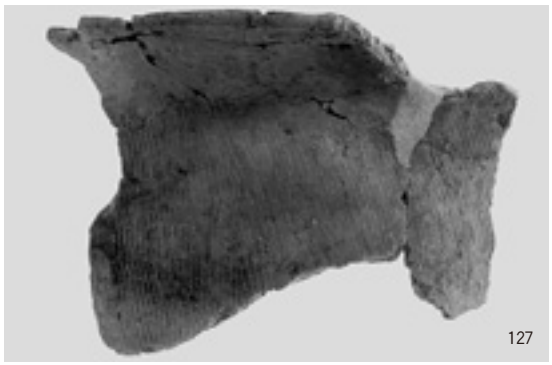
121

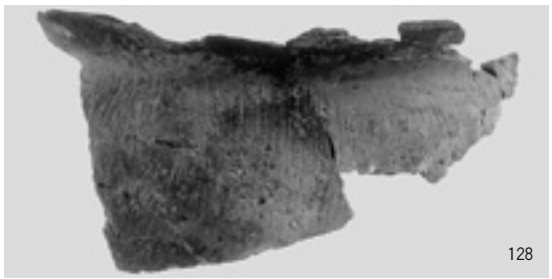
123

124


125

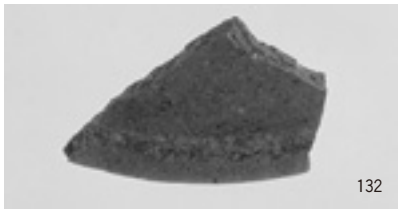
126

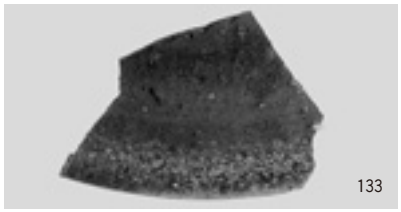

127

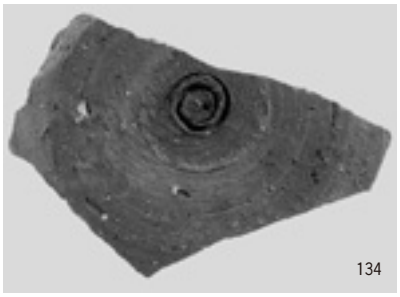

128

131

130


132


133


134

135

136

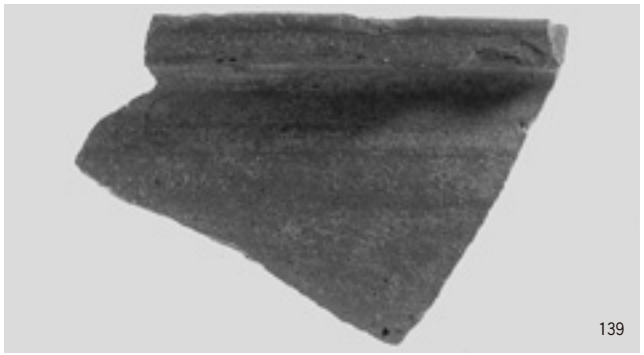
141

137

138

129

140


139

142

143

144

図版38

145

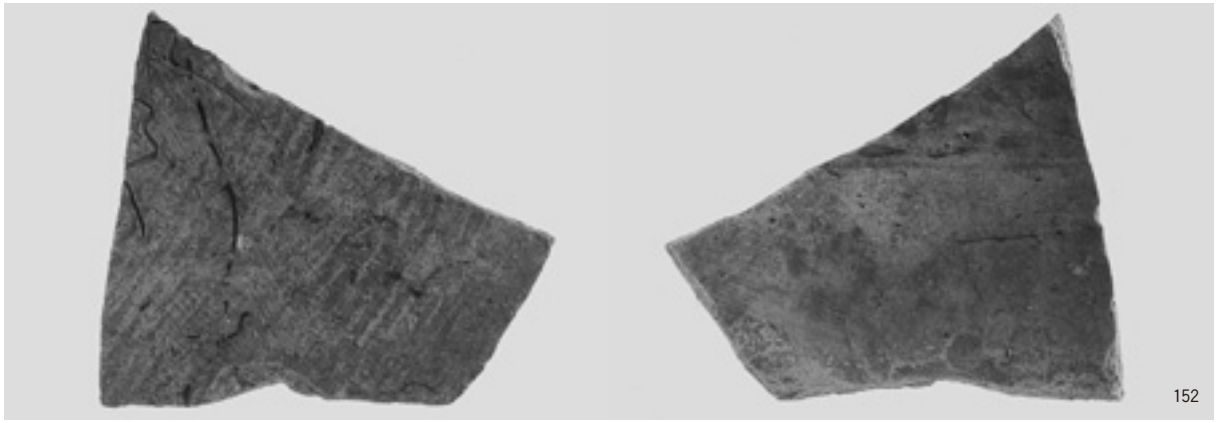
149

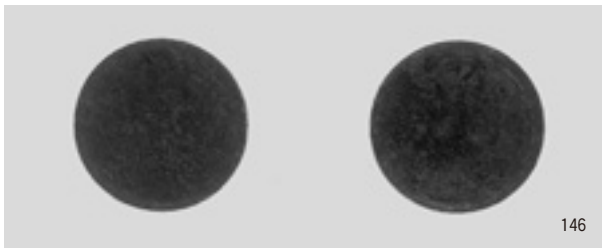
150

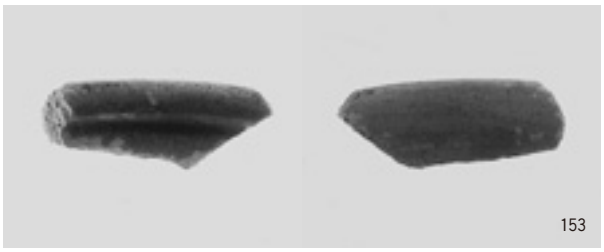
148

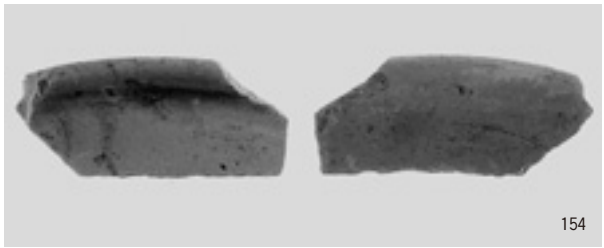
151

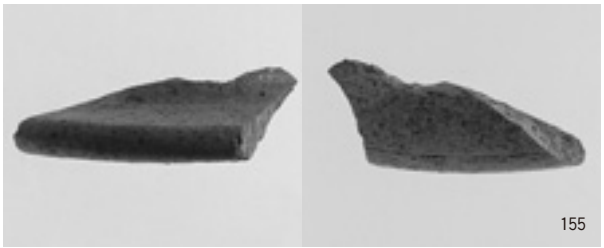
156

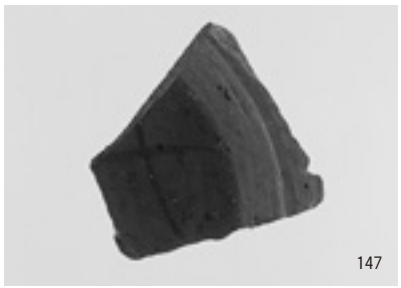

152

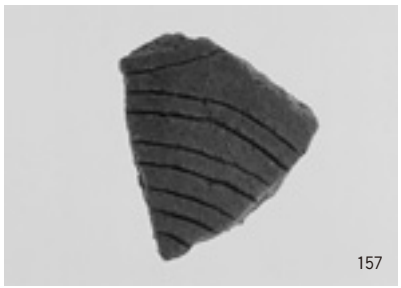

146

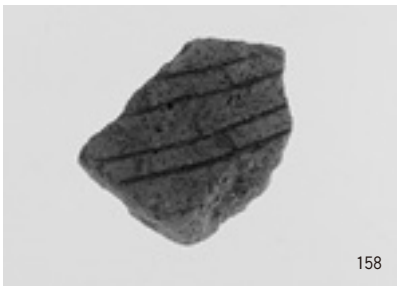

153

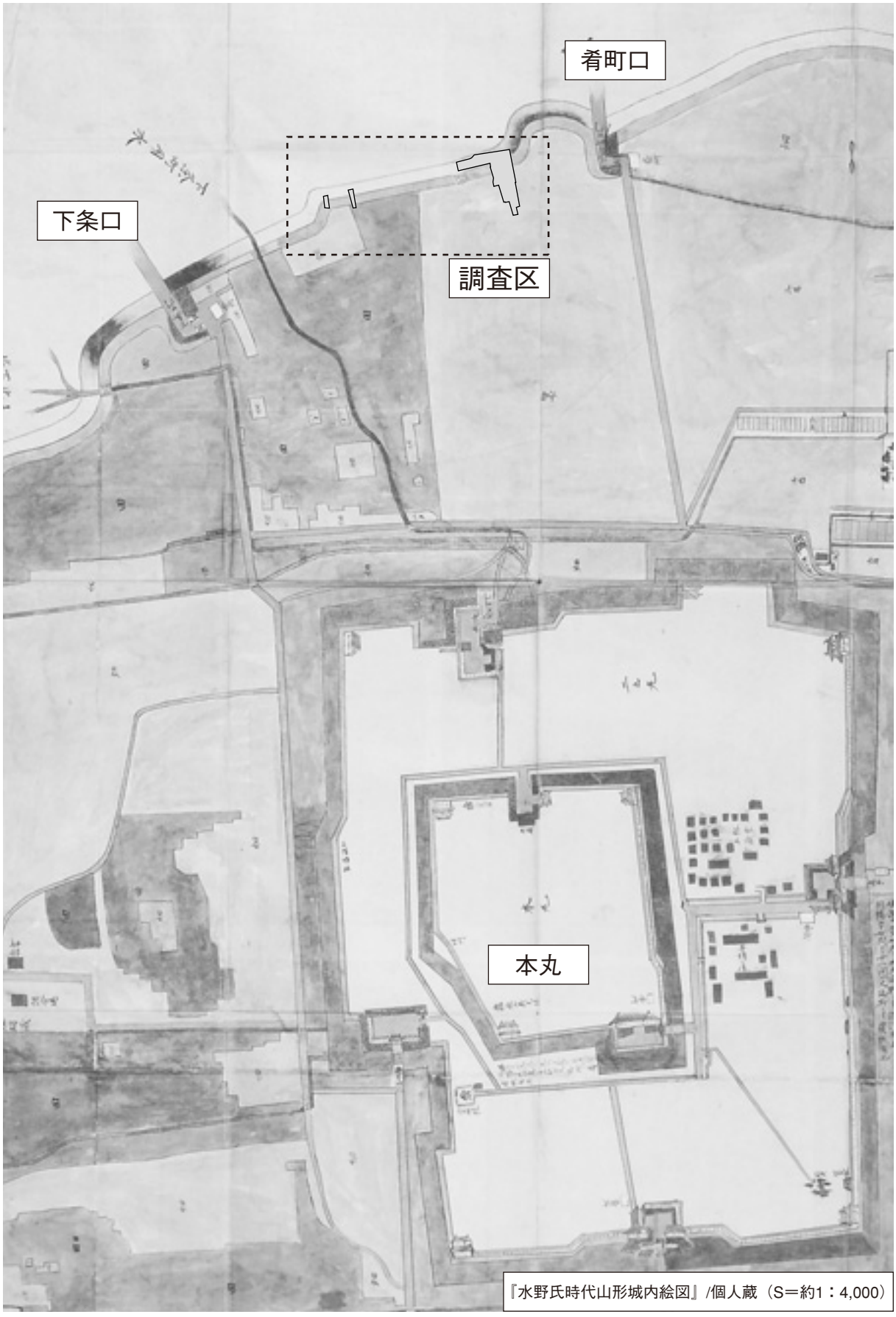

154


155


147

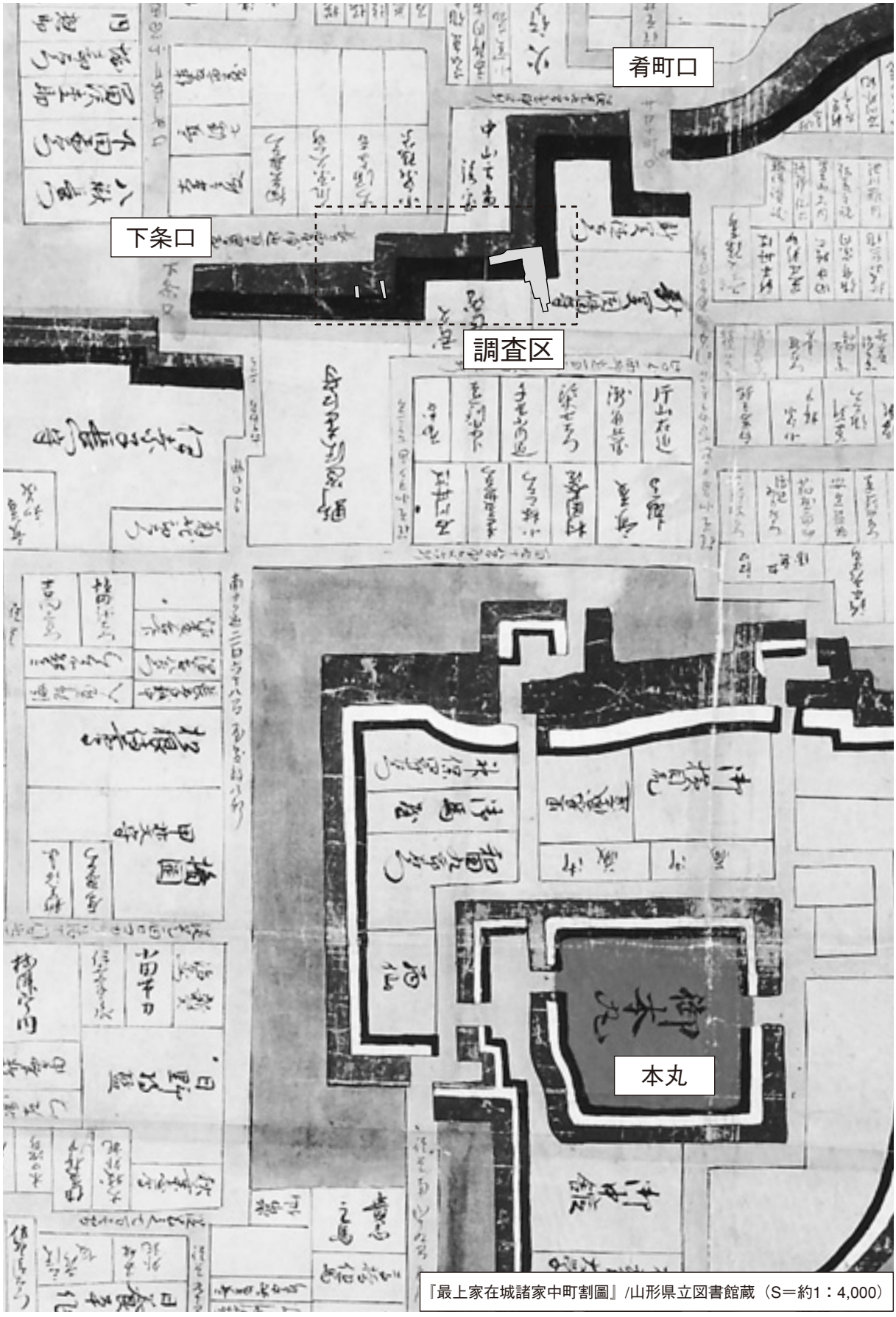

157


158



『水野氏時代山形城内絵図』/個人蔵（S＝約1：4,000）

図版40



『最上家在城諸家中町割圖』/山形県立図書館蔵（S＝約1：4,000）

山形県山形市埋蔵文化財調査報告書第30集

山形城三の丸跡
（城北遺跡）
発掘調査報告書

2009年３月31日　発行

発行　山形市教育委員会
〒990－8540　山形市旅篭町二丁目３番25号
電話　023－641－1212
印刷　山形印刷株式会社
〒990－2323　山形市桜田東三丁目７番31号
電話　023－622－6291